

Kodak Gray Scale



© Kodak, 2007 TM: Kodak

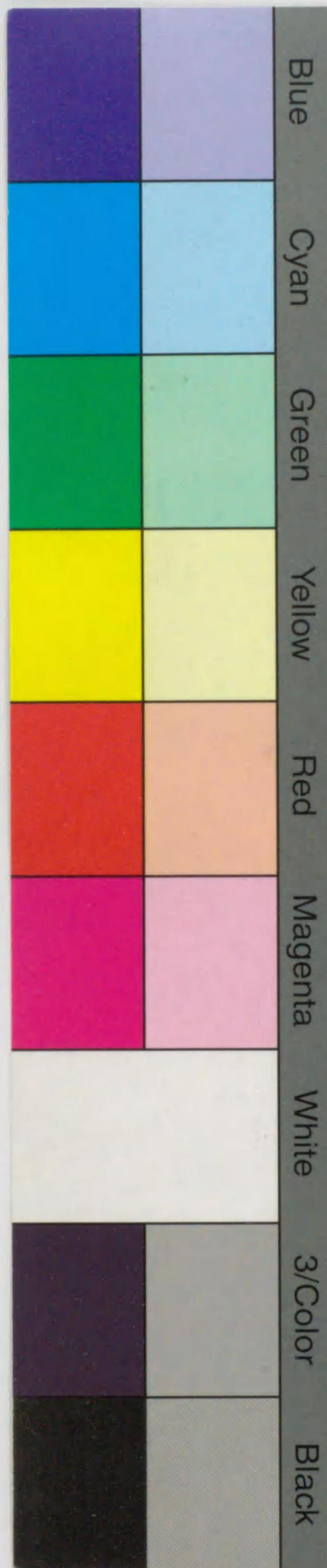
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



Inches 1 2 3 4 5 6 7 8
cm 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19

Kodak Color Control Patches

© Kodak, 2007 TM: Kodak



Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

601
6

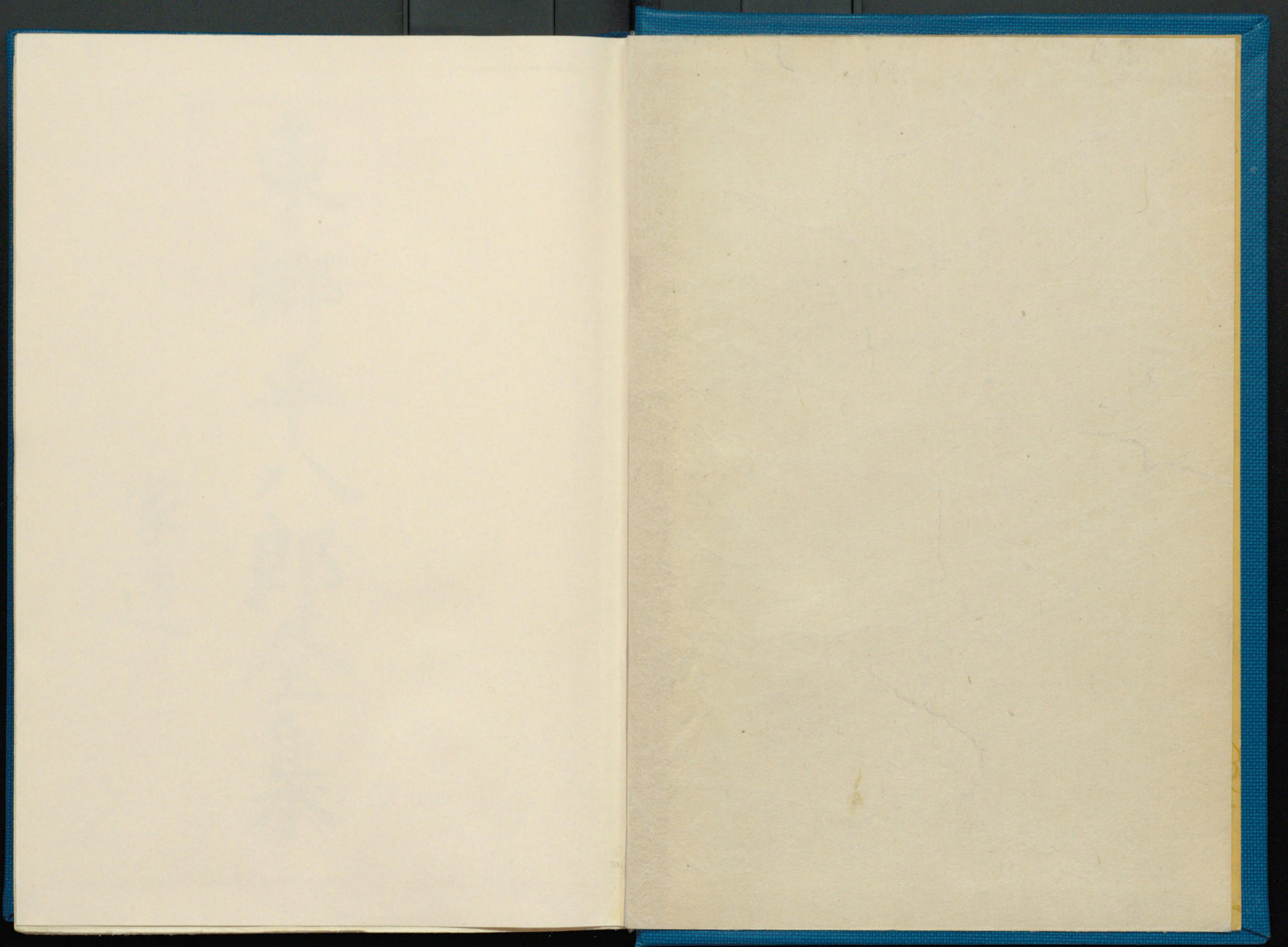
601-16
1200501530218

360



2L-70





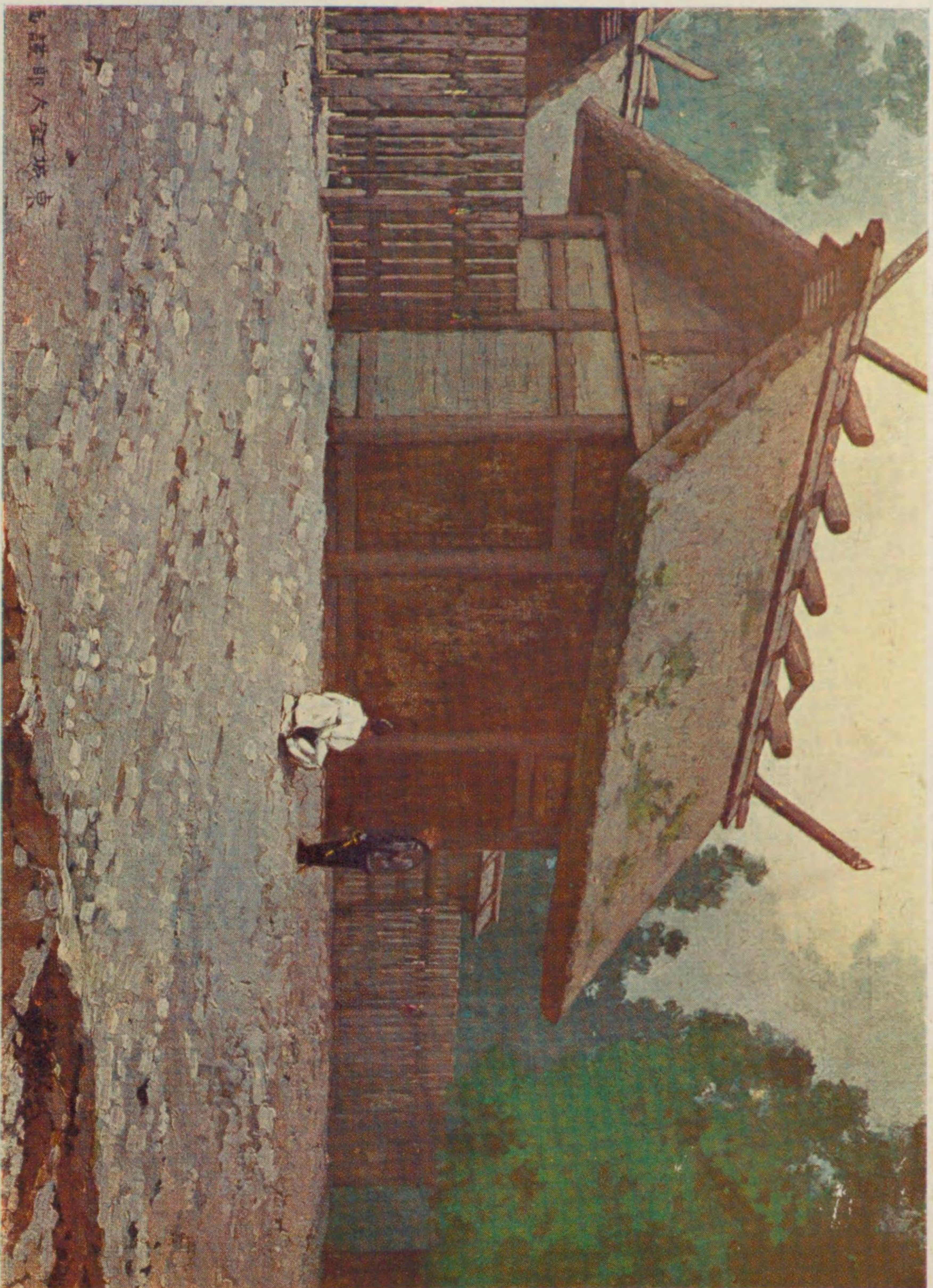
KIZL-70



東郷平八郎全集

家達





皇國守人城

明治三十八年十月十九日、東郷大將は日露戦争凱旋の途中、艦隊を伊勢灣に停め、伊勢大廟に詣り、皇國守護の靈を奉謝祈禱せる景。(東郷元帥邸藏、東郷鉦太郎謹識)

UNIVERSITY OF TORONTO LIBRARY

601-16

東郷平八郎全集 第三卷 目次

寫眞及眞蹟

三笠艦上の攝政殿下と東郷元帥	(一)
春日艦乗組員(二種)	(二)
日露戦役直前直後の三笠艦	(三)
合筆の「勝軍」と艦上の東郷大將	(四)
伊勢神宮參拜記念と三笠艦の失火	(五)
三笠艦保存記念式場の諸將	(六)
菊花章首飾と大妻高女退出	(七)
威風海を壓す(二種)	(八)
上田城址に於ける三將軍	(九)
三笠亭の内外觀	(一〇)

目次

一



映畫「家庭に於ける東郷元帥」……………(一〇)

質素なる元帥邸……………(一四)

伊太利東洋艦隊司令長官と元帥……………(一六)

御大典參列の海軍諸將星……………(一七)

濟南事件會議出席と御大典參列前の元帥……………(一八)

昭和三年度雲龍會の會合……………(一九)

軍縮全權一行の送別會……………(二〇)

三笠艦上の記念撮影……………(二二)

年賀のため參内せんとする元帥……………(二三)

東郷會の祝辭を受くる元帥と軍縮回訓案經過報告を受くる元帥……………(二四)

少年東郷會發會式(四種)……………(二五)

小國民の萬歳を浴びる元帥……………(二七)

元帥の書簡眞蹟(五種)……………(二八)

鳴下清八氏への感謝狀……………(三〇)

日本海々戰直後の眞蹟(二種)……………(三一)

二氏の祕藏する眞蹟……………(三三)

元帥の讚(四種)……………(三四)

小笠原長生、久保田金五郎、有田音松諸氏祕藏の眞蹟數種……………(三六)

日蓮柱の碑……………(四〇)

元帥の銅像……………(四五)

大書「慶」……………(四六)

古葉眞と常陸丸記念碑……………(四七)

鈴木氏藏の眞蹟……………(四八)

眞蹟(二種)……………(四九)

戦後の訓示……………(五一)

眞蹟(二種)……………(五三)

東郷大將米國訪問記……………(五五)

軍艦の持逃げだけは困る……………(五七)

今迄米國の歴史にない程の歓迎……………(五九)

東郷大將の渡米と日米親善……………(六〇)

加州の排日家は覺りの眼を開け……………(六一)

排日論者は此の際大に謹め……………(六二)

英雄崇拜に國境なし……………(六三)

日本のヂューエー提督……………(六五)

寡言者大事を遂行する……………(六九)

短刀を部將に示して「左様なら」……………(七〇)

日米戦争は荒唐無稽の謬論……………(七一)

世界一の御馳走を供したい……………(七三)

一見したところ軍人らしくない……………(七四)

大旅館ニッカー・ボツカーの優遇設備……………(七五)

東郷大將の愛人……………(七七)

大將の訪米は日米交戦熱のよき緩和濟……………(七九)

紐育到着前の狀況……………(八〇)

公表せられたる旅行豫定……………(八一)

ルシタニア號より米國民に呼びかける……………(八六)

セークスピアよりも澤山の名句……………(八九)

出征に臨み唯一言……………(九三)

凱旋後自分の寫眞を買取る……………(九五)

米國も斯くの如き海の英雄が欲しい……………(九八)

白聖館に於ける珍しい饗宴……………(一〇一)

敬稱は餘計なことだ……………(一〇二)

二つの土産……………(一〇五)

東郷大將始めて米土を踏む……………(一〇七)

ネルソンよりも東郷に學ぶ處多し……………(一一三)

英米佛仲裁と東郷大將の來訪……………(一二六)

大將はネルソン崇拝家……………(一八)

大將は或る銀行家と酷似……………(二三)

紐着前後の光景……………(二六)

大將は英語で話さない……………(三三)

ルシタニア號船内の挿話……………(三五)

東郷大將に對する鋭き觀察……………(三八)

寫真班攻撃は戦争より苦しい……………(四六)

平和大使東郷大將……………(五五)

東郷大將を標準として偉人の鑑別法……………(五九)

双方で答に困る……………(六一)

日本は艦隊よりも東郷大將を大事がる……………(六二)

兩國の友情を厚くせよ……………(六五)

大將は日本未來の國運を定むる人……………(六七)

東郷の名は未だに覺えてゐる……………(六九)

大將の聲明は多言に勝る好意……………(七一)

彼れは何れの點に於ても第一人者……………(七四)

米國は裝甲艦を日本に賣つた事はない……………(七五)

歡迎もその度が過ぎるな……………(七六)

戦時中日本の外務省は三笠艦上に……………(七八)

東郷大將が艦隊を率ゐて來襲せば……………(八二)

世界第一の名提督……………(八四)

東郷、デュエー兩提督の會見は見ものであらう……………(八六)

由來英雄は小柄なもの……………(八七)

米國の新聞雜誌に表れた東郷大將……………(八九)

紐育邦字新聞の代表的歡迎の辭……………(九一)

一見したところ之が勇將か……………(九二)

近代的海戰の實驗者……………(九三)

紐育から華府迄の道中記……………(九九)

多忙なプログラム……………(三七)

忙しくは考へる暇がなからう……………(三九)

日本と勝敗を争ふことはあらう……………(三二)

大将の爲なら何でもない……………(三三)

東西文明の融合の偉人……………(三四)

平和大使東郷……………(三九)

講和談判の場所……………(四一)

ペルリ提督に對する御禮の使……………(四二)

何事にも趣味ある人……………(四六)

親しみ深い日本語「東郷」「萬歳」……………(四八)

日本海々戰の捷利は偶然に非ず……………(四九)

八月五日のプログラム……………(五三)

六歳のトーゴ……………(五三)

大禮服の悲喜劇……………(五五)

東郷大将の華府觀……………(五七)

タフト氏の歡迎の辭……………(五九)

華府に於ける記者との問答……………(六一)

病氣も艦橋に上れば癒る……………(六五)

日米戰爭の話は打ち切りたい……………(六八)

米國の飛行機稱讚……………(六九)

白聖館に於ける招待者……………(七〇)

大驅の大統領と小驅の大將……………(七一)

歡迎攻めは米國流の缺點……………(七六)

人生須らく軍人たれ……………(七八)

眞夏の休暇季節を一變……………(八〇)

ワシントン展墓の記……………(八二)

華府市中見物……………(八五)

アナポリス海軍兵學校視察……………(八六)

敵艦隊を海底に送るは恰も皿を階下に滑らすが如し……………(二九〇)

ワシントン展墓は對米好感……………(二九二)

同 展墓の儀禮……………(二九三)

東郷大將原稿を探す……………(二九六)

東郷大將の飛行機論……………(二九七)

東郷帽子の流行……………(二九九)

東郷大將を陥落させた殊勳者……………(三〇一)

全國新聞俱樂部に於けるスピーチ……………(三〇二)

アナポリス海軍兵學校を稱讚す……………(三〇三)

英語が能きないのか……………(三〇五)

東郷大將車中によく眠る……………(三〇六)

最新式巨砲の前に立つ……………(三〇八)

スペリー提督の展墓……………(三一〇)

ワシントン墓前の歴史的光景……………(三一三)

大將の私的生活觀……………(三一四)

海 の 王……………(三一七)

朝餐招待會……………(三一九)

アナポリス海軍兵學校に於て……………(三二〇)

ペルリ提督に贈つた半鐘……………(三二三)

艦型試験所が最も興味を惹いた……………(三二四)

東郷大將の米國議院訪問……………(三二六)

ウエスト・ポイントの一日……………(三三〇)

紐育新聞俱樂部の歡迎會……………(三三一)

吾人は何故東郷大將を讚美するや……………(三三四)

前大統領訪問……………(三三六)

大將とワナメーカー氏……………(三三八)

大東郷と小トローゴ……………(三四〇)

ガヴァノアス島に於て……………(三四三)

コップ中佐の書翰……………(三四五)

逸話餘録……………(三五二)

人間東郷を描く……………(三五三)

一念元帥を動かす……………(三五八)

風呂番の寶物……………(三六三)

自らの用事は自ら……………(三六八)

元帥の誠意……………(三七〇)

元帥の和歌……………(三七一)

對露戦局經過日誌……………(三八五)

明治三十七年二月の發端日誌……………(三八七)

三月の戦局經過……………(三九五)

四月の戦局經過……………(四〇〇)

五月の戦局經過……………(四〇六)

六月の戦局經過……………(四一四)

七月の戦局……………(四二二)

八月の戦局……………(四三二)

九月の戦局……………(四四一)

十月の戦局……………(四四八)

十一月の戦局……………(四六二)

十二月の戦局……………(四七一)

明治三十八年一月の戦局……………(四八三)

二月の戦局……………(五〇八)

三月の戦局……………(五三二)

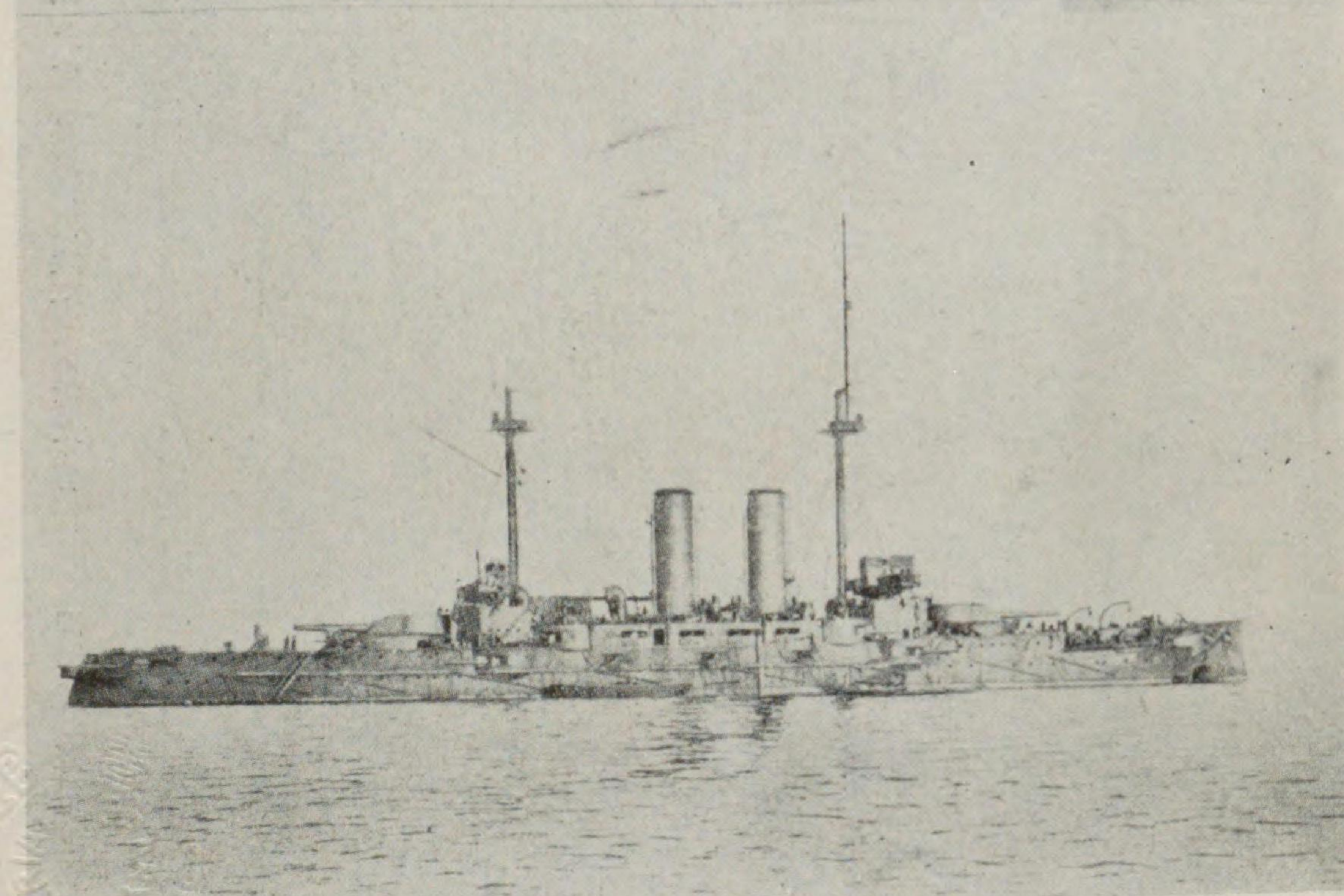
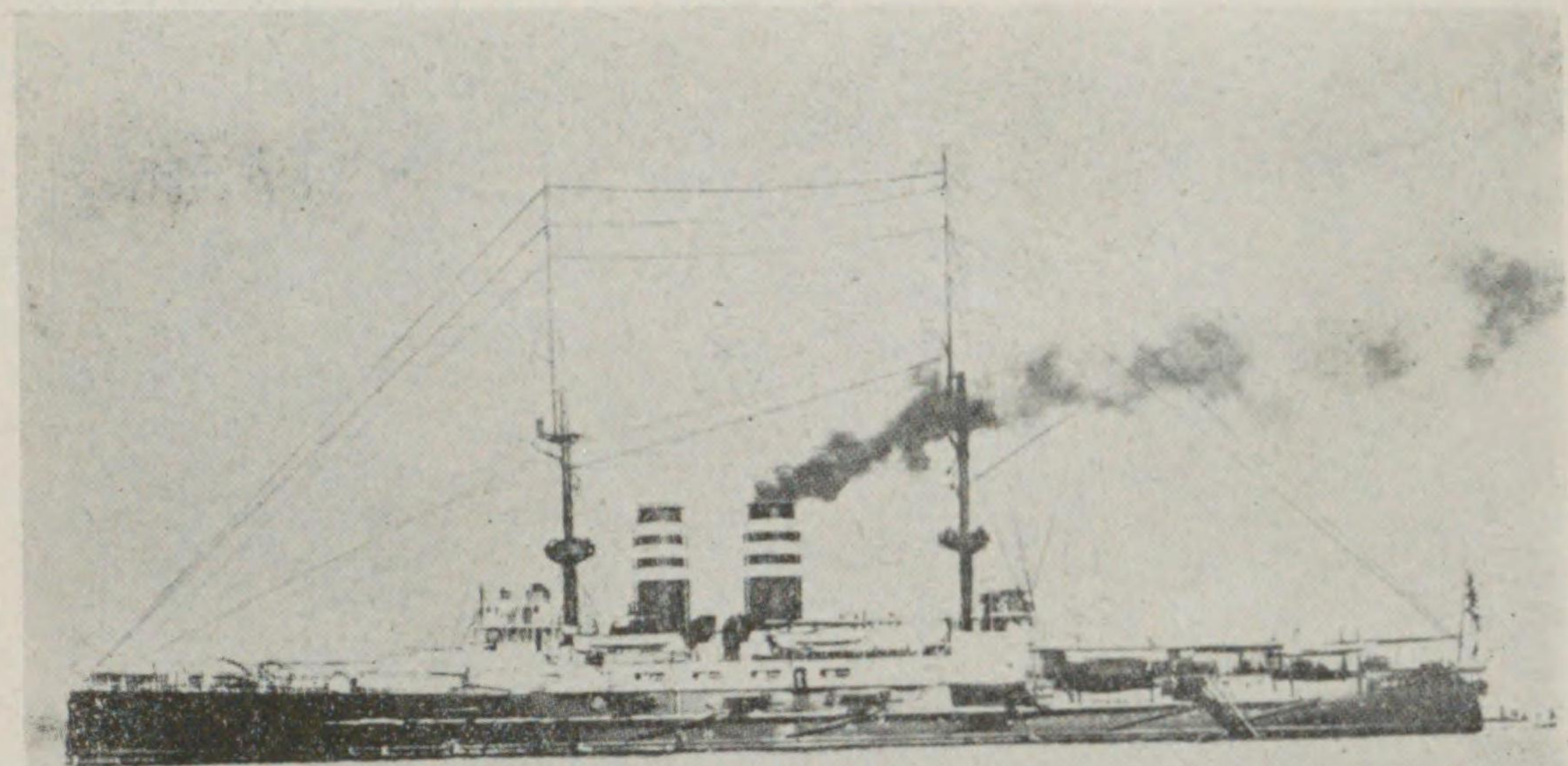
四月の戦局……………(五三三)



二月五年二和昭) 影撮御てれらへ従を帥元郷東砌の學見御艦笠三代時政攝御下陸上今
 (げ下貸御て以を旨特に日念紀軍海日七十

目次	一四
五月の戦局	(五九)
六月の戦局	(六二)
七月の戦局	(六八)
八月の媾和経過	(六八)
九月の終局経過	(六七)

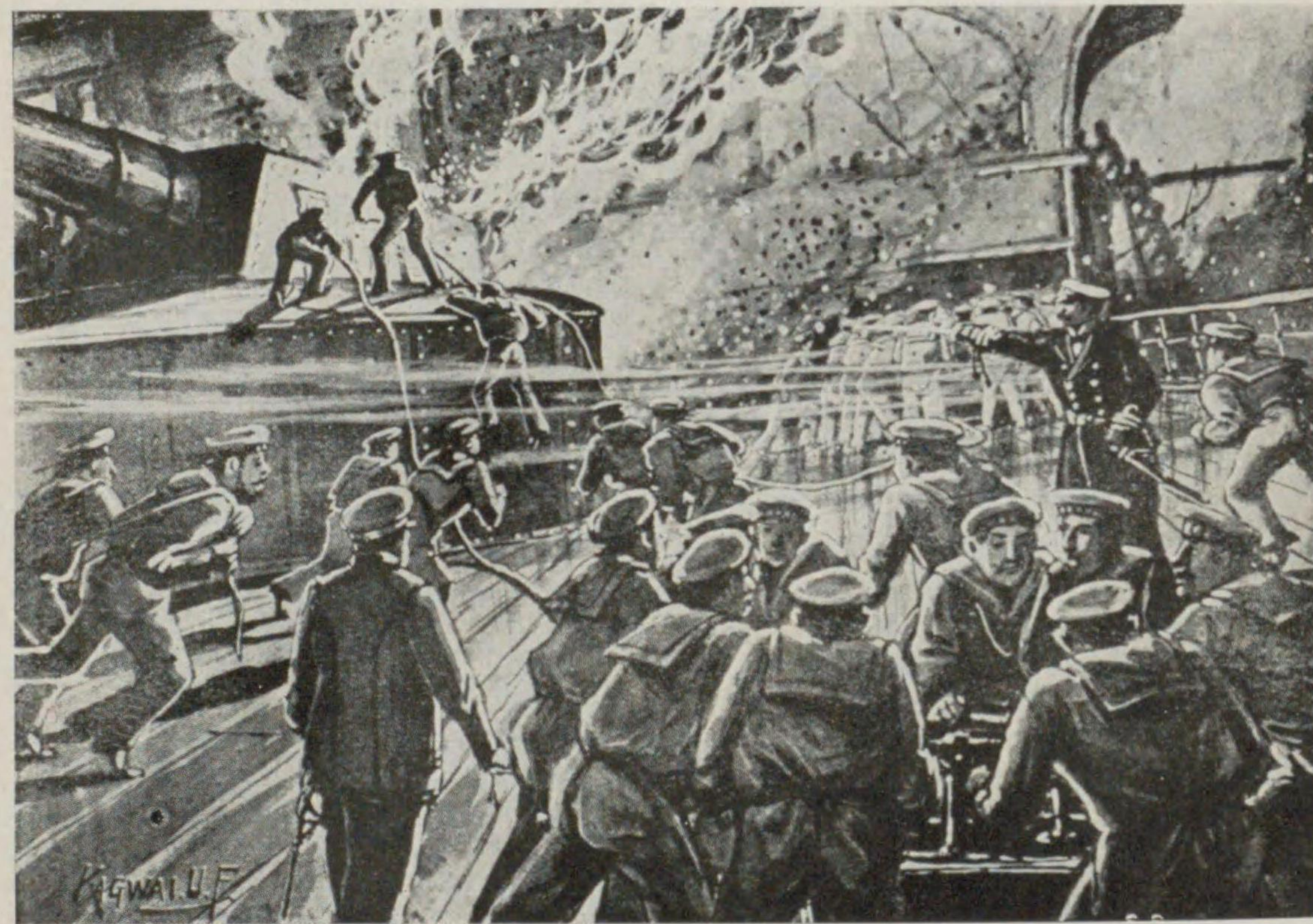
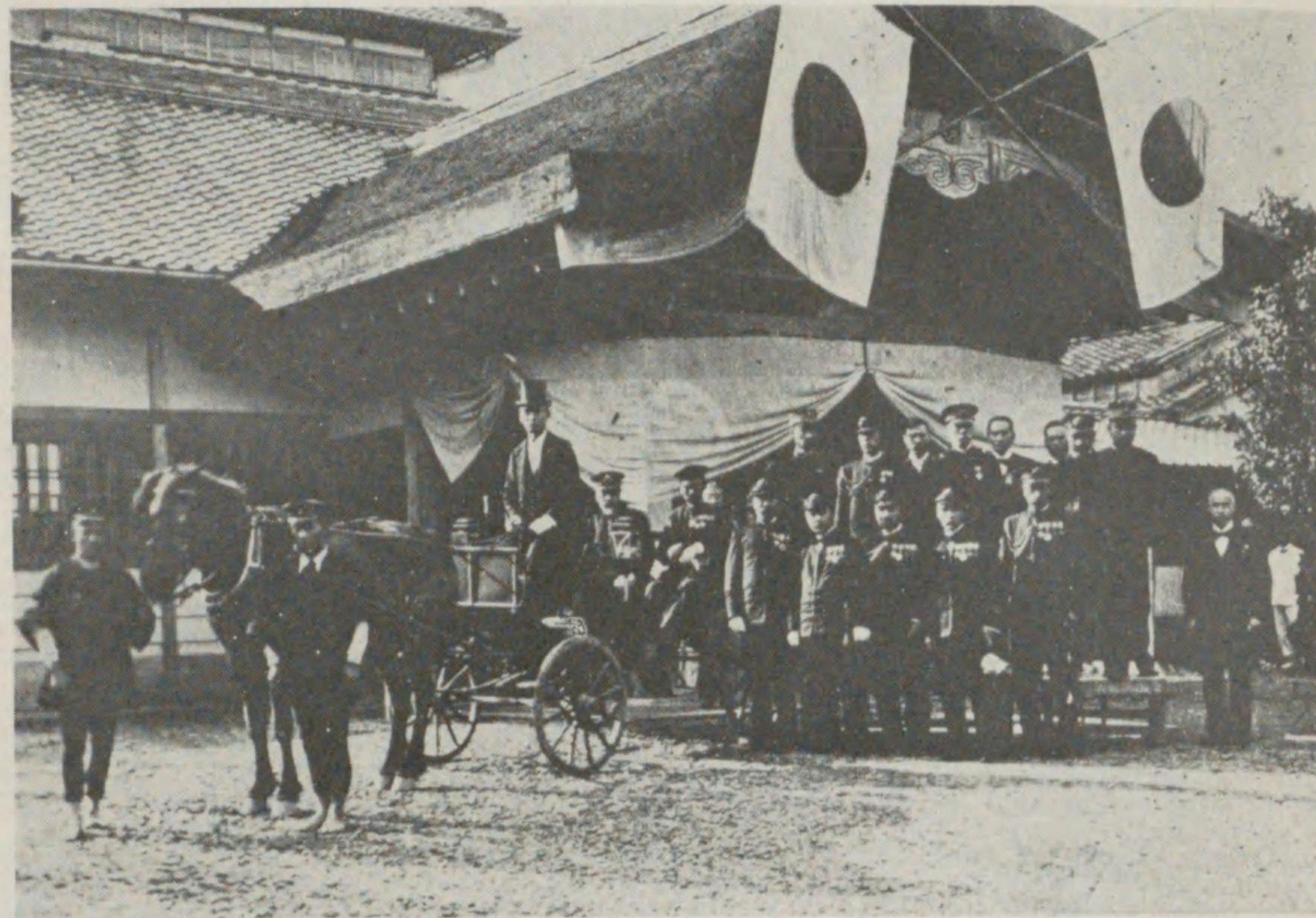
目次終



委雄の笠三艦軍艦旗隊艦合聯の前直争戦露日 (上)
 三艦軍の時當港入港軍保世佐後捷大戦海大海本日、日八、七十二月五年八十三治明 (下)
 (のもるたし折挫爲の弾敵は樁大) 笠



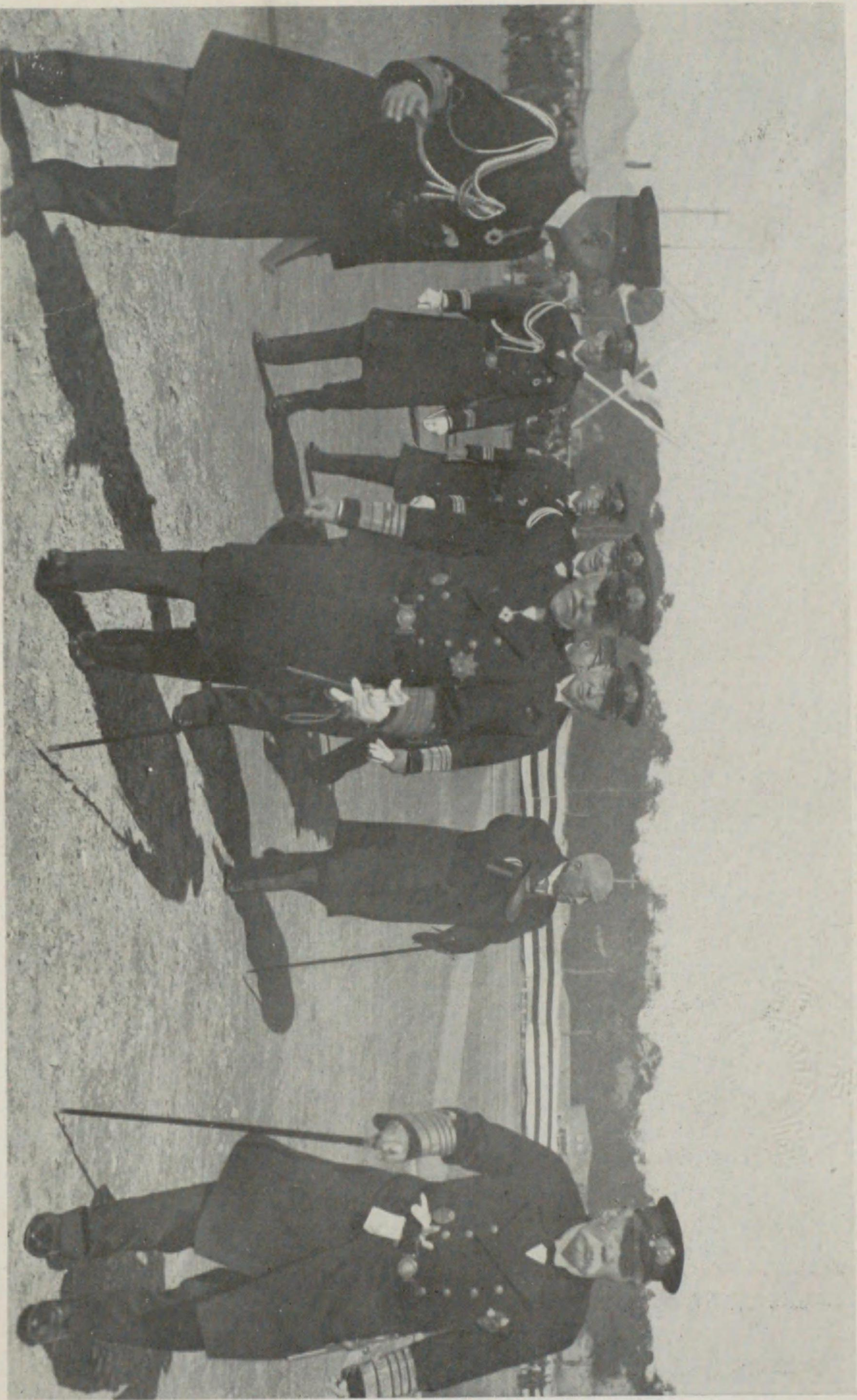
(上) 明治二年撮影、春日艦乗組員、向つて右より前田猷吉、東郷平八郎、赤塚源六、伊地知休八、隈崎佐七郎の諸氏。
 (下) 明治二年撮影、井を抱えたるが二十三歳の東郷平八郎、中央は船問屋家内、左が伊地知休八。



りよ廳司宮神めたの拜參宮神勢伊は將大郷東際の旋凱、日八十月十年八十三治明 (上)
 。景光の際るめ込乗に車馬るたれさ廻差
 。りせ没沈てし失を火に内港保世佐夜深の日一十月九年九十三は艦笠三るあ榮光 (下)
 (畫外霞原福)。ることるあ、つめ努に防消てし盡を力死が員組乗るたけつせ馳は圖



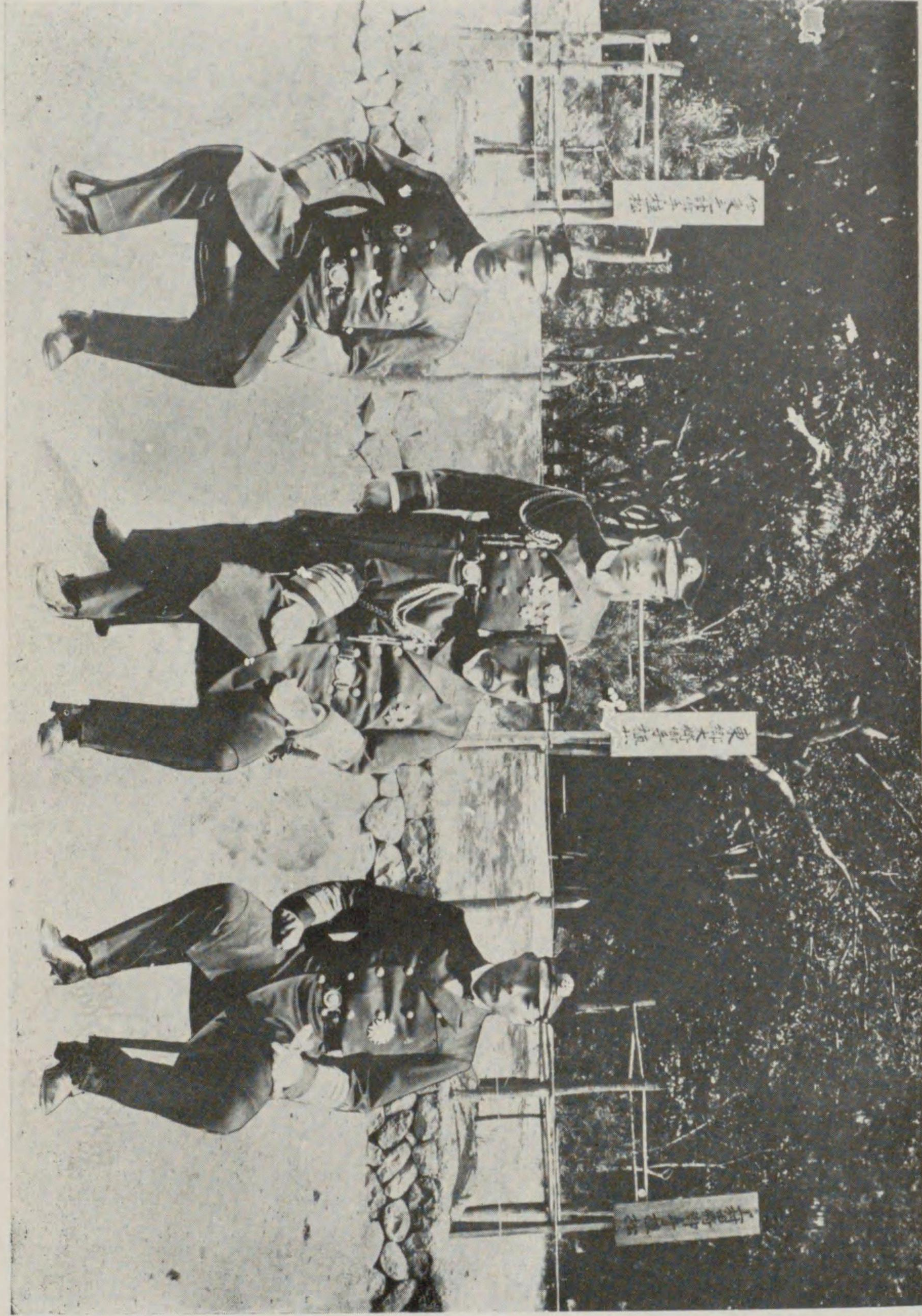
(上) 明治三十八年の春、軍令部長伊東祐亨、東郷大將合筆の「勝軍」の扁額は下總銚子町の勝軍地蔵に藏めあり。
 (下) 東郷大將旗艦三笠の甲板に立ちてバルチック艦隊の來襲を今や遅しと待ちかまえたるその威風(當時の寫眞畫報に依る)



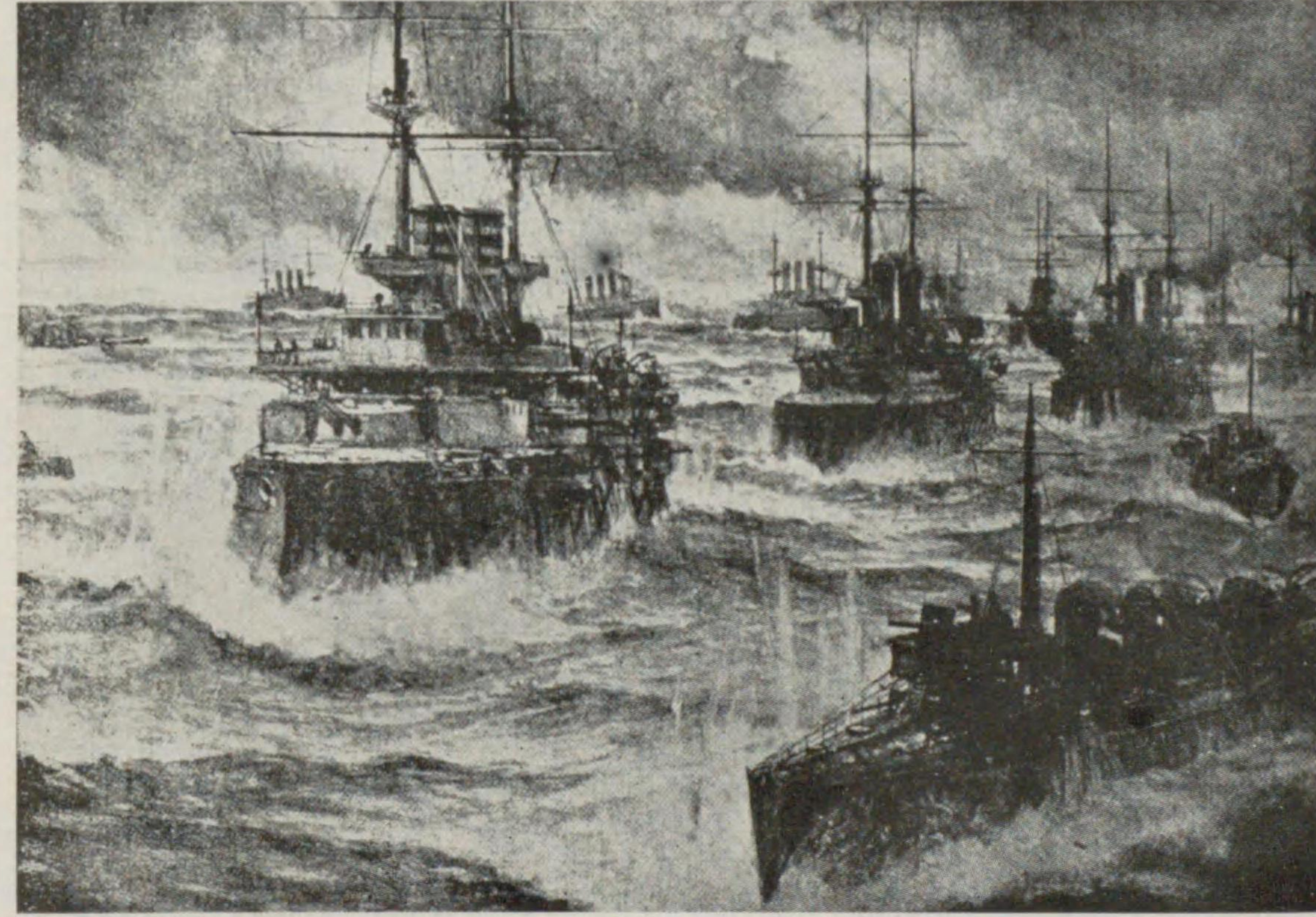
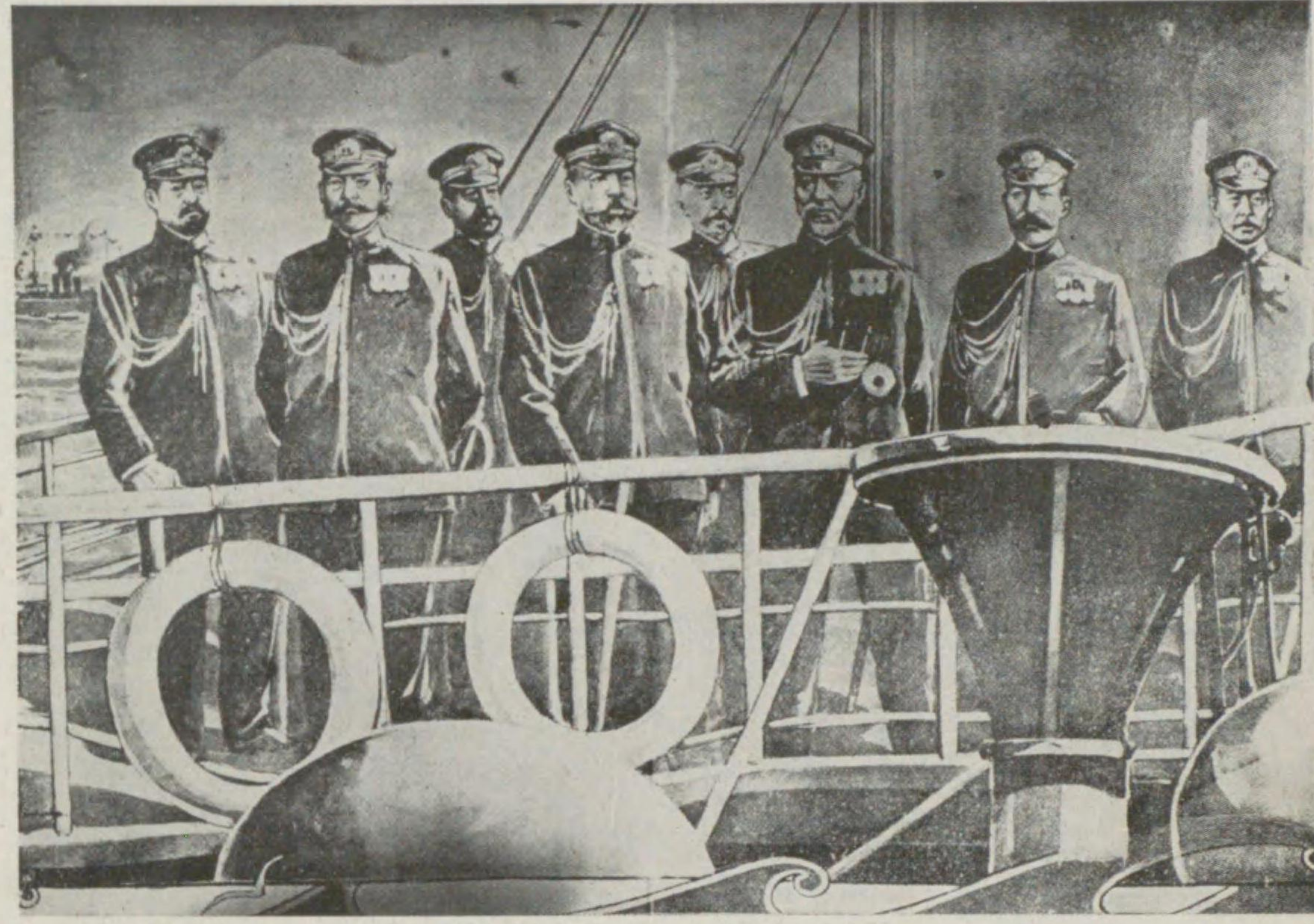
大正十五年十一月十二日 三笠保存記念式場に於て、向つて右より井上元帥、齋藤總督、小笠原中將、東郷元帥、奥元帥副官等の諸將。



(右) 大正十五年十一月十一日、菊花喜首飾を拜受せる元帥のため、その首飾を直せる小笠原長生中將。
(左) 昭和四年十月廿三日、東京麹町なる大妻高等女學校に於て一場の訓話をなしたる元帥が退出せんとするところ。



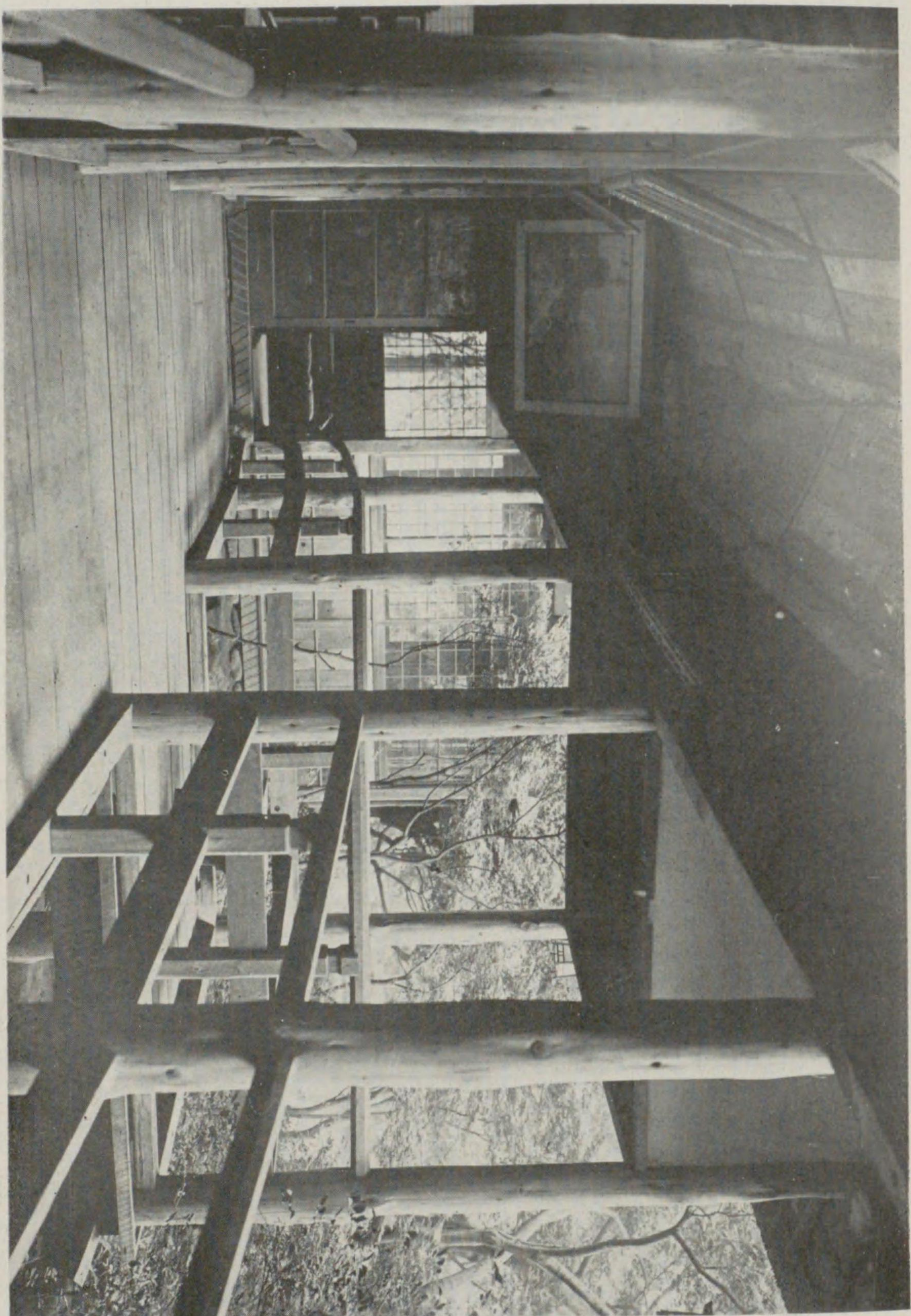
明治三十九年五月十一日、三將軍信州邊の隣長野縣上田城址にて紀念撮影、向つて右より上村中將、東郷大將、伊東元帥、立てるは横須賀鎮守府參謀宇佐川知義大尉、後方に三將軍手植樹。(長野縣上田、岡本孝氏蔵)



「威風海を歴す」として題し、日露戦役當時寫眞畫報にあらためるに(上) 右より中村上將、少谷細、將中庄瓜、將少羽梨、將中羽出、將中岡片、將大郷東、將少村島、將中村上り。將各の將軍(下) 旅順附近に於ける艦隊の威風、英國畫家筆のなるもの。

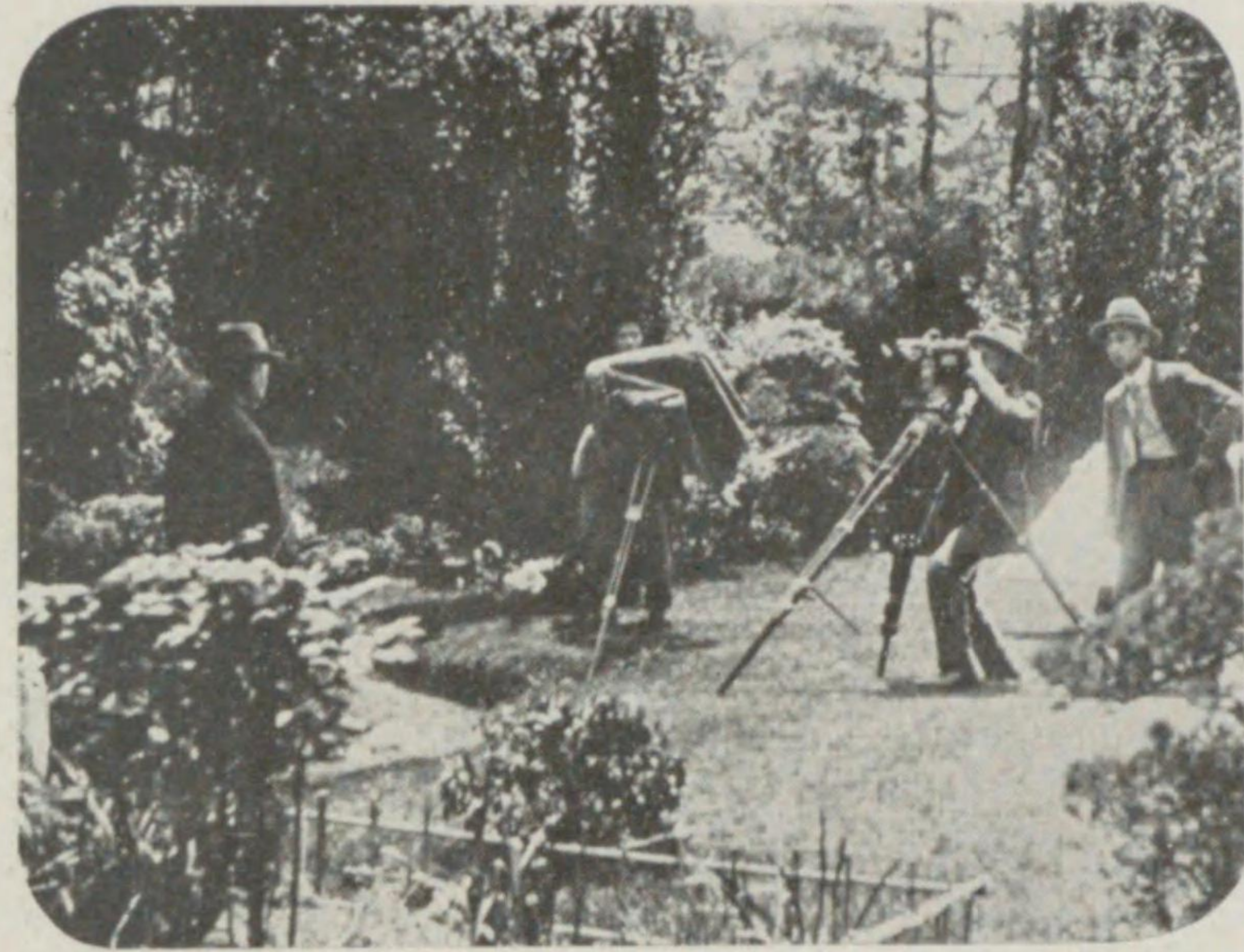


老區白金塚町なる藤山雷太氏庭内に建てられたる三笠亭、三笠艦の廢材を以て造らる。
三笠亭の入口。



同上三笠亭の内部廊下を示す。亭内には三笠艦の武功を語る紀念品陳列しあり。

大正十五年春、小笠原明眸氏に依つて製作された映畫「家庭に於ける東郷元帥」のため、カメラマンが庭園に於て元帥の和服姿を映寫しつゝあるところ、右側に立ちて監督せるが明眸氏（小笠原長生子爵の令息）なり。



庭園に面せる座敷に於て、元帥と明眸氏とがこやかに物語りあへる情味暖かなる一シーンなり。（映畫の一齣）

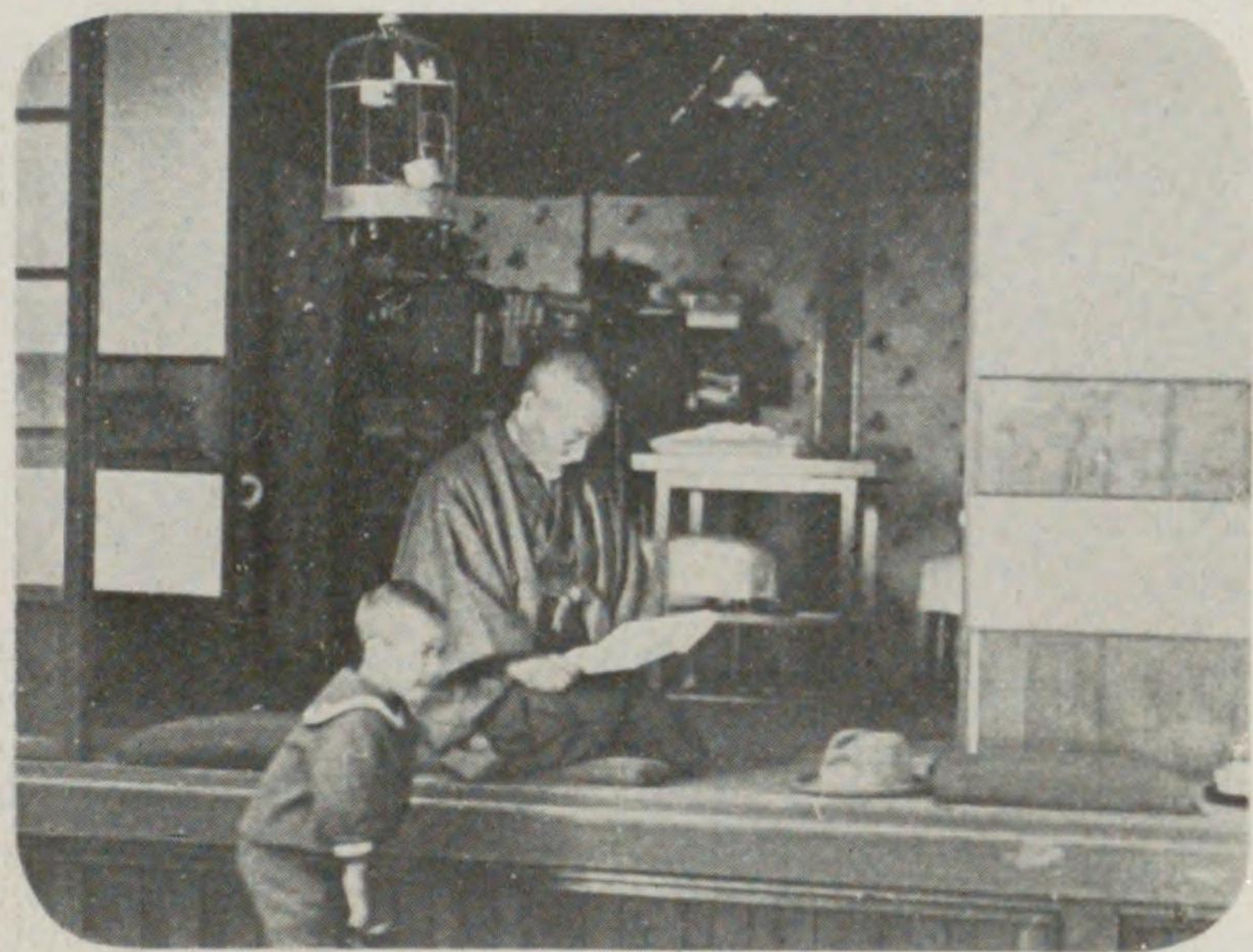
元帥の映畫製作に就て明眸監督が元帥と打合せつゝあるところ、打寛いで談笑中をカメラマンがこゝぞとフィルムに収めたるもの。（映畫の一齣）



庭園に於ける元帥の御家族、幼き方は令孫なり。（映畫の一齣）

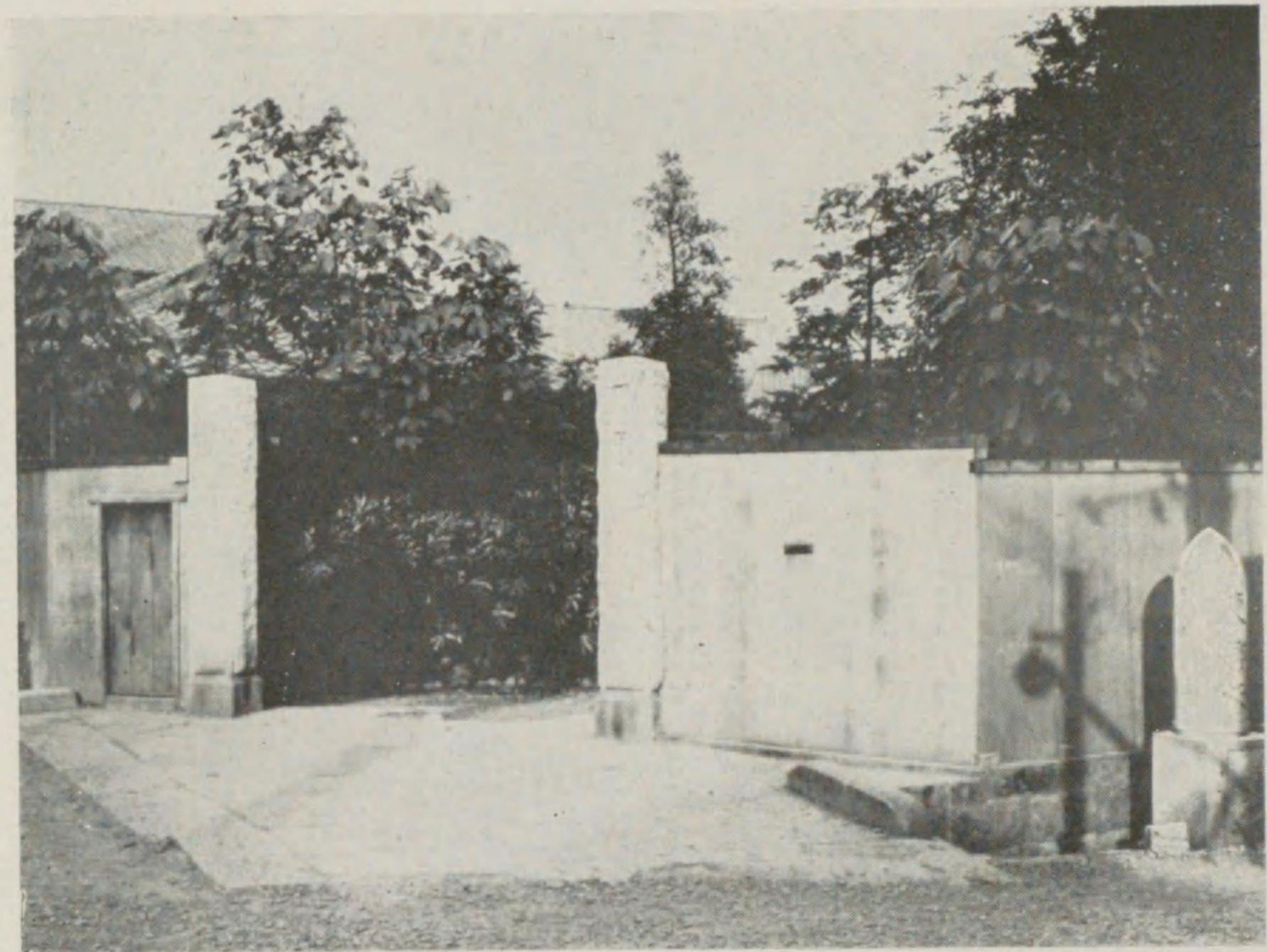


「おぢいさま」とばかり、いたいけなる令孫が書見中の元帥の膝下に寄られたるところ。（映畫の一齣）



庭園を逍遙中の元帥と二令孫。（映畫の一齣）





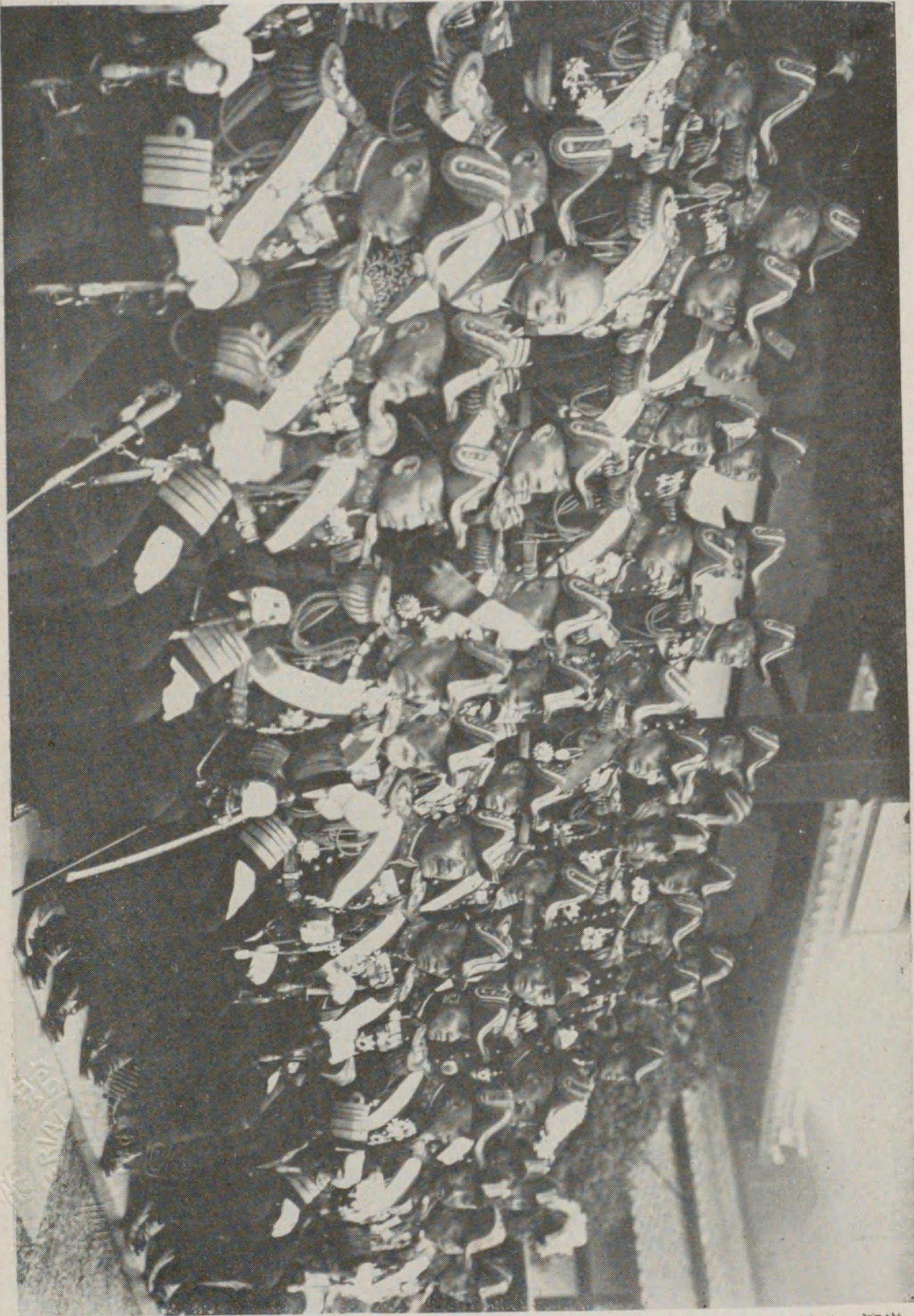
質素なる元帥邸（右頁上）東京麹町區上六番町なる東郷元帥邸表門、門柱に見ゆる標札は前巻逸話中に見ゆる通り數回盗み去られ、最後に固定したる門札なり。トタン張りの質素なる圍あを見られよ。（右頁下）同玄關、何等の裝飾もなく、明治中年建造そのままに改造されることもなく古びたるを見る。初めて訪ふものをしてあまりに質素なるに一驚せしめらる。

（上）同庭園、正面に白壁見ゆる一間が元帥の書齋、寫眞効價のため立派に見ゆるが、實際に見る者には、決して立派にも廣壯にも非ず單なる二流住宅そのものなり。

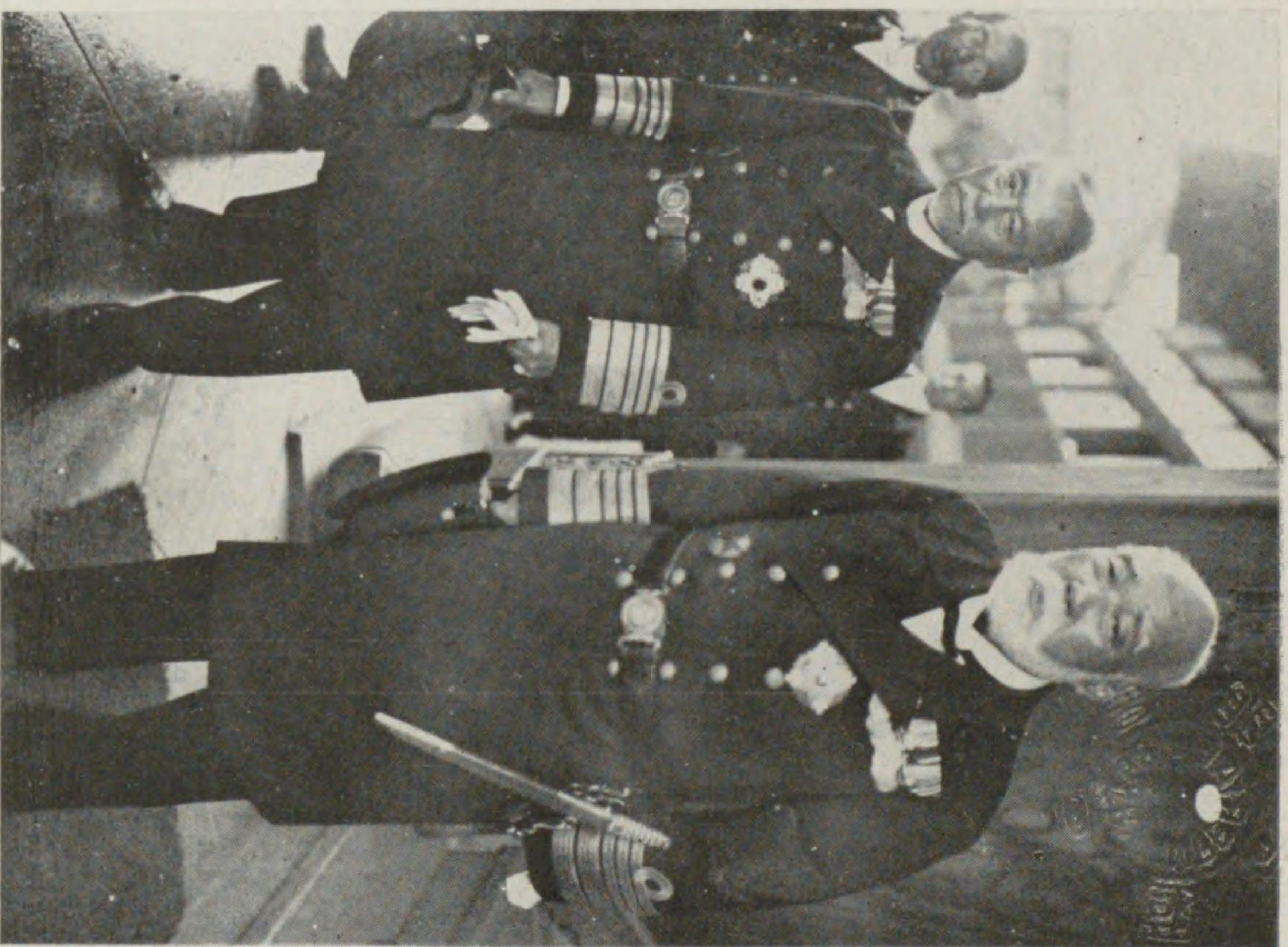
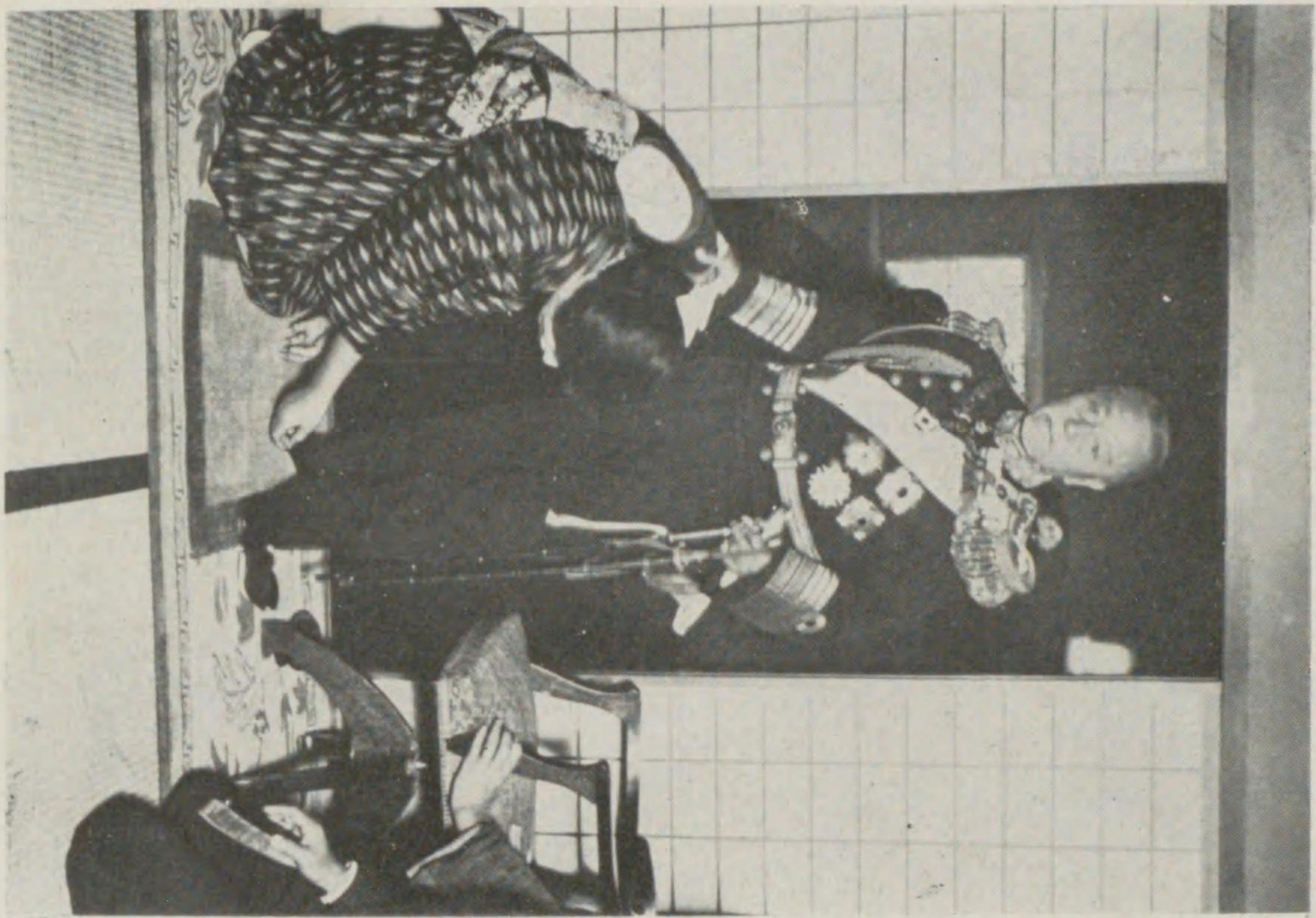
（下）元帥邸前の記念道標なり。明治三十八年十月、町内有志建設、陸軍大將伊東祐亨書と裏面に刻まれあり。



昭和二年冬、伊太利東洋艦隊訪日の際同艦隊司令長官は海軍省に於て東郷元帥と會見せり、向つて右より同司令長官、東郷元帥。

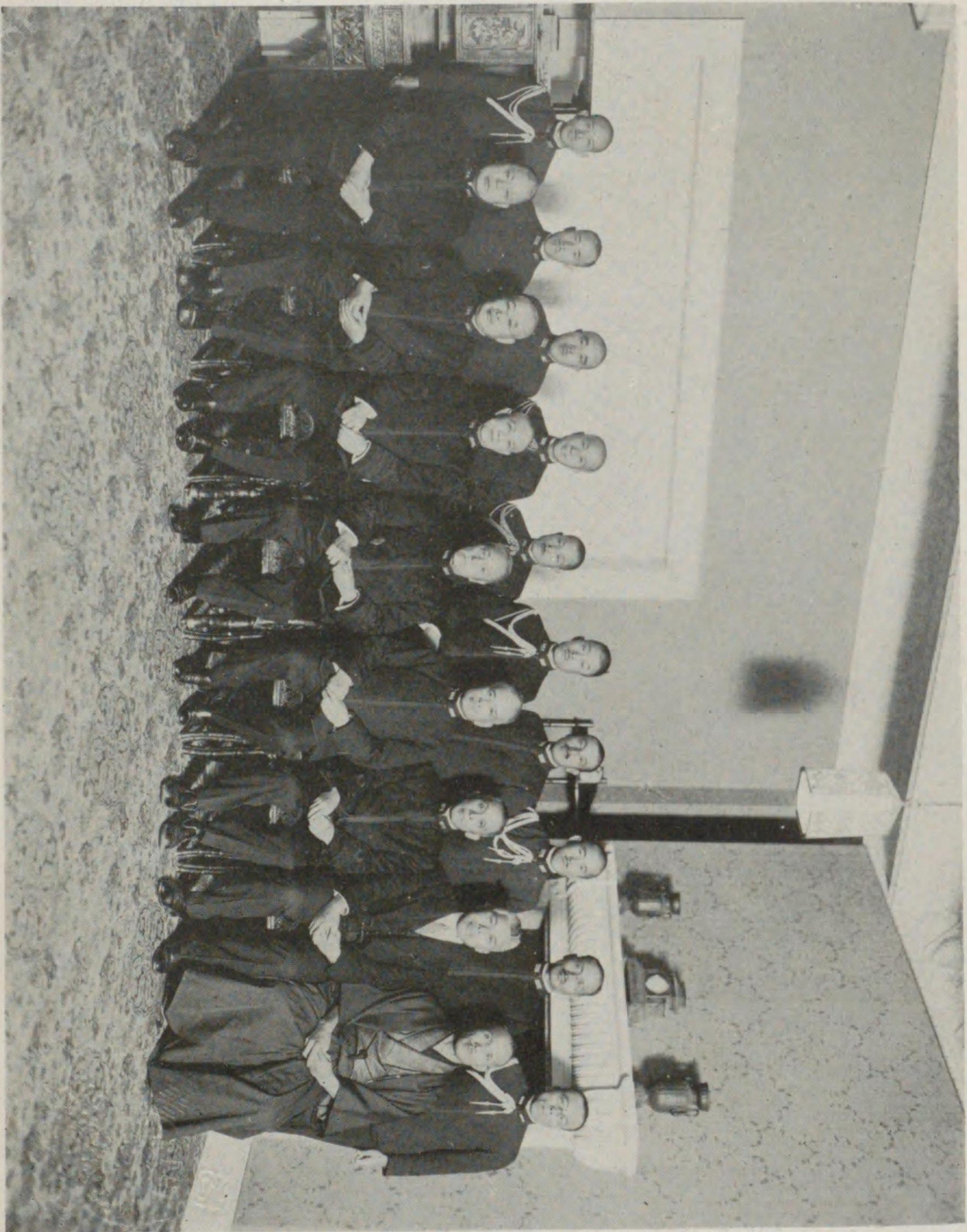


昭和三年十一月、京都に於ける御大典儀参列の海軍の諸將長、大饗宴が終つてから紀念撮影。前列左より四番目が元帥。



(右) 昭和三年五月、濟南事件勃發當時水災社に於て開かれたる海軍官廳部會議に出席の東郷元帥と井上元帥。

(左) 昭和三年十一月十日、京都に於て御大典に參殿せんとする東郷元帥。



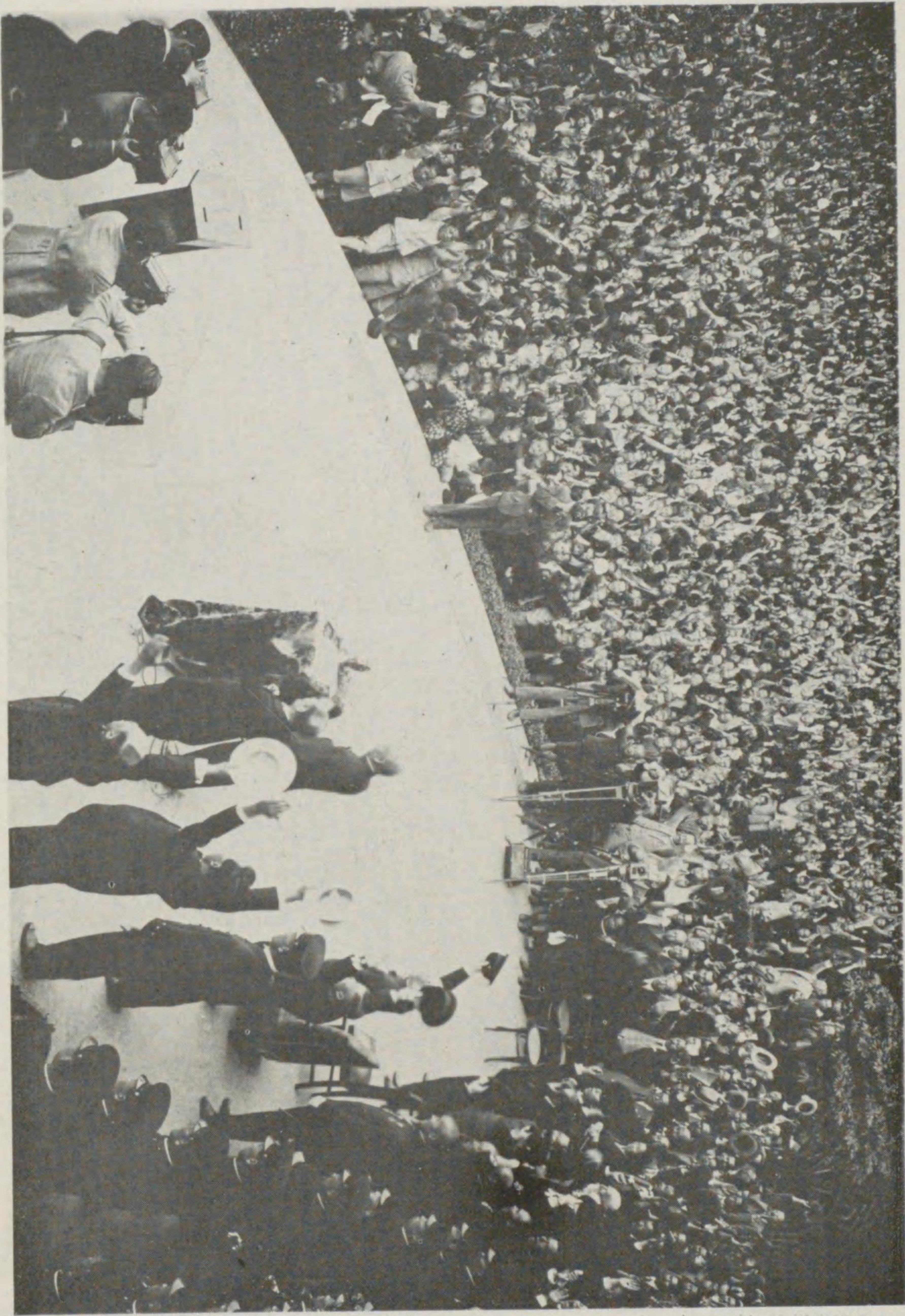
昭和三年十月二十八日、華族會館に於ける雲龍會の會合、前列向つて左より寺岡少將、山本少將、櫻井少將、谷口大將、東郷元帥、小笠原中將、田中中將、大角中將。後列右より湊大尉、小島少佐、鈴木少佐、松崎中佐、小樺大佐、濱田大佐、洪大佐、太田中佐、大野少佐、吉利少佐の諸氏。



昭和四年十一月二十五日、午後六時半より首相官邸に於て軍縮全權顧問等一行の送別晩餐會開かる。向つて右より岡田大將、竹下大將、濱口首相、東郷元帥、後列安保大將、山本中將、大隅中將等。



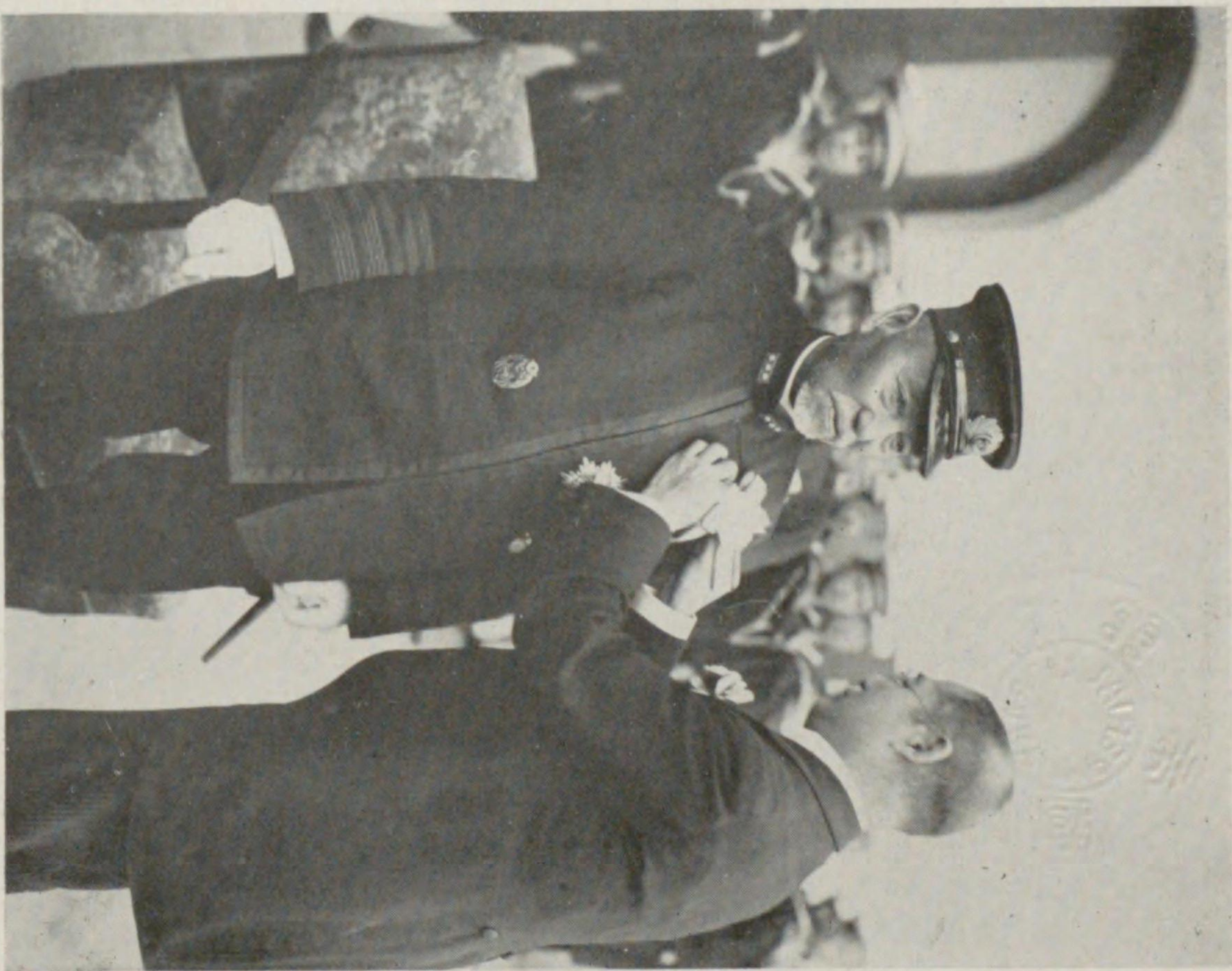
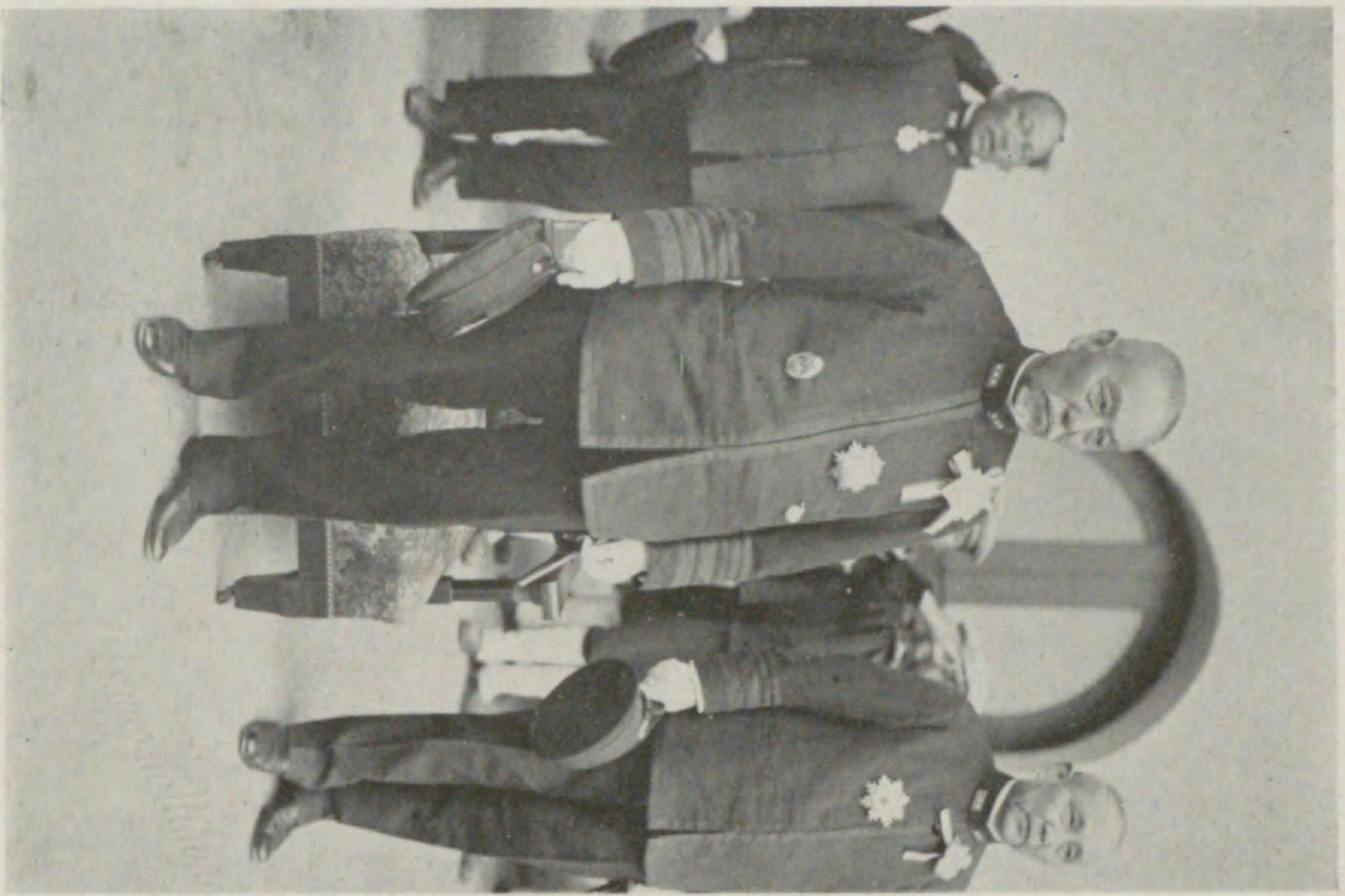
昭和四年十二月七日、保存せられたる横須賀の三笠艦上に於ての記念撮影、前列向つて右より横須賀の鎮守府司令長官、中央東郷元帥、其左が小笠原子爵、後列三番目が右田少將。



昭和四年五月二十七日、日本海々戦紀念日、日比谷新音樂堂に於ける「少年東郷會」發會式に臨場訓示の東郷元帥、會衆實に三萬、小國民の熱狂的歡迎を見よ。マクローホンの前に立つのが元帥。



。帥元が「目番六、藤子原笠小が「目番三、一義田増長會りよ右でつ向、讀朗辭答の君宣正池小者表代の會郷東年少上同



(右)は日比谷公園に於ける少年東郷會發會式々場に於て會長増田義一氏より元帥へ東郷會の記章を贈りしところ。(左)は記章を胸に附けたる元帥及小笠原長生子爵。



昭和五年五月二十七日、日本海大戦戦二十五週年紀念日當日の榮之の東郷元帥、自邸前にていたけなる小國民に取圍まれ萬歳々の歡呼を浴びせらる。
 (東京朝日新聞社撮影)

日本海海戦 後言志

日の本乃

海小とるく

かちとるは

御稜威かくむ

なりとこて

東郷大司令



聯合艦隊ハ敵艦隊ヲ
朝鮮海峡ニ邀撃シ奮
戦數日遂ニ之ヲ殲滅シテ
空前ノ偉功ヲ奏シテ
朕ハ汝等ノ忠烈ニ依リ
祖宗ノ神靈ニ對フルヲ
得ルヲ懌ニ惟フニ前途
尚遠遠ナリ汝等愈々
奮勵シテ以テ戦果ヲ
全フセヨ

。詠歌の將大郷東の後戦海海本日は (上)

書謹が將大郷東官長司令同後るたし旋凱に都帝が隊艦合聯が我、秋年八十三治明 (下)

りな所るす藏珍の將大治寛藤加てしにのもの初最るたし

日本海大海戦

中村波蔵氏

藏氏波聲村中

接敵艦見之為警報聯
合艦隊直出動欲戦
戦之由曰天氣晴朗波高

大正九年十月 中村波蔵氏

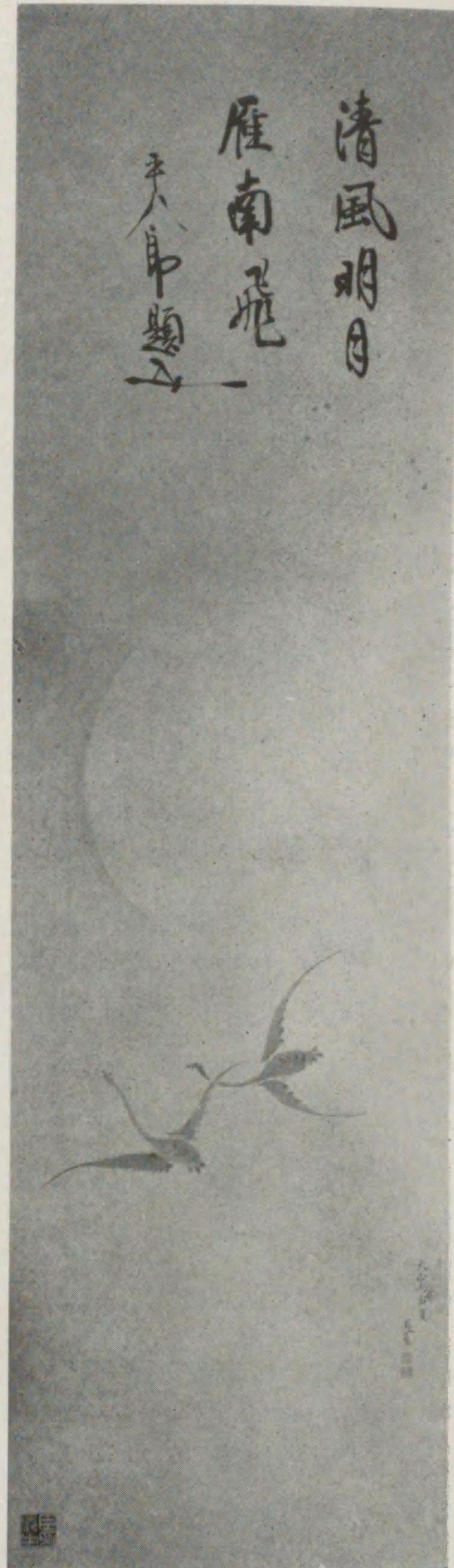
日本海海戦
聯合艦隊直出動欲戦
戦之由曰天氣晴朗波高

藏氏一唯村中



讚帥元畫將中生原笠小 (右)

讚帥元畫春友 (左)



種二讚帥元

大正十二年七月七日
 平人自書

七死

管公作
 東風ふかけ
 にほひたせよ
 梅の花
 主りて
 去を忘るな
 大正甲子春平人自書

元郷東の帥蹟數種を拜受りせり。東郷元帥御出入商人とてし舊時よ愛さる上如き元

大正丙寅元旦平人八十歳書

志

東郷元帥蹟

以誠悟真以
 誠強意

平人自書

君の代々

夫中書

子代々子代々子代々

君の代々子代々子代々

大正癸亥十一月

東郷元帥

君の代々子代々子代々

昭和戊辰天長佳辰大勲位伯耆東郷元帥謹書

明治天皇 御製

折にふれて

家とひてあかねことなき身ぶりと
人の勢めとおこなふなゆめ

昭憲皇太后御歌

全

まはひとのまゝにまゐりてたうら
何とともなははかねなれけり

伯耆東郷元帥謹書

天津目之志の
 佛典と祝と
 子代萬代
 ひろまかやく

昭和三年十月十日
 京都にて
 東郷大將御筆

とていつた
 御代志るま
 大君の
 たふとち御典
 仰ぐかし

昭和三年
 元帥大將東郷御筆

(三其) 歌和懷述の帥元

三笠
 たちさあけ御儀
 中におぬ御代志とていつた
 船

東郷大將御筆

(二其) 歌和懷述の帥元

数もあはれおと人
 あはれ目より山櫻
 主人御筆

兵戰之場止屍之地
必死則生幸生則死

甲寅春平八郎書

東郷元帥真蹟

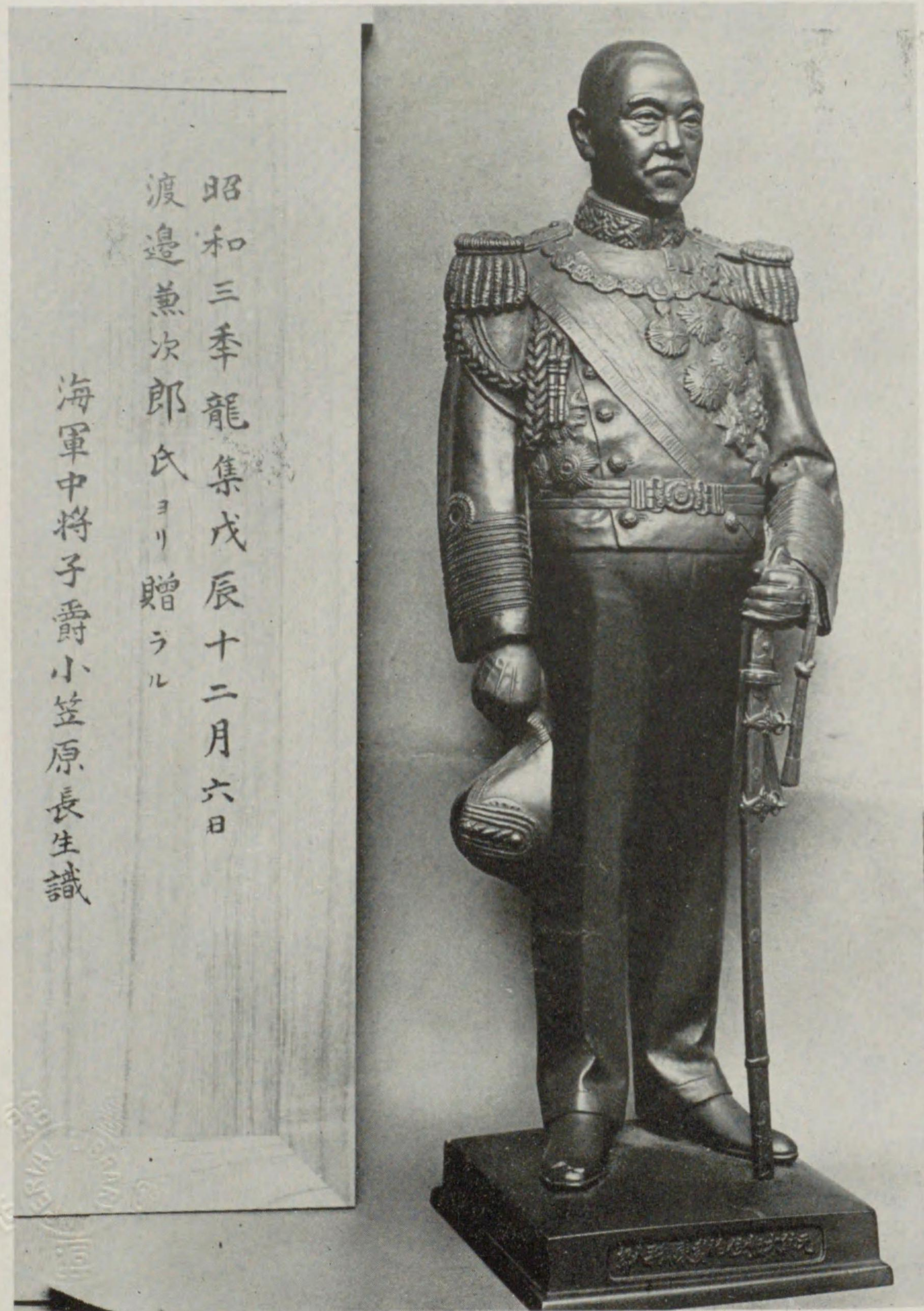
忠誠貫於金石
孝弟通於神明

大正癸亥冬平八郎書

忠孝吾家之寶
經史吾家之田

大正癸亥冬平八郎書

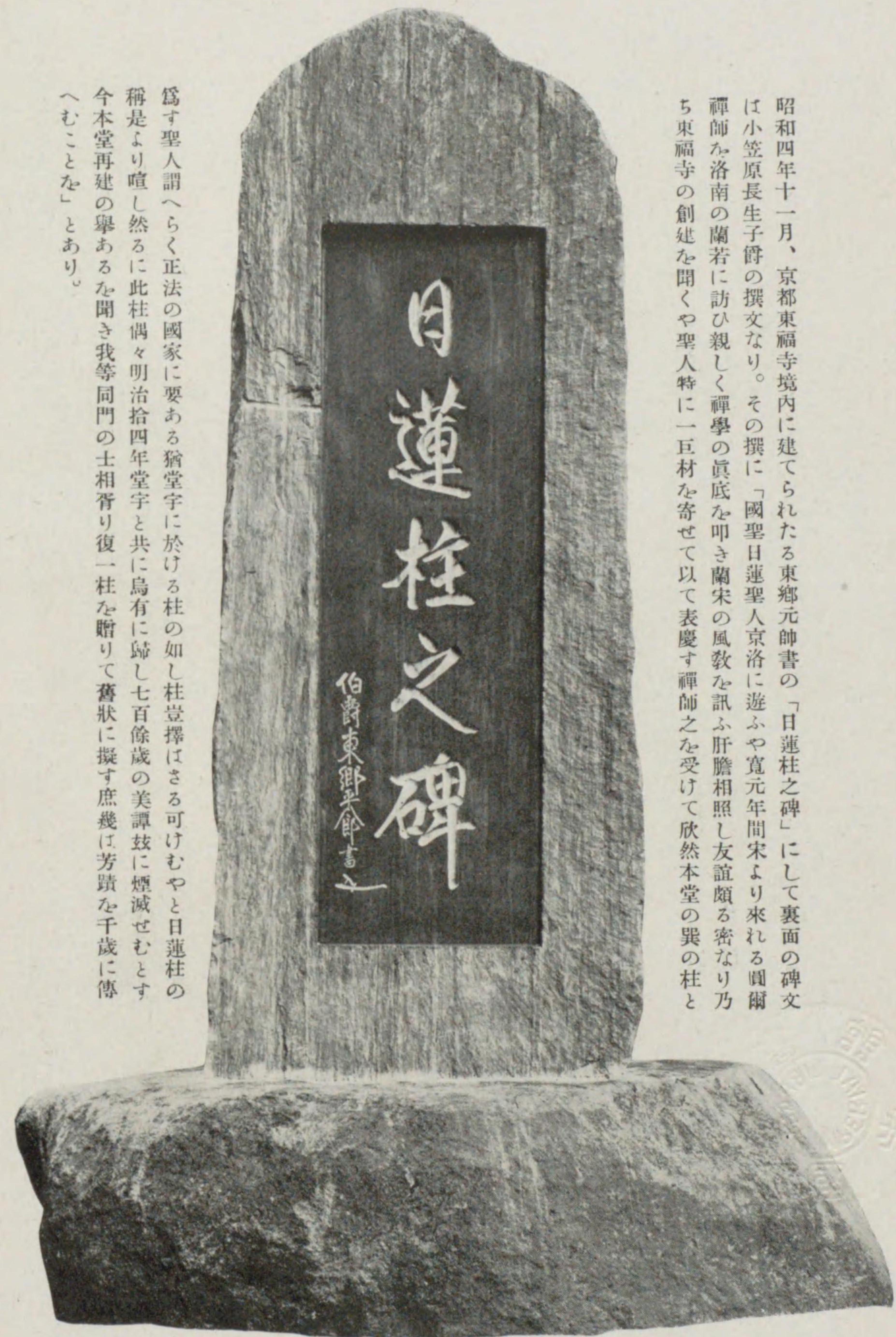
有田音松氏藏 真蹟二種



昭和三年龍集戊辰十二月六日
渡邊兼次郎氏ヨリ贈ラレ

海軍中將子爵小笠原長生識

東郷元帥銅像、その高さ二尺

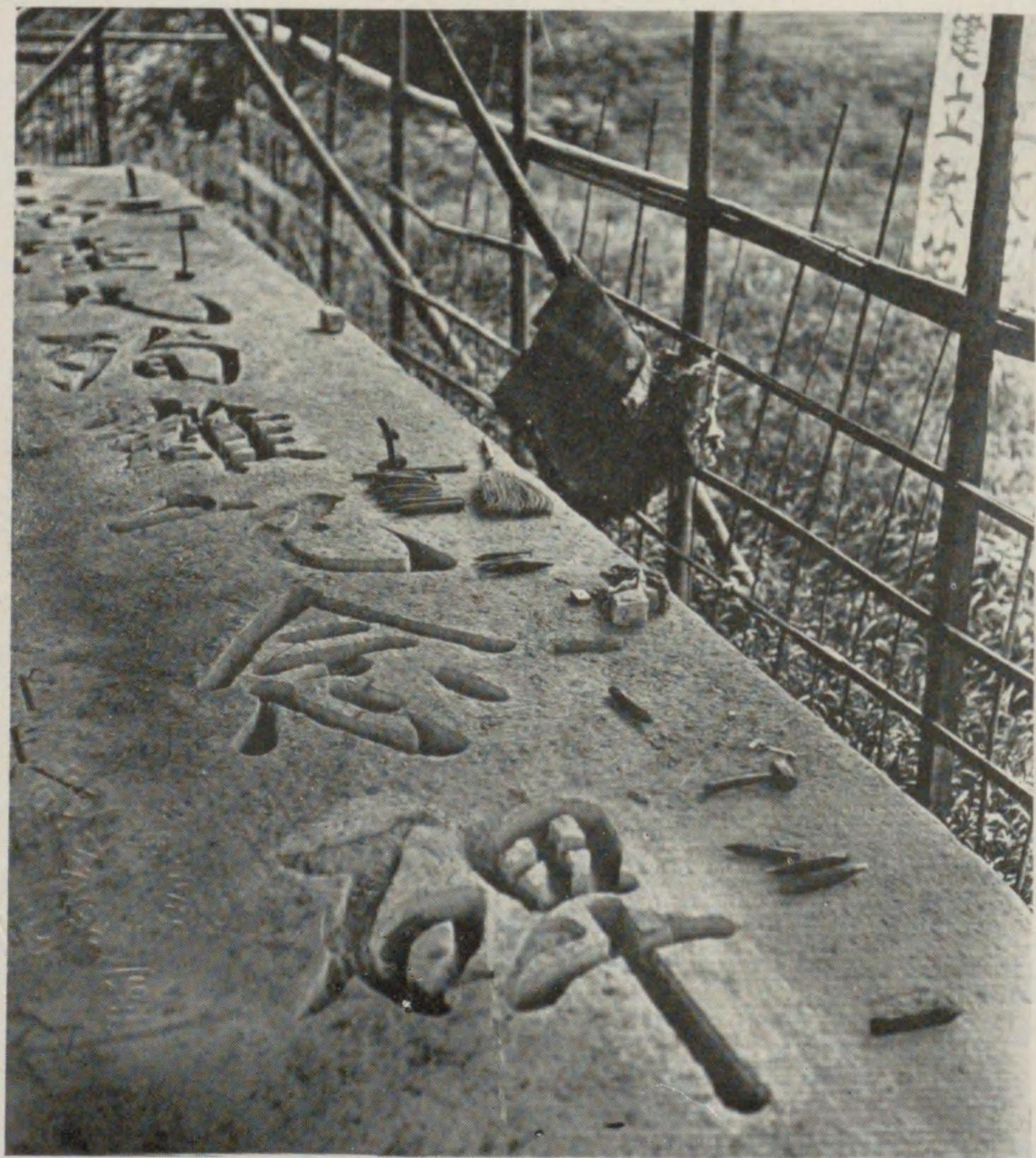
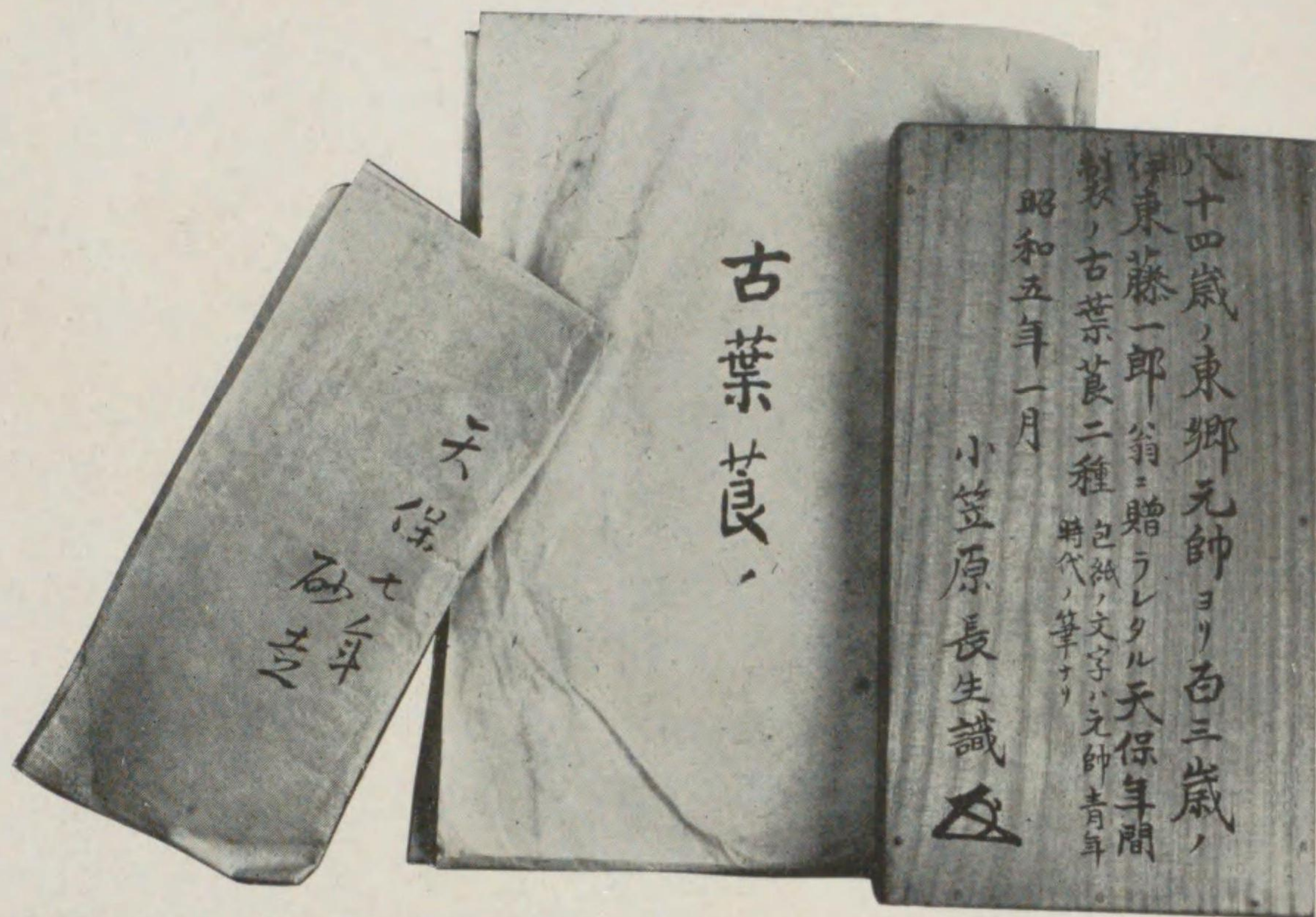


日蓮柱之碑

伯耆東郷寺僧書之

昭和四年十一月、京都東福寺境内に建てられたる東郷元帥書の「日蓮柱之碑」にして裏面の碑文は小笠原長生子爵の撰文なり。その撰に「國聖日蓮聖人京洛に遊ふや寛元年間宋より來れる圓爾禪師を洛南の蘭若に訪ひ親しく禪學の眞底を叩き蘭宋の風教を訊ふ肝膽相照し友誼頗る密なり乃ち東福寺の創建を聞くや聖人特に一巨材を寄せて以て表慶す禪師之を受けて欣然本堂の異の柱と

爲す聖人謂へらく正法の國家に要ある猶堂宇に於ける柱の如し柱豈擇はざる可けむやと日蓮柱の稱是より喧し然るに此柱偶々明治拾四年堂宇と共に烏有に歸し七百餘歳の美譚茲に煙滅せむとす今本堂再建の舉あるを聞き我等同門の士相胥り復一柱を贈りて舊狀に擬す庶幾は芳蹟を千歲に傳へむことを」とあり。



(上) 「古葉甚良」の文字は元帥青年時代の文字なり。
 (下) 東京九段下に建設中の常陸丸殉難記念碑にして元帥書の碑面を目下刻みつゝあり。(昭和五年八月撮影)



元帥の眞蹟中最も大
 幅なるもの、傍に坐
 したるは小笠原子爵
 の令息小笠原明眸氏
 なり。相對照して慶
 の大なるを知るべ
 し。

忠孝子

丙午春為小宮原君采節書



清明在躬志氣如神

平人重孝

鈴木重孝氏藏



皇國興廢在此一戰 各員一層奮勵努力

昭和四年十月宮佐木隆一君
平八郎書

二十閱月此征戰已往往事之過我聯合艦隊今や其の
隊勢を結ぶて茲に解散しつゝ其の功を我等海軍
軍人の責務と決して之を忘るゝに軽減せざるべし我
彼の收果と永遠に全く尚益々國運は隆昌扶持せん時
の平戦と向し先外衝は立派なる海軍の章に其の武力と海軍に保全
一朝後息に迄も此費はあつて要と而して武カシク
兵器等の計りありて之は活用も無形の官力も在り百
中の一砲能く百發一中の敵砲百門に對抗し得るを
とて之を武力と形而上に求むるも我々海軍は勝利
を得る所以に至るの靈徳に頼る所多しと雖も抑亦平
其因以威し果て戦役を結ぶるものなり若し敵往
て其の戦意を以て我々と安んじて休息せざるべし
惟ふに我人の一生を運得ず断然我を以て時
勢に輕重あり此理無し事有るとは我々の責任を
修養し終始一貫其の本分を盡すの計過去一年有
清と戦ひ実著し抗し屢敵と對して生死の間に出入
り容易の業ありしを觀るとは是と亦長期の一大演習
とて之に參加し幾多榮耀を得たり我人の幸福比
無し望之と征戰の勞苦とをりたりたりたりたり
に偷安せん兵備の外觀嚴然たるを究つし上の梅
思ふ崩倒しつゝ益々人海に成むるを恐るべし

昔者神功皇后三韓を征服し給ひ、以来韓國四百餘年、我の統理の下にありしと一たび海軍の廢絶をばや、忽ち之と共い又近世に入り、徳川幕府治平に祖まき、兵備以懈とて、舉國米艦數隻の應酬に、若し露艦亦千島樺太を覬覦し、もとの之と抗争し、もとの能く、もとの全きなり、觀て之、以て西史に見るに十九世紀の初めに當り、ナポレオン、トランプアルカール等、は勝たば、英國海軍は祖國と泰山の安き、置きたるのみならず、爾來後進相襲て能く、其の武かと保有し、世運の進歩に後とより、三つも、今に至り、進永く、其の國利を擁護し、國權を申張るを得たり、蓋し此の如き古今東西の殷鑑し、善政は、其の如きなり、と推し、主として、我人、之治に居て、亂を忘る、其の如きなり、是れ、自茲の結果たり、なる、無く我等、戦後、は軍人、深く、此等、は實例に、鑒し、既、有の練磨に、加ふるに、我々の實験を、以て、更に、將來の進歩、以て、國を、時勢、は、發展に、後とより、を、期せ、る、を、若し、夫と、常と、重論を、奉、體、一、致、を、奮、奮、屬、實、力、の、滿、は、持、し、放、任、し、時、節、を、待、た、く、廢、敬、く、以て、永、遠、に、護、國、の、大、任、を、全、う、る、を、も、つ、と、を、得、ん、神、明、に、唯、平、素、に、鍛、鍊、に、力、を、戰、し、も、て、既、に、勝、し、る、者、は、勝、利、の、榮、冠、に、長、く、り、と、同、時、に、一、勝、は、滿、足、と、て、治、平、を、安、く、り、者、と、り、直、に、之、を、禡、ふ、古、人、曰、く、勝、て、兜、此、緒、を、待、つ、と、

明治十八年十月三日

聯合艦隊司令長官東鄉元帥

明治十八年十月三日
聯合艦隊司令長官東鄉元帥

東郷元帥

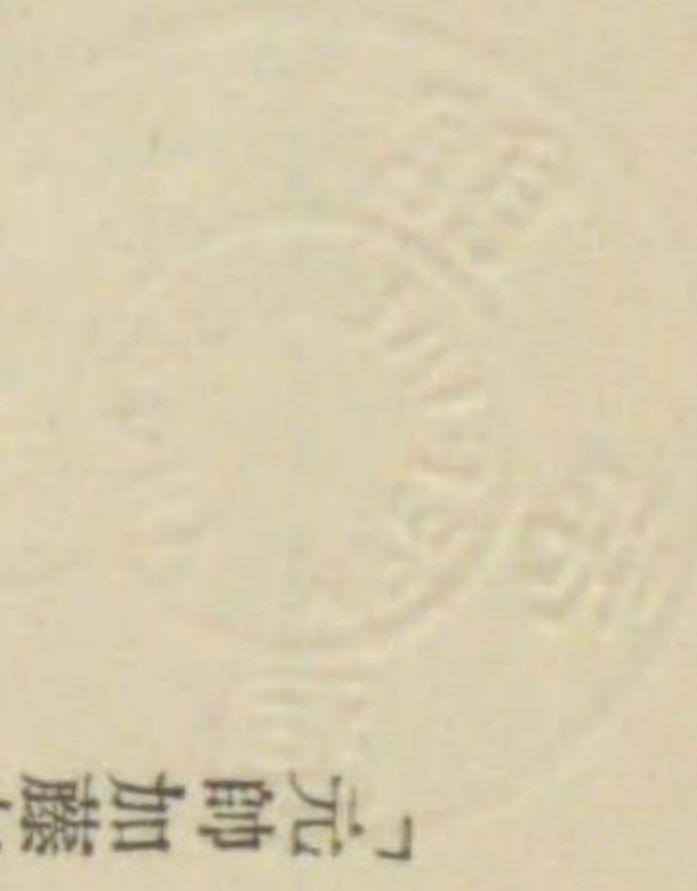
昭和三年及東郷元帥

藏書

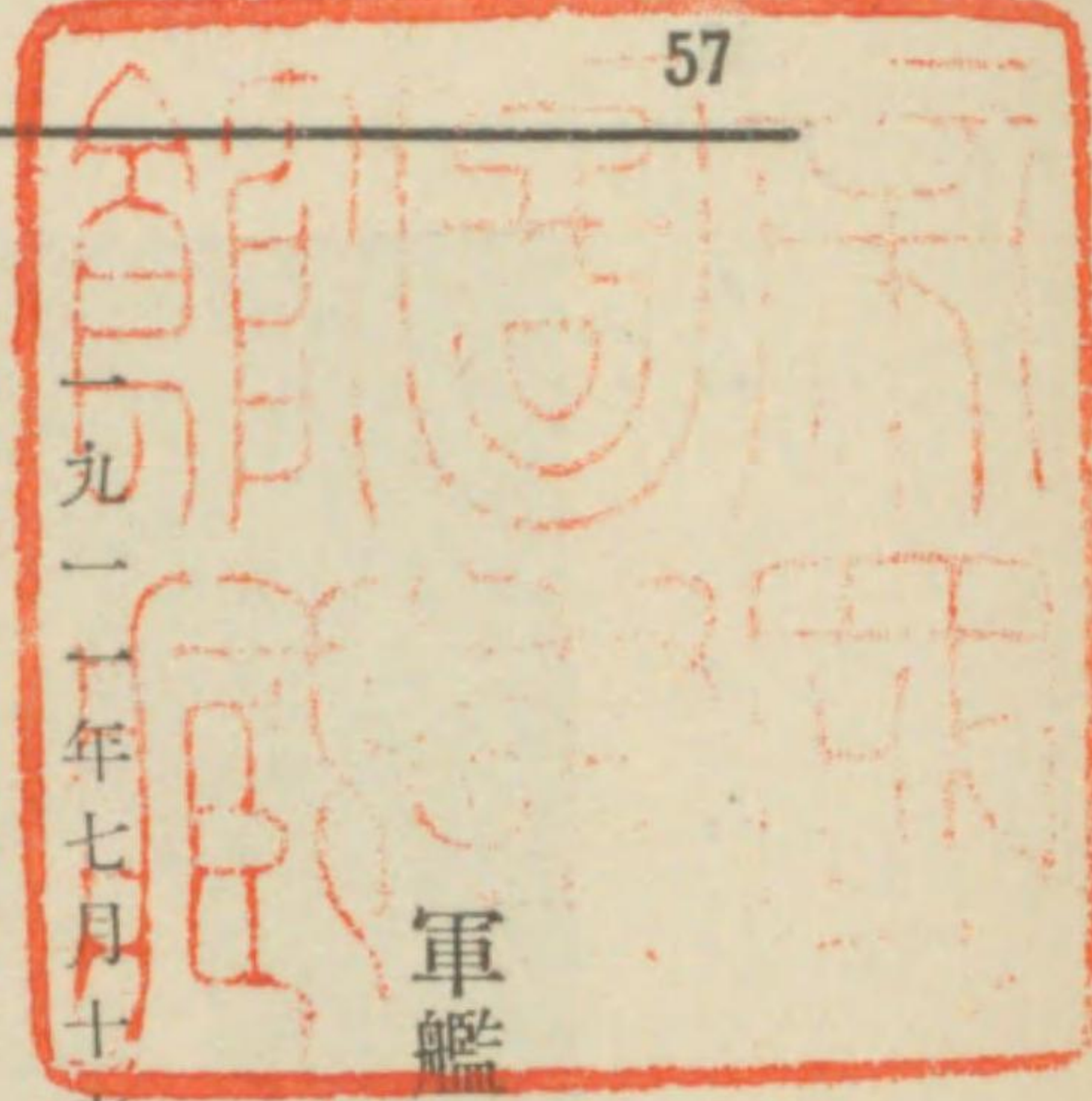
第一卷

元帥加藤友三郎傳「書中の東郷元帥題字」

東郷大將米國訪問記



明治四十四年、即ち西曆一九一一年、東郷大將は英國に於ける戴冠式參列の使命を果し、同年七月二十九日、汽船ルシタニア號にてリバアプールを出發、八月三日、紐育著、それより各方面を視察して米國民の多大なる歡迎を受けたのであつた。左に掲けたるは、當時の米國各地新聞雜誌が筆を競ふて發表した東郷大將米國訪問記であり、東郷大將觀の翻譯である。多少の重復の根みはあるが、彼等の眼に我が海の偉傑東郷大將が如何に映じたか、實に感興深いものがある。



軍艦の持ち逃げだけは困る

九一一年七月十六日、モンタナ州アンコナ市のスタンダード紙は、左の如き記事を載せてゐる。

白髪びやくまの英雄——如何なる種類の英雄でも、英雄は常に白髪びやくまに定つてゐる——戦争の偉人、東郷大將は約三週間後には、紐育に到着する筈であるが、其の場合には、紐育海軍工廠の鍵は同大將に渡され、而して彼が見んと思ふ部分は、どんな箇所でも案内することになつてゐる。併しそこにある軍艦ぐんかんを持つて逃けることだけは御免を蒙りたい。

米國海軍の規則では、海軍工廠かいぐんこうの一部分でさへも、之を外國人に見せることは嚴禁してあるが、此の度中央政府當局は、東郷大將に關する限り、此の禁札を撤去することを命じ、普く其の巡視を許可することにした。

彼が此の國に到着した節には、總ての市州國民及海陸軍に依つて、各地で歡迎會が催さるるであらうから、眞に名實共に米國の國賓たるに相違ない。

又聞くところによれば彼は目下前記工廠に於て竣工に近き戦艦フロリダ號にも乗艦する豫定である。
明治四十四年七月、英國のダグラス海軍少將の長男を抱ける子供好きの東郷大將（アメリカ、レビユー、オプ、レビユー誌所載）



える。

（編者註）フロリダ號といふのは、排水量二一、八二五噸、速力二二ノ一浬、十二吋砲十門、五・一吋砲十六門、水中發射管（五十三種）二門の武裝を以て、九〇三年起工、一九一〇年進水し、同一年記録を有する當時の戦艦の花形であつて、同時代の我が戦艦河内に匹敵する優秀のものであつたが、年移り星變りて、最近の倫敦海軍條約によつて遂に廢棄に決定したものである。

老提督の老いて益々鏗鏘たる、同艦の運命とを想ふとき感慨一層深きを覺

今迄米國の歴史にない程の大歓迎

テツネツシー州ノックス、ヴァイユのセンチネル紙は八月四日の紙上に東郷大將の肖像を掲げ、其の下に次のやうに書いてゐる。

海軍大將東郷平八郎氏は、現に日本の軍令部長であり、又周知の如く日本海々戰の英雄であるが、體軀は至つて矮少である。

提督は本日（八月四日）紐育に安着したが、大凡そ十七日間の豫定を以て、米國に滞在することになつてゐる。而して其の間ワシントン府、ヒヤデルヒヤ市、ボストン市等に於ては大々的歓迎會が開かれる筈である。

此の偉大なる、そして小男である大將の爲めに催さるゝ其の歓迎振りは、嘗て合衆國に於て記録にない程のものが、計劃され、準備せられつゝある。



東郷大將の渡米と日米親善

七月二十五日、ボストンのレコード紙は『東郷大將日本の厚情表示の使命を帯びて米國に向ふ』と題し、倫敦の戴冠式に於ける同大將と乃木大將の大きな寫眞を掲げて、次の如き倫敦特電を載せてゐる。

剛勇無双の日本の船將東郷大將は米國に向つて英國を出發した。提督渡米の使命は米國民に對する好誼の表示である。

出發に臨み、提督述べて曰く

『日英及び英米の平和條約は、將來長く全世界の平和に貢獻するであらう』と。又曰く、『今や日米の間には、何等意志の疎隔はない』と。

加州の排日家は覺りの眼を開け

ボストン・レコードの七月二十五日の紙上には、左の記事を掲げて、排日政治屋に痛棒を加へてゐる。

世に傳ふる排日の根源は、何を云ふても合衆國の兩岸に胚胎してゐる。之は畢竟日本の移民と直接の關係が在るからであつて、之に關係の少い東海岸諸州は、必ずしも排日の思想を存してゐない。少くも明治四十年代の今日はさうであると斷言して憚らない。

併し言論の自由にして旺盛なる米國では、ともすれば一犬虚を吠えて萬犬實を傳ふるの通弊ありとの感なき能はず、斯くては千百の外交接渉も、何等の効果はない。

然るに茲に至誠神の如き一偉人があつて、其の足跡を其の土に印し、其の國民が直接偉人の聲咳に接する機會を得るならば、斯かる相互の疑惑は、太陽の前の氷の如く溶解し盡くすことが能きものである。

排日論者は此の際大に謹め

次に掲ぐるは、七月二十六日のポストン、アドヴァタイザー紙の記事であるが、此の短片を以てしても、東郷大將の渡米が、日米親善の爲め、換言すれば日米の疎隔を解く上に於て、如何に偉大なる効果があつたかが判る。同紙報じて曰く、

東郷大將は合衆國に向つて出發した。提督今日の渡米に依り齎らし來るものは、何人も異口同音に『それが眞に日本の好誼と友情であることを信ぜぬものはあるまい。されば提督が米國に於て大歓迎を受くべきは、今より豫想して謬りのないこと、確信するものであり、又さうなくてはならぬと考へる。

然るに何たる矛盾であらう。顧みれば、數年前加州の八釜まじや共や、ホブソン大佐などは、其の捏造の過激な議論から、日米兩國の國民を極度に迄憤怒せしめて、今にも何か事が起るか、の如くに兩國の感情を疎隔した。

今や常識的にも、論理的にも、そんなことのあるべき筈がないと云ふことが分明になつた

ことは、何より喜ばしいことである。

上記の排日論者主戦論者は、此の際宜しく元の常識に立ち歸るべきである。然り彼等は、今後其の言動を謹しむ、再びあんなことをしてはならぬ。

同紙の論調は正しい。而して之は東郷大將なる至誠が、其の渡米の報の傳はつただけで、斯くも威力のあることを如實に物語つてゐるもので、由來偉人の感化が、國境を越えて迄も、斯くばかり強力なるものであることが判り、今更其の徳の高きに敬服せざるを得ない。

英雄崇拜に國境なし

七月二十七日の紐育州オブザーヴァ紙は、英雄崇拜に國境なしとの論旨を強調してゐる。曰く、

我が海將アラガットが一八六六年若くは其の他界の數年前に、若しも英國を訪問してゐたとすれば、疑ひもなく同國民の上下に依つて、異常の歓迎を受けたに違ひない。何故なれば、英國民も亦我が國に劣らぬ程、英雄豪傑を崇拜する國民であるからである。

彼の謙遜温順なりしグラント將軍に對してさへ英國人は其の歡迎を如何にせばよからうかと百方其の計畫に頭腦を痛めたといふことである。此の點では米國人も英國人によく似てゐる。實際人間といふものは洋の東西や、人種の如何に拘らず、其の本能は同一である。吾人も亦英雄を愛し、英雄を崇拜することに於て決して他の國民に劣るものではない。來る八月初旬には、此のことを試めず好機會がある。それは東郷大將が我が國に來訪せらるゝことである。

同提督にして幸に視察に専らならば、其の十七日の滞在豫定を以てせば、恐らく合衆國を一通り巡遊することが能きであらう。

提督はたとへ其の體軀が少であつても、其の顔の色が我等と異つて褐色であつても、氣質に於ては、確かに吾等の古英雄と同じ面影を多分に具備してゐる。(中略)此の間、東郷大將の生立から、英國留學、海軍の經歷等を詳述してゐる。

提督の功績の如何に偉大であつたかに就ては、日本海々戰の歴史を繕けば、直ちに分ることだから、茲には敢て絮説しない。併し同海戰に於て、彼は露國の海軍を全滅し、露國海軍の大將、中將、少將を全部捕虜にしたといふ事實が何よりも雄辯に其の偉績を物語つてゐる。

而して其の結果は、日露戰爭の終焉となり、榮冠が日本の頭に落ちたのである。

宜なる哉、提督は此の戰役の功により、皇帝の與へ得る至上至高の表彰を享受した。と同時に其の國民は、彼を英雄の神様に祭り上げ、頌徳表は積んで山を成したと云はれてゐる。だから其の人望は將來永久に向つて不朽であらう。

日本のヂューエー提督

七月二十九日の紐育ジエームスタウンのジャーナル紙は、標題の如き見出しで東郷大將の米國に於ける旅行日程を詳しく書いてゐる。

抑々ヂューエー提督とは何人であらうか？ 同提督は、一八九八年我が明治三十一年に起つた米西戰爭のときの米國艦隊の司令長官で、同國近代の有名なる海將である。併し彼の従事したマニラの海戰の如きは規模其の他に於て、到底日本海々戰に比ぶべきものではないことは、多少の世界歴史に知識を有するもの、何人もよく承知してゐることであらう。が、合衆國の近代に於ては、少くも海戰に關する限り、之を持ち出すより外に、何等の資料がな

いのであるから、暫く其の意に任せて、吾人は須らく寛容以て之を讀むべきことであらう。併し他に多くの新聞記事があるにも拘らず、編者が此の記事を選んで掲ぐる所以のものは、該記事が大將の米國到着以前に發表せられた旅行日程や、豫想を交へて述べてゐる點に於て代表的と認むるが故である。讀者之を諒せよ。同紙は曰く、日本のデューエー、東郷大將に對する歓迎準備は、些細な點を除いては、最早全く整ふてゐる。

大將は周知の如く、日本海々戰に於て露國艦隊を全滅した海のヒーローである。而して此の度英國皇帝の戴冠式に列して、同國の國賓の待遇を受けてゐた。其の人が今將に我が國に來訪せんとしてゐる。隨行員は海軍中佐谷口尙眞氏で、氏は嘗て我が國の日本大使館附武官であつた人である。

大將は本日(七月二十九日)リバーブルから巨船ルシタニヤ號に乗船し米國に向つた。だから多分八月四日には紐育に到着するであらう。勿論此の航海中、彼は同船中の最上等の船室を提供せられてゐる。

米國の政府及び海軍では、茲數日といふものは、提督の招待や歓迎會の準備に忙殺されてゐる始末である。

提督の十七日間の國內滞在中は、其の全期を通じて國賓を以て遇せらるゝ筈で、大統領タフト氏は、既に提督に對する政府側の代表者接伴官として米國海軍のテイ・エム・ボット氏を任命し、且つ同氏をして提督一身上に關する萬事の世話役警衛等のことを掌らせることにした。

紐育に於ける歓迎準備の如何は、一にかゝつて其の到着の時間詳しく云へば夜か晝かの如何に依ること、若しもルシタニヤ號の入港が、夜間にでもなれば、之は翌日に繰り下げらるゝであらうし、又禮砲も發放できないから、ガヴァメント島砲臺の行ふべき十九發の禮砲は翌日其の乗船が、ホドソン河を遡航するときに延期されるであらう。又夜間に上陸でもすることになれば、其の禮砲は翌日陸軍司令官グラント少將の訪問のあつた後、當然其の答訪があらうから、其の際同所の砲臺から行ふことになるであらう。又同様に、ブルークリンの海軍工廠長海軍少將リッツ氏の訪問の場合、之が答訪に際しては、該地碇泊のどの軍艦からか禮砲發射があるであらう。

大將は米國に來ても恐らく休養の時日を有たぬであらうと云ふことは、今より想像するに難くない。

紐育に滞在中は、公式の歓迎會が連続引切りなしに行はるゝであらうが、先づ以てガヴァ

ナールアイランド島に於ける海軍の特別招待や、ブルークリッキングの海軍工廠での歓迎會が催さるゝであらう。

最近に海軍省から嚴達があつて、外國人には工廠内は見せぬことになつたが、大將に對しては特別の解禁令が出て、工場のあらゆる箇所が開放されて、隅々までも閱覽に供することになるであらうし、又同所で目下建造中の艦船も自由に觀覽を乞ふことになるであらう。

大將は旅行日程に従つて、紐育を出發したら、次はワシントン府に向ふことにならう。而して其の地では、又素晴らしい歓迎會が開かれることに用意が出来てゐて、大統領や、國務卿、海軍卿、市長、其の他の名士が列席する筈である。

大將は其の懇望に依つて、マウント・ヴァーノンを訪問し、花輪を故ワシントン大統領の墓前に捧げる豫定にもなつてゐる。

議會は政府の歓迎費として、直接國庫から一萬弗を支出し、此の珍客を厚遇するの資に充てることを滿場一致で可決してゐる。

大將のワシントン滞在期間は、四日間であつて、其の一日はアナボリスの海軍兵學校を視察することゝなつてゐるが、同地では又此の『海の豪傑』に對し、特別の優待をすることであらう。

大將はワシントン府から、再び紐育に歸る豫定になつてゐる。之は約束に基き、日本人俱樂部や、米國の日本協會などの歓迎宴に列する爲めである。

それから先きは、ヒヤデルファイヤの見物をざつと終へて、ポストン市を訪問し、そこからナイガラの瀑布を見物し、そこから加奈陀に赴く順序になるであらう。而して加奈陀では、途中主なる都市に下車し、各地に於ては、彼等の懇望に任せ、其の歓迎を受けるであらう。斯くしてバンクーヴァに達し、八月下旬頃故國に向つて歸國に上る豫定である。

寡言者大事を遂行する

モンタナ州のバツテ市のマイター紙は七月三十日の其の紙上に『東郷來る』と題して例の如く、日露戰爭の『海の偉功者』として、稱贊の辭を傾け盡してゐるが、此の新聞でも、自國のデューイー提督に比べて述べてゐる。而して恚う云つてゐる。即ち東郷大將の勝利は、露國の第二、第三太平洋艦隊が老朽のものであり、未經験の乗員を存した爲めであり、デューイーの偉功を盡したのは、其の原因が西班牙艦隊の士氣不振にあつたかも知れないが、凡そ

艦隊の長官として、初手合のものと戦闘する場合、敵がどんな風の戦闘をするのか、之が心配なもので、假令結果に於て敵の方が弱かつたにしても、毫も之が爲めに戦捷提督の功績を減するものではない。」と。

之は一風變つた賞め方で、一理ある。而して最後に云つてゐることは、此の偉人に對して最もよく、其の風格を穿つてゐるやうでもあり、過去現在未來に亘つて、此の批評は凡ての偉人に對する定義のやうでもあるから、之を掲げて見る。同紙は劈頭に於て、東郷大將は一風變つた人物であると前提して、偕て曰く、

『彼は多くを云はない、而して非常に考へ深い人である。しかも彼はなさねばならぬときには、勿論必ず其の任務を遂行するし、言ふべきときには、屹度發言することを躊躇しない』と。

『短刀を部將に示して』左様なら』

七月三十一日のヒヤデルフイヤ市のパブリックレツチャー紙は、大將の來訪を報じてる

る其の記事中に左の如く述べてゐる。

『日露戦争の始まらんとするとき、彼は聯合艦隊司令長官の重職になつた。而して將に戦地に向つて出發せんとするに際し、佐世保軍港に於て部將を旗艦三笠に集合し、一と通りの訓示を終るや、例の秋水滴るが如き腹切短刀を机上に置き、部將に謂つて曰く、愈々明朝出征の途に上る、卿等決して再歸を期する勿れと、而して散閱に臨み、彼は此の短刀を指し且つ曰く『左様なら』と。

彼の五月二十七日敵の艦隊と相見ゆるや、彼れは其の旗艦の戦闘檣上に一種の命令を掲げた。曰く、

『皇國の興廢は此の一戦にあり、各自一層奮勵努力せよ』と。

斯かる莊嚴にして、果斷的なる信號は、東郷大將を措いて他に何人も發せらるべきではない。

彼れは長い間隠忍して露艦隊の來航を待つてゐた。而して此の海戦は、嘗て六百二十四年以前に、北條氏が蒙古の大軍を鏖殺したと略ほ同一の地點に於て、露艦隊を全滅に歸せしめた。

新聞は斯く書いて、次に大將の私的事情にまで説き及んでゐる。曰く

大將は日頃は東京の郊外に、極めて質素な生活をしてゐる。彼は菊いぢりが好きである。而して沈座して其の菊花壇を眺めては黙考するのを、唯一の樂しみとし、或は閑居して海軍に關する戰略戰術を研究し、或るときは又親しい友人と碁を圍んで日を過ごすこともある。海を愛好し、海の生活を長く續けた爲めか、彼は魚釣りも大好きであるが、それかと云うて山獵もまんざら嫌ひでもない。』

最後に慙う云つてゐる。

大將の夫人は、海江田氏から嫁いて來てゐる人だが、今度の渡米旅行には同伴してゐない。と妙に不思議さうに書いて、筆を擱めてゐる。之も米國國民性から見れば尤ものことではなからうか？

日米戰爭は荒唐無稽の謬論

七月三十一日の紐育ヘラルド紙は、其の倫敦特電を掲げてゐる。曰く

東郷大將は倫敦出發に際し、往訪の記者を引見し、

『余は約二週間の滞在豫定を以て、貴國に旅行せんとしてゐる』と前提し、且つ記者の質問に答へて曰く、

『日米戰爭説の如きは、荒唐無稽の甚しいものである。兩國間の關係は從來終始一貫、最も親厚のある間柄であつた。而して過去に於てさうであつたと同様に、今でもさうであり、又將來に於ても然かあるべきものと、固く信じてゐる』と。

世界一の御馳走を供したい

七月三十日の紐育ヘラルド紙は、面白い記事を掲げてゐる。曰く、

ニツカー・ボツカー・ホテルでは、此の有名なお客さん(東郷大將)に對し、今迄にどこでも召し上つたことのない程の、優れた献立を差し上げんとして、豫め粒撰りの佛人と日本人の料理人を雇入れ、腕によりをかけて其の日の來るのを待つてゐる。云々と

此の記事で見ても分る如く、如何にして東郷大將を優遇せんかと苦慮してゐるかを窺ふ

ことが能きる。但し此の日本人の料理人雇入の一件は、他のところにも書いてあるやうに、後で沙汰止みになった。
 兎に角短い滞在にも拘らず、此の意氣込みで、歓迎せんとするのだから、後に實際各所に起つた如き御馳走攻めが、大將及隨行の谷口中佐の胃の腑を疲労させ、戦争をするよりも此の方が餘程苦しい、との嘆を發せられたとか傳へられるのも、強ち虚言でもあるまい。
 その上に、今から考へれば、當時大將には、膀胱統石の痼疾が頭をもたけてゐた時期であつたので、嘔之には閉口せられ、ことゝ察せられる。

一見したところ軍人らしくない

七月三十一日のバツハアローのコンマーシャル紙は、東郷大將を評して左の如く云つてゐる。

(前略)大將は今や六十歳の齡を重ねてゐる。而して體軀は矮少である。其の容貌を一括して云へば、どう見ても、之が實際怖るべき戦争の具であるとは思はれない。彼の頭髮は常

に短く刈られてゐる。而して口髭は鐵灰色で、之も短い。

彼の眼光は慧々として人を射る如く、其の判斷力、認識力の偉大さを考へさせられる。彼は又常に冷靜に身を持ち、毫も物に動じない風采を備へてゐる。而して常に口元に微笑を湛えてゐる。だから何人も一見して恐ろしい軍人と思ふものはない。

大旅館ニツカー・ボツカーの優遇設備

八月二日の紐育ヘラルド紙は、大將及び其の一行の爲めに、止宿所たるべきニツカー・ボツカー・ホテルに於ける特別施設に就いて、其の概容を記してゐる。曰く、

政府は東郷大將及び其の一行の爲めに、ニツカー・ボツカー・ホテル内に、特別の居室及び其の他を豫約してゐる。

一つの客間は、ルイ第十五世スタイルのもので、大將個人用の特別食堂を、之に附屬せしめ、更に之に隣接する數室を、其の隨行員及び接伴官ヘール君や、ボツツ海軍大佐の爲めに充ててゐる。

又大將用として別にエレベーターを準備し、食堂給仕、附添人、お小性なども特別に選定せられてゐる。(註、特別エレベーターは後に取止めた)

自動車は有蓋式のすばらしいもので、其の二臺をば常に宿舎に置き、大將一行の訪問や市中見物用に、自由に使用されてよいことにしてある。

過日來問題となつてゐた料理人に、日本人を使用することは、遂に沙汰止みとなつて、専ら旅館附屬の佛人の料理人が之に當ることに變つた。勿論大將がお好きとなれば、旅館の倉庫にないものに限り、どんなものでも他から仕入れる筈である。

日本料理の方は、恐らく日本人俱樂部の招待の際に、満喫せらるゝであらうと思ふ。

此の記事を読んで見ても、米國人が當時何から何まで、最高のサーブを大將に捧げんとした厚意は、大將御自身でなくとも、我が國民としても、自ら感謝の念が胸中に湧き出づる感があるのではないか。

東郷大將の愛人

八月二日の紐育ブレッツスは、次の如く記してゐる。(全文)

日本に於ても日露戦争直後には、大將に對して「萬歲」の聲が相當猛烈に叫ばれたことであらうことは十分承認する。併し大將が茲二週間の内に、我が國に於て浴びせかけられるであらうバンザイのそれに比べては、恐らく幾百分の一に過ぎないものであつたであらう。而して彼に對する讚辭も、日本人がなしたものに劣らぬ底のものを呈することを疑はない。何となれば、彼は時と共に消滅し變化するやうな一時の人氣ものではなくて、永世に亘りて海の偉人であること及び其の偉人を米國民が國賓として今直接之を迎へることが、頗る名譽であつて、此の意味が米國人によく判つてゐるからである。

大將は幼時一哲學者の弟子であつた。而して其の教育が基礎となつて、今日の偉大なる運命に導いたのである。該哲學者は、昔日本の學者(王陽明の唱道したもので、専ら沈着冷靜、事に當つて動搖しないことを深く教へた學問である)。

四十四年の長い歳月を、此の學問の修養に捧げた彼は遂に日本海々戦に於ける彼の不朽の信號『皇國の興廢云々』を、三笠艦上に掲げるに至つたのである。彼は十五歳にして身を生國薩摩の海軍に托し、それから十一年の後には、東京に於ける海軍學校の初期の卒業者(?)として其の名を列した。

大將は今日では實際英語では話しはえないが、幼い頃兵學校時代には、あれでも英國に學んだことがあるから、吾人と同じ言葉で語つたことはある。のみならず彼は英國に在りては、二つの學校の教程をも踏んだことがある。而して其の最後のものは、確かウールウキツチの英國海軍兵學校であつた筈である。

過去に於ける日本の三大戦争―日清、北清、日露―は、彼を順次大尉から大將迄進ませた。海は彼の精神を打ち込んだ愛人であつた。其の他に愛人はない。されば此の愛人『海』に對しては、極度の忠實と最後の努力を捧げた。

大將は、現在では全く『沈黙の提督』ではあるが、一たび其の矮體を吾人の眼前に立たしめるとき、當時の激戦を髣髴せしむるが如き萬雷の轟きと、死に壓倒せられし露人最後の悲惨の叫びとの交響樂的光景を、吾人の心胸に高鳴りせしめるものが、尙ほ儼として存する。

大將の訪米は日米交戦熱のよき緩和劑

八月二日のバンガ―市コンマース紙は左の如き記事を掲げてゐる。

日本の海のヒーロー東郷大將は、我が國民に依つて多大の歡迎と優待とを享くるであらう。此のときを利用して、兩國の交情を一層良好に導くことは、極めて必要のことである。

それが爲めには、從來一般人がもつと覺醒して、例の戦争主義者や、過激論者達の云うてるやうなことを信ずるのを止めて、只管兩國の友情を増進する方向へ世論を傾けさせるやうにせねばならぬ。

忌憚なく云へば、此の數年間と云うものは、對日感情が著しく險惡であつて、甚しいのになると、パナマ運河の開通する前に、日本が今にも攻め寄せて來るやうな、そんな豫言をするものもあつたが、之は全く謬つた觀察であつて、到底實現し得べからざるものである。如何なる方面から考へて見ても、日本は今我が國に對して、戦争をする氣もなければ、又することも不可能である。

紐育到着前の状況

八月三日の紐育サン紙は、東郷大將の紐育到着前の準備即ち接伴官者其の他に就て詳細に之を報じてゐる。今其の一部を紹介する。曰く、
 (前略)左記の接伴官兩氏は、政府の命を受けて、昨日華府から此の地到着し、豫て準備してあつたニツカーボツカーホテルに投宿した。

一 國務次官(第三席次)ヘール氏(國務卿代理)

同氏は大將の國內旅行中、全期を通じて隨行接待することゝなつてゐる。

二 海軍大佐テムブリンボツト氏

同氏は主として海軍關係の案内役に當り、海軍方面の諸種の便宜を圖る爲めに、特別に隨伴を命ぜられたものである。

旅館に於ける室の準備は、大將と副官谷口中佐(尙眞)の爲めに遺憾なく整へられてゐる。尙ほ兩氏共夫人は同伴してゐない。

日本大使館附武官華府在勤平賀海軍中佐(徳太郎)は、日本の内田大使の代理として之れ又昨日到着した。

大藏省は大將の爲めに、沿岸警備隊に附屬するセネカ卿を、當地に回航することにしてゐるが、同船は、ルシタニア卿が、檢疫を受けてゐる中に、大將を之に轉乗せしめ、ウエスト・フォーチー・ストリートの埠頭迄送り、そこから旅館ニツカーボツカー迄は自動車に依る豫定である。

華府及び紐育からの歡迎諸員は、早朝沖合のルシタニア號に往くのであるが、其の際も矢張り此の船に便乗することになつてゐる。而してそれらの人々の氏名は左の如くである。
 國務省のヘール氏、海軍大佐ボツツ氏、海軍中佐平賀清太郎氏、領事水野幸吉氏、醫學博士高峯讓吉氏、ブルー・クリンの海軍工廠長リュッツ氏、陸軍省代表陸軍少將フレデリック・デント、グラント氏、ヴァノック代將等

公表せられたる旅行豫定

八月三日紐育タイムス紙

左記は接伴官たる國務省のヘール氏が、本日發表したる東郷大將の米國內漫遊中の旅行日程豫定である。

八月三日(木曜)紐育港外着、ルシタニア號下船、大藏省所管のセネカ號に移乗、紐育市埠頭着
同四日(金曜)午前十時三十分市長ゲノール氏を訪問、正午市長答訪

午後三時三十八分紐育發、同九時二十五分華府着。大統領の名に於て大統領陸軍補佐官アーチバルド・パット氏公式に歡迎訪問

同五日(土曜)午前十時國務卿ノックス氏及び海軍卿ウインズロー氏を訪問、同十時三十分國務卿次て海軍卿答訪、同十一時より午後零時半迄米國海軍士官の訪問を受く。次で

白聖館に於て大統領に謁見、午後便宜市中觀光、午後八時白聖館に於て大統領の晚餐會
同六日(日曜)マウント・ヴァーノンに於ける國父ワシントンの墓前に花輪を捧ぐ、此の行大

統領用のヨット、メーフラアワー號を使用する、午後八時日本大使館に於ける大使の晚餐會

同七日(月曜)午前十一時十五分アナポリス海軍兵學校視察、午後八時國務卿ノックス氏の晚餐會、同十一時ナシヨナル・プレッス俱樂部に於ける全國新聞記者の歡迎會

同八日(火曜)華府海軍工廠視察、國務次官ハンチントン・ウィルソン氏と午餐を共にす、午後八時海軍卿ウインズロー氏の晚餐會、次で海陸軍主催の歡迎會

同九日(水曜)午前十時バルチモアに向つて華府發、バルチモア市中觀光、及び同地市長の午餐會、午後三時五十分バルチモア發、同五時五十六分費府着、

同十日(木曜)午前十時費府市長レーヴァン氏を訪問、同十時半市長答訪、同十四分海軍大佐エーダブルユー・グラント氏(リーグアイランド海軍造船所長)の訪問を受け、同十

一時三十分東郷大將同道造船所に到り、場内視察、前記所長と午餐、午後費府のクラムプ私立造船所及びカムデンの紐育造船會社を視察、夜間は觀劇會

同十一日(金曜)費府市中觀光、午後四時紐育に向つて出發、紐育到着後夕刻より觀劇會
八月十二日(土曜)ウエスト・ポイントに於ける陸軍士官學校參觀、ホドソン河通航には、既記

メーフラアワー號を用ふ。同校に於ては、大將の生徒隊觀兵式あり、同校長將軍少將バリ
ー氏の午餐、メーフラアワー號上にて晚餐

同十三日(日曜)紐育市中觀光、夜間公式晚餐會
同十四日(月曜)午前何等の會なし、午後一時日本人俱樂部及平和協會の午餐、午後市中觀光、
旅館に於て晚餐會

同十五日(火曜)紐育海軍工廠視察、同工廠長と會食、紐育在留日本人の晚餐會
 同十六日(水曜)ガヴァナーアイランドに於て同地司令官グラント海軍少將と會食、午後五
 時三十三分ポストンに向け紐育發、同十一時ポストン着
 同十七日(木曜)午前十時ポストン司令官海軍少將フィフツ少將を訪問、同十時三十分同少
 將答訪、午後ポストン海軍工廠及びフォールリヴァ私立造船所視察
 同十八日(金曜)ハーヴァート大學視察後、午後四時五十分バツハアロー及びナイヤガラ瀑
 布に向けポストン發

同十九日(土曜)午前七時四十二分ナイヤガラ着、同地見物の後、午後バツハアローに歸着、夕
 刻モントクールに向け同地發

尙ほ海軍省情報部長にして接伴官の任にあるボツツ大佐の談によれば、

『東郷大將に對しては、各地の海軍工廠は、如何なる部分でも、又如何なる實驗中の計畫でも、自由に開放視察の便宜を與へられてゐるし、又各旅行先に碇泊してゐる軍艦は、どの艦でも勝手に閱覽を乞ふことになつてゐるといふことである。』

差し當り紐育に於ては、彼の三隻の異なる型の戦艦を參觀せらるゝの可能性がある。即ち一萬六千噸の旗艦コンネクチカット號を始めとし、弩級戦艦ノースダゴタ號や、最新式

のフロリダ號がそれである。就中フロリダ號は、現時海上に浮んでゐる世界中での有力なものに數へられてゐるものである』と。

又接伴官ヘール氏は語つて曰く

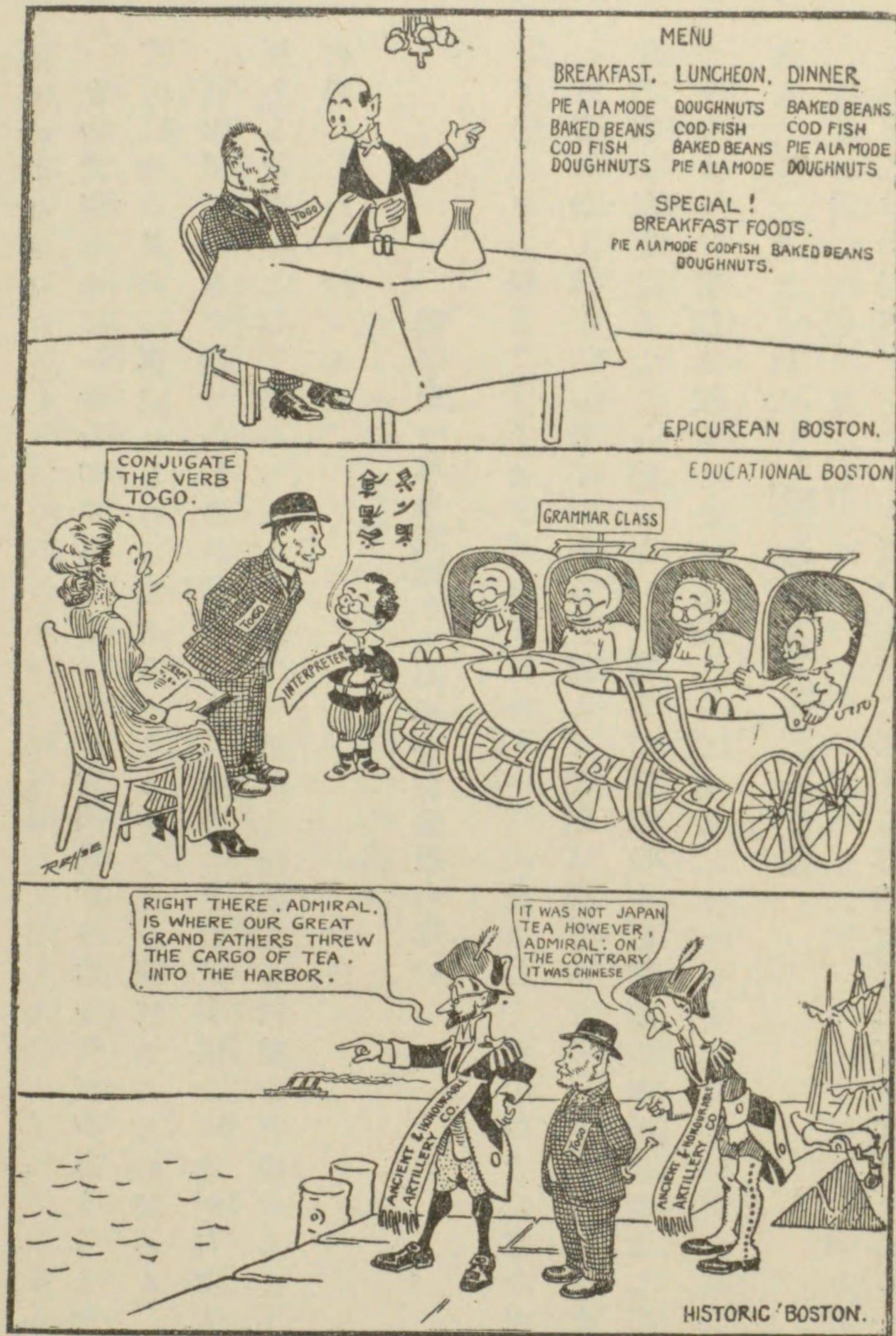
『前略]キユナード會社の通報によれば、東郷大將の乗船ルシタルニア號は、恐らく今夜紐育に廻航せぬであらう。セネカ號に乗つて迎へに往く人々は、自分の外左の通りである。』

ボツツ海軍大佐、コック海軍大尉、平賀海軍中佐(徳太郎)、水野領事、グラント海軍少將及び其の幕僚、フエントン海軍大佐、埴原日本大使官一等書記官(正直)

尙ほ内田大使は、明日バルチモア停車場に於て一行に加はり華府に同行する豫定である。當地警察署長ワルドー氏は、騎馬護衛隊を以て、明日大將の市長訪問の往返の途上を警衛することになつて居り、特別刑事巡查隊は、大將の紐育滞在中ホテル内外の秩序維持と警衛に任じ、市中觀光の場合にも同様隨行して任務を遂行する筈である。

大將は隨員としては、谷口副官と給仕一人とを有するだけで、至つて簡單である』と。

最後に旅館ニッカーボツカアの主人の談話は、左の通りである。
 『大將専用として、旅館内に特別エレベーターが準備してあるとか、料理人には日本人を使用するとかの新聞記事があるが、そんなことはない。若しも大將が日本料理を望まるとな



(上) 毎日朝も晝も夕食も順序こそ變れ同じ献立
 (中) 教師「皆さん to go といふ動詞の變化を述べなさい」
 案内人「大將閣下、東郷の變化に就て唯今教へてをりますところ……」
 (下) 舊時代崇拜の大砲鑄造會社重役二人曰く「大將よ、我等の祖父は茶を輸入しました、それは日本からでなくて支那からです(米紙東郷大將漫畫)」

らば旅館の使用人に依つて、どんなものでも貯藏の品からこしらへて献立をする積りである」と。

巨船ルシタニア號上より米國民に呼びかける

八月三日の紐育のアメリカン紙は特號見出し、一號活字を以て、ルシタニア號からの無電による大將の米國々民に對する聲明書を載せてゐる。聲明書に曰く
 『米國々民に對する挨拶、

余は米國全國民の一客として茲に始めて貴國を訪問することは、誠に得がたき機會であつて衷心感謝に堪へない。而して此の近代的世界の大国に旅行することを得るのは、余にとりて今迄の余の旅行中のクライマックスであらうことを豫期してゐる。
 今茲に余の考へてゐる豫想以上に出るものは恐らく天を摩する幾十層の高樓と、評判の高いナイヤガラ瀑布に越すものはなからう。併し余の興味を惹く主なるものは、我が隣人に關する研究であつて、前記の驚異に値するものも、畢竟我が隣人の成せる産物であると考

へるからである。

余の貴國の土に一步を印するとき必ずや貴國民が日本の良友であることを現實に且つ直ちに余の眼前に認識せしめるであらうことを今より確信するものである。

日本國民は悉く斯くの如き思想を有してゐる。且つ又貴國をば我が日本人の啓發者、光輝ある教導者として認めてゐる。余は今斯かる崇高なる精神を實現せんことのみ専念し、貴國に近づきつゝあり。

戰爭中一本も家族からの手紙を受取らない

八月三日の紐育アメリカン紙は平賀海軍中佐の談として左の如き記事を掲げてゐる。

提督は最も温厚なる君子である。而して沈黙は提督の宗教である。而して何物も彼れの思想を阻害することを許さない。嘗て日露戰役中、敵艦隊の撃滅に専念してゐた間、夫人や愛兒からの書簡を読むことすら敢てなさなかつた。

ヘリンリー親王御來遊以來の大歓迎

八月三日の紐育イブニング紙は、大將に關する詳細なる記事を掲げてゐるが、今其の一齣

を抜萃して見る。

紐育の觀迎振りは實に盛んなもので嘗て獨逸皇太子ヘンリー殿下の御來遊のあつた以來、未だ嘗て見ざる程のものである。

來る十一日華府から再び當市に歸還された場合の如き、歡迎會や招待や其の他のお祭り騒ぎの計畫は、實にすばらしいもので、そのときの大將の當市滞在期間は、五日間であるが殆んど休憩の寧時なき迄の歡迎攻めに遭ふことであらう。さう考へると寧ろ氣の毒なくらゐるである。

セークスピアよりも澤山の名句

八月三日の紐育イブニングウォールド紙は、東郷大將の沈黙主義に就いて左の如く書いてゐる。

日本に於ても東郷大將は餘り演説はしない。したところで、我がルーズベルト式のやうな、人を驚かすやうなもの、は少しもない。彼は頗る沈黙主義の人であつて、彼の評判高い日

露戦争だつて、何事も語つてゐない。彼が假りに言葉の經濟的見地に立つて、之を言はないでゐるとすれば、多くの言葉の貯藏財産家である筈である。其の意味から言へば、彼は美辭名句の貯藏量に於ては、或はセークスピア以上であるかも知れない。

沈黙と謙遜は彼の全體を支配してゐる特色である。彼は嘗て英國に於て學んだ経験がある。即ちテームスの練習船ウアースター號にもゐたことがあるし、又綠威の海軍兵學校に籍を置いたこともある。併し斯くの如く、英語は勿論、其の他の外國語をもよく知つてゐるに拘らず、いざと云ふ場合になると、いつでも最後の奥の手を出して、自國語の蔭に隠れて了ふのである。

斯く沈黙家ではあるが、彼はそれでも、周知の如く、我國の准海陸軍大學校長であるとも謂へる。と云ふのは、外でもない。彼れの貽した教訓が、取りも直さず我が大學校の教科書に織り込まれてあるからである。具體的に之を云ふならば、彼れの其の部下に與へた訓示が、大統領の命令によつて、學校に下附され、教官も學生も、之を脊々服膺してゐる、其の事實が何よりの證據である。

編者記す、前記大統領の命令と云ふのは、次の如きものである。

陸一般命令第四十一號

左記大統領の書簡は、之を陸軍一般に布告す

一九〇六年二月二十四日

臨時陸軍卿の命に依り

參謀長陸軍中將 ジェーシー・ペーッ

東郷大將は東亞の戦争に於て、偉功を奏し、古今著名なる海將の班に列せり。而して其の戦後聯合艦隊を解散するに當り、麾下一般に與へたる訓示は、實に千古不易の玉條にして、須らく陸軍省一般命令の中に挿入すべきものと思ふ。

夫れ精銳なる武人は精銳なる陸海軍を形成する根本なり。武人をして精銳ならしむる要素は、世界各國敢て異なることなし、而して武人は各々此の要素を具へざるべからず、武人の要素とは、何ぞや、勇氣決斷、智慮、練術、修學の志、克己の心、並に健強なる身體これなり。苟も此の要素を具へざれば、精銳なる陸海軍を造ること能はざるべし。然り而して此の要素ありと雖も、至當の準備即ち平素の練磨を缺くに於ては、其の精華を發揚する陸軍と海軍とを問はず、苟も我が米國の將卒たらん者は、一旦事あるに方り、克く其の本分を盡くすの道、一に平素の準備にあるの理を銘記し、常に致々怠るべからず、平時安逸を貪る將卒は、戦に臨みて

敵に傳ふべし。且つ此の理を銘記すべきもの何ぞ獨り陸海軍に限らんや。我が米國の如き進歩せる大共和國にあつては、陸海軍は決して國民の意志以上の働きを爲すこと能はざるものなれば、我が國民は國家の聲譽を辱しめらるゝ勿らんことを、自己は勿論子々孫々に至るまで、其の責任として服膺すべし。如何に平和を愛する國民にても、時に或は蹶然起ちて戦はざる可からざるの場合あらん。此のときに方り、直接に國家の聲譽、國族の光榮を擁護するの責任に當るものは、陸海軍人なりと雖も、國民にして豫め之が備へをなすに非ざれば、彼等軍人何ぞよく其の責に任ずるを得んや。吾人は強大なる陸海軍を備へざる可からず、強大なる陸海軍は又精銳なる軍量を有せざるべからず。然れども殊に必要なるは、平素孜孜として心身の修養練磨に努め、軍器の使用に慣熟し、戰爭の重大なる責任と、辛勞とに堪ふるの素地を造るにあり、東郷大將の訓示は、吾人に關係なき部分を省略するに左の如し(註訓示は他に出て居るを以て敢て掲げず)余は苟も我が米國の武力の一分子たる者、並に他日戦端を開くの不幸を見るとき、國民の信任に孤負せざらんとする者に敢て此の訓示を進むるものなり

千九百零六年二月二十一日

大統領ルーズベルト

斯る外國人の訓示をば直ちに取つて以て之を自國の陸軍に示したるが如きは、蓋し合衆國は勿論他に類例のないことであつて、并は一面に於て東郷大將の訓示が、世界に比類のない名訓示であることを立證して餘りあるものと謂はねばならぬ。然らざれば如何に米國が共同愛を標榜するとも、斯る特別の取扱ひをなす筈はあるまい。

出征に臨み唯一言

八月三日の紐育イブニングウォールド紙は、東郷大將の公務の遂行に忠實であつて、之が爲めには私事を抛つた美點に就て、左の如く述べてゐる。

同紙は先づ大將の風貌を評して曰く、
ロゼストウエンスキー中將の艦隊を撃滅したる、此の有名なる提督を物語る書物は、高さにすると五呎にも餘るもので、之はエリエット大統領から、我が國の學校に配布せられてゐる。

彼は亦此の本の高さにも足りぬ極めて小軀の人であるが、ズングリとした逞しい骨格を

有し、且つ活氣旺盛してゐる。彼が歩行してゐるのを見ると、いつも同じやうに、温順な眼を、伏し目勝ちにしてゐる。彼の顔容を飾る唯一のものは、貧弱なチヨッピリ髭があるのみである。併し彼の眼光だけは常に慧々として人を射るが如くである。然かも其の容貌は如何にも温和な風があつて、此の人が露國の大艦隊を全滅せしめた猛者とは、如何にしても考へられない。と。

次には出征の首途の模様を、次の如く描寫してゐる。曰く、

日本の政府に智者がゐると見えて、開戦に先ち、大將を選抜して聯合艦隊の長官の重責に置いた。彼は任に赴くに當り、夫人に向つて唯一言を遺した。曰く、

『犬を大切にせよ、艦へ手紙は無用である』と。

斯くて夫人の外に二人の令息、一人の愛嬢とを家に残して、黙々として去つた。而して彼の大事業を敢行したのである。

又愈々戦地に向つて佐世保軍港を出發するに際し、彼は一夕部下士官の爲めに訣別の宴を張り、それが終つた後とて、一人宛士官を私室に呼んだ。而かも提督は一言も發することなく、秋水の滴る如き短刀を眼で指示したのみであつた。士官は残らず同様に、之を眺め敬禮し、而して室を辭し去つた。此の短刀は『勝たざれば死せよ』といふ日本のさむらいの

格言を表徴するものであつた。されば此の場面は取りも直さず、彼等に對する提督の深い意味ある教訓であつたのである。

士官は果して之を如何に解したかは知らぬが、兎に角、此の沈黙、刺戟、畏服、約束の下に、日本の艦隊は敵地に向けて進發したのは事實であつた。而して六週間の長き間、彼等の消息は國民にも秘せられてゐた。

斯くて彼が露艦隊邀撃の途に上る迄、其の所在は輜晦に附せられた。斯かることは、誠に至難の業であつて、之に成功したことが、艦では戦勝の原因の一半を擔ふて餘りある業績と謂つてもよいと考へられるのである。

凱旋後自分の寫眞を買取る

八月三日の紐育イブニングウォールド紙は、亦次の逸事を書いてゐる。

大將の逸話に就ては語るべく餘りに澤山あり過ぎる。其の中には、謙遜、忠君、國民愛に關するだけでも枚舉に違がないほどであるが、今は其の一例を擧げて見よう。

彼が日本海々戦直後、帝都に凱旋するや、國民は恰も自分が凱旋將軍であるかの如く狂喜し、意氣揚々として提督を歓迎した。萬歳の聲は山河に轟き、花輪は彼の馬車を埋めた。寫眞屋は彼の肖像を賣るに忙殺されてゐた。

彼が先づ驚いたことは、誰れも彼れもが、大切なお金を散じて、無暗に自分の寫眞を買つてゐる光景であつた。

彼は考へた。

『これはよくない。これは無駄なことだ』と。

そこで寫眞師から其の種板を買ひ取つた。而して根元を斷つたら、最早こんなことはなくなるであらうと着想した。

すると寫眞屋は之を承知した。併しそこにぬかりのない商賣屋は、大將に其の代償を求めた。勿論其の要求額は頗る莫大なものであつたので、直ちに其の通り應ずることはできなかつた。が、兎に角其の目的は達せられた。

其のとき提督は彼に向つて、

『君は何故に普通の種板の價で、余に譲れなかつたか』

『商賣には又商賣の手がござりますから』

之が此の商人の答であつた。

此の寫眞屋も亦其の道にかけては一廉の計略を有する戦術家であるものと謂はねばなるまい。

ポケットに軍艦を隠す

八月三日の紐育タイムス紙は、排日論者を戒め、其の謬論を駁してゐる。曰く

東郷大將の名聲は、數年前日露國交の誤解の結果生れたもので、今や永久に消えざる文字もて大空に畫き出されてゐる。

彼は近く紐育に到着し、政府並に國民の賓客となるであらうが、此の際遺憾なことには、極めて少數ではあるが、當地附近の新聞の中には、此の尊敬すべき偉人の來米にも、其のポケットの裡に、軍艦でも隠して持参してゐるが如くに誤解し、嘗て彼がロゼストウエンスキー中將を脅威したと同じく、アンクルサムに對しても脅威であると誠にやかに論ずるものがある。併し我がタイムスは全然之を信じない。彼は何等そんな惡意の企圖を有つてゐるものではない。故に我が新聞社としては、欣然として衷心より之を歓迎するものであり従

つて我が國民の計畫し參加する、凡ての歡迎方法に賛成し、且つ極力之を後援するの準備をしてゐるのである。

米國も斯くの如き海の英雄が欲しい

八月三日ボストンのイブニング・トランスクリプト紙は、東郷大將を歡迎するのは、國民が之に依て斯かる英雄を生み出さんことを希望するの意をほのめかしてゐる、曰く
 豫期しない故障の起らざる限り、巨船ルシタニア號は、早ければ今夜、遅くとも明朝は入港するであらうから、日本の海のヒーローを我が紐育に迎へるのも目睫のうちに迫つて來た。吾人は斯かる名譽ある他國の偉人を賓客として迎へることは、米國創始以來初めてのこと
 に屬する。

大將に對する世の中の意嚮が、今尙ほ區々であつて、彼れに對して、いかがはしい評論をなすものも絶無とは云へないのは遺憾のことであるが、明日になれば、恐らく事情は急變するに違ひあるまい。詳言すれば、一日の差で前日までの或る感情は、他の感情の爲めに押へつ

けられて仕舞ふであらうし、然らざるも道義的の見地から言葉を謹しむに至るであらう。
 それは兎に角として、最近の日露戰爭に於て、日本海軍の長官としての絶大無比の彼れの功績は、永久に消ゆることなき歴史の頁に特筆大書せられてゐることもあり、特に我國にとりては其の事實が既に頗る興味ある事柄である。我が國民の大多數が擧つて大將の來訪を歡迎するのは、一つは其の爲めである。今や我が國は海のヒーローを産出せざるべからざる必要に迫られてゐるので、尙ほ更其の感を深くするのである。

彼は今を距る十六年以前、即ち日清戰爭のときから戰爭の舞臺に乗り出した、而して其のときの彼の態度が、確乎たる信念と、何物にも臆せざる勇氣に於て、上下の認むるところとなり之が動機となつて、彼の榮進は頗る速かであつた。果して日露戰爭前、兩國の間に風雲急を告ぐるや、具眼の當局は遂に彼を簡拔して、聯合艦隊の重任を托するに至つた。而して此の鑑識は誤りではなかつた。即ち該戰役に於ける彼の功績の偉大さは、世界の史上未だ嘗て類例のない程の、光輝あるものであつた。

當時日本の海軍が、果して歐洲の最も強大なる海軍國露國に對抗し得るか否かは、其の技倆から考へて多大の疑問を以て見られてゐたし、それに加ふるに東郷大將の著任後、日尙ほ淺いことなどをも考慮に入れて、斯かる運試しの戰爭に關し世界の各國は寧ろ日本の爲め

に憂慮を感じてゐたのは事實である。

然るに豫想は全然裏切られた。彼は何等の違算なく、よく大事を遂行し、あのやうな大捷を贏ち得たのである。素より諸種の状況は多少彼れに有利であつたかも知れぬが其の結果の大部分は、畢竟比類なき彼の技倆と勇氣に歸せざるを得ない。

此の際彼に對する、我が國民の注意は、それが一片のお座なりのものであつてはならぬ。彼は我がグラント將軍の如く、沈黙の提督として有名な人である。併し謙遜なる無言は、決して其の評判を毫も傷けるものではない。

日常の彼れの一舉一動から、尊敬に値する偉大なる實證を捕捉せんとするのは、抑々無理な注文である。

彼れの旅行日程は、恐らく其の人の選定によるものであらうから拘束すべきではないが、恐らく我がボストン市には、其の足跡が印せらるゝであらうと思はれる。と云ふのは、當地には海軍の造船所があるからである。素より此の造船所には、歴史上何等顯著の點はないが、彼れの興味と研究心とに鑑み、彼れを此の地に吸引するだけの價値は十分に具へてゐると思ふ。

白堊館に於ける珍らしい饗宴

白堊館に於ける大統領主催の東郷大將の歡迎會に就て、八月三日の紐育州ブルークリンのイーグル紙は次の如く書いてゐる。

大統領タフト氏は、東郷大將の爲めに、來る八月五日(土曜日)の夜、白堊館に於て盛大なる晩餐會を催ほして、町重なる饗宴を張ることになつてゐる。之はワシントンに於ては長い間行はれたことのない、最も珍らしいものであると云ふのは、スタッグ・デンナーと云うて、男子ばかりの集りであるからである。(註)恰も避暑季節にて、大統領夫人其他社交界の婦人が悉く首府にゐない爲めであつた。

此の宴會に招待せられる人々は、副大統領ヤーマン氏、海軍少將ジョージ・デューエー氏、註米西戦争の勇將日本大使内田康哉氏、各閣僚を始め知名の士四十人以上であらう。

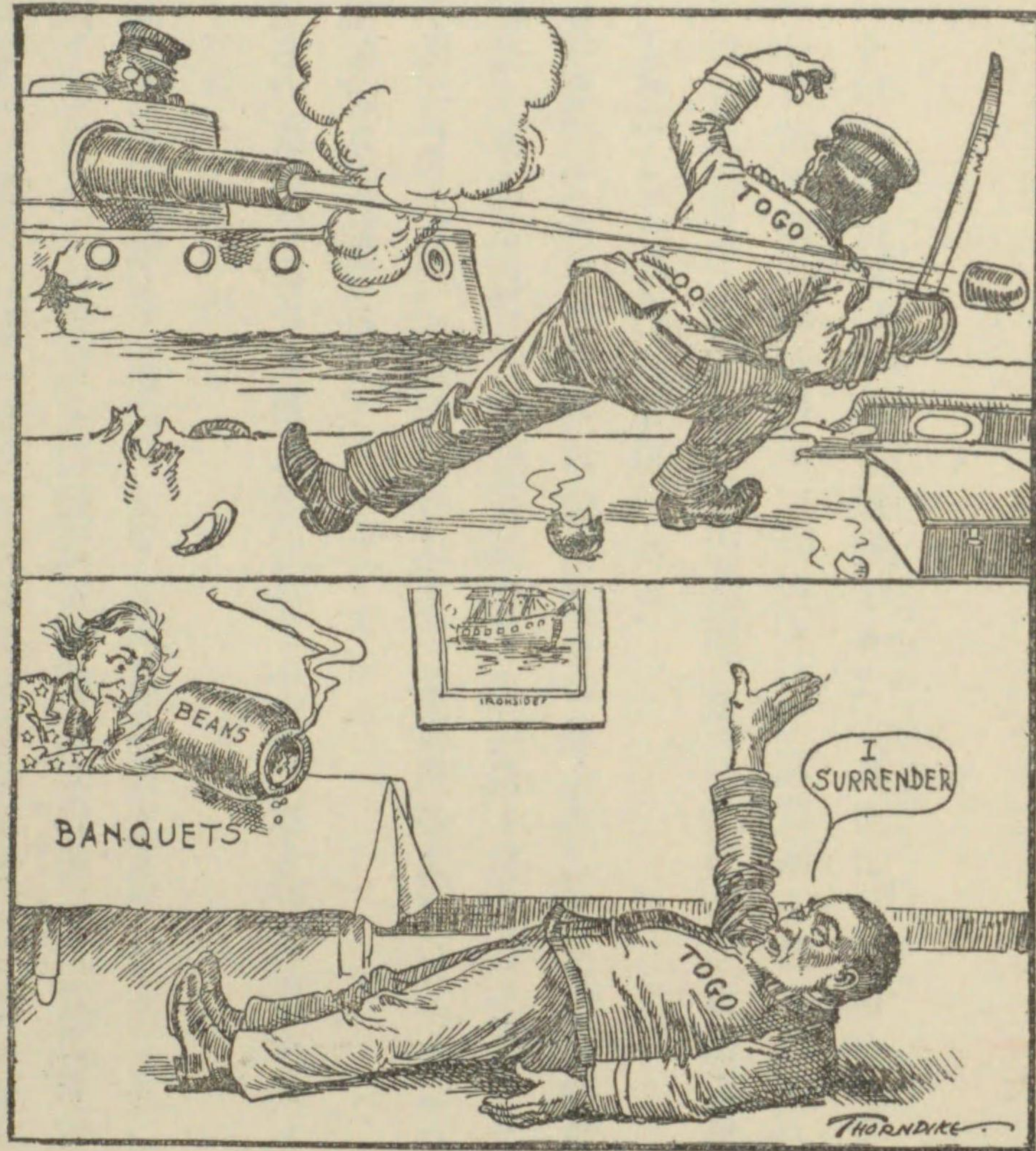
之に引續いて夜會が準備せられてゐる。而して之には數千人の人が集るであらう。此の歡迎會は、スタッグではなくて、綺麗な米國の女達のダンスが、東の間で行はれる筈である。

から海の大偉勳者も、此の度は多くの米國貴婦人を觀覽するの機會を得ることであらう。素より此の夜會は、主として室内で行はれるのであるが、白聖館の東西に亘るテレースも亦利用せねばなるまい。

敬稱は餘計なことだ

八月三日のボストン・グローブ紙は、大將の來訪に依つて、兩國の友情を深厚にすべきことを強調してゐる。曰く
我が國民が東郷さんを歓迎するのは、彼れが日本大帝國の一國民であること、其の國民が我が米國に對して友情に厚いことが其の主なる理由でなくてはならぬ。嘗にそれが、近代的に於ける最も光輝ある、海軍の大英傑であるが故なりとするのは當らない。故に彼を呼ぶには、アドミラルだとか、伯爵だとかの敬稱を無暗に附けるのは畢竟餘計なことである。東郷さんを無理にお招きしたのは、我が國民であつた。其の一事から考へても、吾人は此の際兩國の交情を一層厚くすることに努めねばならぬ義務がある。されば此の際彼の

米紙にあらたは東郷大將の漫畫



(上)

ヒヨロ／＼の露西亞の
彈丸を避けるぐらゐのこ
とは朝飯前のことだ。撃
て、撃て！

(下)

晚餐にさう蠶豆ばかり
出されてはかなばない、
降参々々。どんな大海戦
にもびくともしなかつた
大將でも、斯う毎日同じ
ものを食はされては全く
参つてしまふ。

恐日論者の蠢動に息の根を止め、排日思想の煽動を消散せしめねばならぬ。東郷―と云ふ人は、實にも静かな、果斷な、自己中心的な寡言家であるが、併し又温かみの多い方である。而して我がグラント將軍よりも、もつとスフキンクスであると傳へられてゐる。

日本の新聞記者も、英國人のそれも今迄一度も彼の唇を破らせ得なかつた。實に彼は話の種を賣らぬ男である。

又傳ふるところに依れば、彼は大の英雄崇拜家嫌ひだと云はれてゐる。だから熱心の餘り野卑な萬歳を浴せかけるが如きことは、最も好まないことである。

右の事情であるから、彼れの來訪を好機と考へて、大海軍豫算をば議會からせしめようならんかと企てるのは愚の骨頂である。

故に吾人はそんなケチな考へを起さないで、今少し方面を變へて、彼を眺める必要がある。惟ふに日米兩國の親交は、永い間のもので相當強く結ばれてゐる。之を持續し兩國の利益を計るのは、只世界の平和を維持することに努力すればそれでよいのである。

八月三日の華府のポスト紙は、東郷大將の來訪に依つて、日米の交情の益々親密を加へんことを強調してゐる。曰く、

東郷大將は嘗に日本に於てばかりでなく、世界に於ても比類なき海軍戰術の大家であるが、同提督は英國歸朝の途次、本日我國に到着せらるゝことになつた。

紐育に其の乗船が入港すると、直ちに華府に來訪される豫定で、其の際には大統領國務卿海軍卿などが出迎へることになつてゐる。

提督は、アナポリスの海軍兵學校をも參觀し、又時機を見て、どこかで我が弩級戰艦を閲視することになるであらう。

我が國民は從來から大將に對しては、非常に尊敬の念を拂つてゐる。それは如何なる譯かと云ふと、いつも變らぬ其の慇懃なる態度、大軍の總指揮官としての偉大なる能力の實證、及び世界的名聲を擧げた彼の捷後の其の謙讓振りなどが、先づ第一に數へらるゝであら

二つのお土産を持つて歸朝されたい

う。
 之に加ふるに提督は近代きんたい的日本にほんをよく代表してゐる。而して今や提督を歓迎するに當つて、吾人の記憶を新ならしむるものは、他ではない。太平洋の彼方に位置する旭日の國がどこ迄も男子的であること、及び漸進的の氣質を多分に具へてゐることである。凡そ正常な思想を有する我が米國々民は、舉つて日本の繁榮と其の平和へいわとを祈つてゐないものはない。而して此等の實現は、太平洋を支配する日米兩國民が、益々友情を敦厚にして、相互の商業的交際を増加することに依つてのみ獲得し得らるゝものと信ずる。吾等は切に望む。提督が此の度の來訪に依つて、愉快の裡に、且つ何等かの暗示を得られんことを。之を言葉ことばを換へて云へば、此度のお土産として、お持ち歸りを願ひたいものは、『幸福であつた』と云ふ好印象が一つ、他の一つは我が巨萬の富を擁して、爲さんとして、成し能はざるなき、財的要素を有してゐるにも拘らず、常に平和に眷々たるの實證の感得である。此の二つのものは是非共、歸朝土産とせられんことを重ねて懇望する。

東郷大將始めて米土を踏む

八月四日の紐育のサン紙は、大將の到着時の光景を最もよく描寫びやくしやうしてゐる。此の種の記事として代表的のものと信ずるが、故に之を左に掲げる。
 對馬海峡に於て露國艦隊を全滅した人而して今や米國政府及び國民の國賓として迎へられつゝある偉人東郷大將は、昨夜遅く、キュナード線ルシタニア號にて、英京倫敦から、當地に到着した。
 華府政府の官吏及び日本の駐在ちざい外交官等を含む接待員歡迎員等は、始め同船が今朝早く入港するものと考へてゐた。
 然るに昨日午後に至り、キュナード會社から、同船が正午前に檢疫所沖に來着するとの報に接したので、前記の人々は最初定めてゐた豫定に従ふこと、決定し、午後九時三十分發のセネカ號セネカで灣を下り、東郷大將をルシタニア號船上に迎へること、なつた。
 セネカ號に乗つた人々は、大統領を代表する第三國務次官ベール氏海軍を代表するテム

プリンエム・ホット氏及び其の幕僚クック氏、東區陸軍司令官エフジィ・グラント氏及び其の幕僚内田大使代理埴原日本大使館一等書記官駐在武官平賀海軍大佐、紐育警察署長ワルドー氏、警視シユミツドバーガー氏其の他多數の新聞記者であつた。

巨船ルシタニア號が、檢閲所前に着いたのが、午後十一時五十五分で、其處に投錨するや否や、右の一行は、乗船セネカ號を去つて、更に小型汽船カルメット號に移乗した。

(因に編者記す、セネカ號、カルメット號は、共に平時大藏省に屬し、戦時は海軍省の管轄に移るべき、沿岸警備隊所屬の船であつて、紐育州に配置されたものである。セネカ號は全長二〇四呎、幅三四呎、排水量一、九四〇噸、カルメット號は、全長九四呎、幅二〇呎、排水量一七〇噸、前者は元驅逐艦、後者は元水雷艇で、共に雜船になつてゐる。

カルメット號が、巨船に近づくと、此の一行を見んとして、甲板に蝟集せる乗客の口から、一切に喝采の聲が起つた。

間もなく一行は巨船に上り、東郷大將と上甲板で會見した。先づヘール氏は進んで大將と握手し、簡單なる挨拶を述べた。其の辭に曰く、

「余は合衆國大統領の名に於て、提督の遙々此の國に來訪せられたることを深謝す」と。
以てグラント將軍、ヴァベック將軍及び日本の外交官が引續いて握手を交換した。

東郷大將を含む一行が、或るエレベーターに乗るや否や、矢の如く下甲板に下降した。そこには貨物の出入口があつて、之が丁度よい鹽梅に、カルメット號の上甲板と同じ高さであつたので、舷梯や導板に依らずして、極めて手軽に東郷大將は同船に移り乗ることができた。一行も之に續いて移乗し、そしてセネカ號に向つた。

セネカ號に到着して間もなく大將は、多數の米國新聞通信記者と引見した。其の際大將は、英語で以て、さも注意深く、極めて短いスピーチを試みた。恐らく草稿に依つて、前から豫め暗誦したのではなからうか？ 曰く、

「凡そ人は、其の希望、願望及び豫期したことが叶ふたときほど、愉快なことはない。此の意味に於て余は今甚だ幸福を感じてゐる。何んとなれば、余が多年の宿望であつた米國に來ることができたからである。間違なく明日は貴國を見る事ができるであらうから、其のときには、もつと詳しくお話をすることができようと思ふ」と。

海軍中佐谷口尙眞氏、註現時の海軍大將軍令部長は、大將の副官で且つ通譯を勤めてゐるが、記者は更めて同氏に向ひ、左の如き質問を發した。

「東郷大將は、本日、英、米、佛三國が仲裁々判協定に調印したことを御承知であらうか？ 若し御承知であるならば、之に就ての御感想を伺ひたい」と。

此の質問が谷口副官に依つて通譯された後、大將は同様通譯を介して、左の如く答へられた。

「それは世界の平和によりて、誠によいことである。余は頗る欣快と考へてゐる」と、そこで記者は、

「閣下は、日本も應ては此の協定に加はるものと考へられるか、どうか？」

之に對し、谷口副官は、大將の意を體して、次の如く答へた。

「大將は、此の協定は日本にとりても、よいものとは思ふが、政治問題に就て話すことは好まれない」

斯くて記者との會見も濟んだ。此のときセネカ號へ運んで來た荷物も揚げ終つたので、船は動き出した。大將は安樂椅子に腰かけて休息した。其の傍らには、ヴァベック將軍が席を占めた。

同將軍は嘗て日本にゐた爲めに日本語は極めて巧みであつた。之には大將も驚いてゐた。而して大層大將から重寶がられた。

紐育市への廻航中、大將は立ち並んでゐる、幾多の摩天樓を眺めて感興を惹かれたやうだが、之が説明を聞いて、更に其の大きさや、基礎工事など彼是れと質問をしてゐた。

其の他、河上に架けられた大鐵橋も、目についたらしい。そこでヴァーベック將軍は、それに就て、高さ、長さ、構造等を巨細に説明するの忙しさうであつた。

彼等は戰艦のことに就ても、談話を交換してゐた。而して大將の云はれるには、

「余は英國の戴冠式に於ける觀艦式で、貴國の戰艦デラウエアー號を見た。而して其の戰艦や、其の他の一般的外觀に就て甚だ興味を感じた」と。

(編者註、同艦は一九一〇年明治四十三年ニューボートニユース造船所に於て竣工した最新型であつて完備級から云へば、我が國の鞍馬が概ね之に相當するものである。而して兩艦共前記晴れの觀艦式に肩を並べて參加した。今其の要目を掲げて見ると、左の如くである。但し此の兩艦は艦種が違つてゐることに留意を示すものである。因に此の二隻は共に華府會議の結果廢棄せられて了つた。

艦種	艦名	排水量(噸)	速力	砲裝	進水年
巡洋戰艦	鞍馬	一四、六二〇	二三・〇	十二吋砲四門	一九〇七年
戰艦	デラウエアー	二二、〇〇〇	二二・五	十二吋砲八門 五吋砲十四門	一九〇九年

尚ほ大將の云はるゝ戰艦とは、前橋のこと、近代軍艦は、此の艦を利用して筒火指揮用の諸装置を設けてあるので、一見普通の艦とは思はれぬやうな形に變つて來た。加之、

米國のものは、よく寫眞で見ると、如く籠型になつてゐるのが、目につく、恐らく大將も、此のこ
とを指示されたのであらう。

偕て一行が紐育市の二十四丁目街にある新埠頭（新埠頭）に着くと、既に待つてゐた市民の大群は、
サイドカーの警官隊が制止するにも拘らず、無暗に壓倒して來て、熱心に萬歳を叫んだ。

自轉車隊の警官隊は群集を衝き退けて漸くのこととて道を開いて、大將一行を自動車に乗
せ、途中嚴重に警戒しつゝ、ホテル・ニツカー・ボツカーに送り届けた。此のとき撮影者は、絶間
なくマグネシウム（マグネシウム）の襲撃（襲撃）を浴せかけた。

大將がホテルに着いたのは、翌八月四日の午前一時三十五分であつたが、此處にも市民の
大群集が、眞夜中にも拘らず詰めかけてゐて、波止場に於けるよりも一層盛んな歓迎振りを
見せた。マグネシウム（マグネシウム）の光景（光景）も亦同じであつた。

ホテルに於ては、此の一行の爲に政府が豫め指定して置いた、各室が既に充分整つてゐた。
此處では何等公式の儀禮もなく、大將は直ちに寢室に入つた。

今朝八月四日午前十時大將は市長ゲノール氏を其の市廳に訪問し、市長は次で大將をホ
テルに参訪（参訪）することになつてゐる。而して午後三時三十分發の列車で、大將はワシントン
に向つて出發すべく、ワシントン停車場には、大統領代理として祕書アーチバルド・バット氏

八折共同

之を迎へ且つ同地のホテル・ニコ・ウイラードに案内する筈である。

大將は明五日（土曜）に大統領タフト氏を訪問會見し、又同夜は大統領の晩餐會に、主賓とし
て招待せられてゐる。

（註、尙ほ同紙は、此の記事に續いて、大將の生立から英國留學、日清日露兩戰役中の偉功並に
逸話を掲げてゐるが、他の記事と重複するを以て之を略す）

ネルソンよりも東郷に學ぶところ多し

八月四日の紐育サン紙は、米國海軍は東郷大將に學ぶべき點が多いことを縷々述べてゐ
る。曰く、

今や紐育は、卓越せる海軍の大戦術家を迎へてゐる。

東郷大將は、世界歴史の組成上から見て、稀に見る大人物として教へらるべき人である。

彼が双肩に擔つた彼の對馬海戰の彼の國にとりての重要さに就ては、如何ほど大袈裟に
述べて、も眞實以上に出ることは能きない。而して彼れの事業は、一言にして云へば黃海

と日本海との制海權を得ることにかゝつてゐた。

惟ふに京城の確保、奥第二軍の遼東半島の上陸、野津軍の鴨綠江に於ける成功、乃木軍の旅順陥落及び大山將軍の奉天の大勝數へ來れば、之れ皆東郷大將の旅順沖の光輝あり且つ有
效なる海軍戰術の賜物に依るにあらざれば、よく成し得ざりしところである。即ち其の戰
術の主眼とするところは、日本軍の故國より滿洲本土への交通線を保護して、之をして聊か
も敵艦隊より惱まされざるやうにすることであつた。

降つて對馬海戰に於ては、東郷艦隊は、強力なるバルチック艦隊を殲滅し、以て空前の大捷
を獲得し、未曾有の偉功を樹てた。茲に於て露國の海軍は名實共に、悲惨なる最後を遂げ、又
立つ能はざるに至り、従つてそれ以來といふものは、日本朝鮮滿洲を連結する海上權は、全く
日本の掌中に歸した。其の結果、日本の陸軍省の供給する兵資萬端を滿洲に送ることは、恰
も一河を渡す渡船同様の容易さを以て行はるゝやうになつた。

歴史上兩大國の交戰中、未だ嘗て斯かる完全なる制海權を獲得した例はない。
斯くの如にし、海上輸送は極めて容易となり、一方日本側は多大の便宜を得たと同時に、
他方露國側は一層之が困難を加へ、依て以て、滿洲の野戰場裡には、彼此陸軍兵力の比率を、常
に三と一とに維持するの趨勢を剛致し、延て露國皇帝をして、遂に和を乞ふの道に出づるの

已むを得ざる窮境に至らしめ、其の結果多大の賠償を以て戰役を終ることゝなつた。

故に海軍史上に於ては、對馬海戰は、優にアプキール灣若しくはトラファールガールの海
戰と、其の範疇を等しくするものである。

(編者註、アプキール灣の海戰説明)

一七九八年七月、那翁第一世のアレキサンドアに上陸するや、佛國提督ブリユイエー之が
擁護の爲め、其の艦隊をナイル河口に碇泊せしめた。然るにネルソン提督之を牒知し、兩
艦隊は茲に大激戰を開くに至り、其の結果佛國艦隊は大敗し、延て那翁終生の大方針たる
東方經營は之を捨てざるべからざるの窮境に陥り、遂に旗を捲いて歸國した。茲に於て
か、ネルソンの英名頓に揚つた。世に之をナイルの海戰とも稱してゐる。

現代の海軍將校は、ネルソンの戰術を研究するよりも寧ろ東郷のそれを學ぶ方が、本務遂
行上多大の利益がある。

提督の名に於て、日露戰爭の終末に發せられたる訓示の一齣に曰く、

『醜テ之ヲ西史ニ見ルニ、十九世紀ノ初ニ當リ、ナイル及ビトラファールガールニ勝チタル英
國海軍ハ、祖國ヲ泰山ノ安キニ置キタルノミナラス、爾來後進相襲イデ能ク其ノ武力ヲ保有
シ、世運ノ進歩ニ遅レザリシカバ、今ニ至ルマデ其ノ國利ヲ擁護シ、國權ヲ伸張スルコトヲ得

タリ」と。
 若し夫れ將來或る名將が、同様の訓示を爲す場合ありとせんか、必ずや上記に倣ひ日本と對馬海戦のことに言及すべく、而して其の場合亞細亞の島帝國に於ける東郷大將の大捷と其の効果を強調することを忘れないであらう。

英米佛仲裁條約と東郷大將の來訪

八月四日の紐育ウォールド紙は、東郷大將に待つに平和の維持を以てしてゐる。曰く、
 チョージ第五世陛下の戴冠式參列の歸途、此度我が國を訪問し、國賓として優遇せられつゝある東郷大將は、『日本のネルソン』と稱せられてゐるが、成程大將は實にトラファルガー
 ール以來の大海戦に偉功を樹て、大英雄の名を贏ち得たる近代的の大海將である。
 然るに大將は、沈黙で、謙遜で、而して働きある勇將であることは、我が故グラント將軍以上である。

大將は又今日の日本海軍をして、よく列強の海軍に比肩し得べき立場にあらしめた大功

勞者である。

大將は亦グラント將軍の如く、働きに於ては、驍敏であるが、言葉に於ては極めて臆病である。

更にグラント將軍同様外國の侵略を防禦する以外には、常に最も熱心なる一格言の擁護者である。其の格言とは何ぞや、曰く、

『吾人をして平和を得せしめよ。』

である。故に今日吾人が、大將を衷心歡迎する所以のものは、勿論大海將としてよりも寧ろ平和の愛好者としてである。

其の平和の愛好に對しては、恰もよし、大將の訪米第一日に於て、英米佛三國の間に仲裁條約が調印せられた事實が存する。此の西洋列強の協調をして一層有效にし、且つ之を助長する意味に於て、吾人は極東の強國にして、而かも太平洋の優越者たる日本の參加を敢て切望して止まないものである。

此の重大なる事實に直面する吾人は、大將の訪問に依つて我が國民が、奮に偉人に接する名譽に狂喜するに終ることなく、更に百歩を進めて最も有效に且つ効果あらしむる如く、心掛けねばならぬ。

大將はネルソン崇拜家

八月四日の紐育トリビューン紙は、「東方のネルソン」と題して、左の如く述べてゐる。

曰く、東郷大將の來訪は、我が國民特に其の一部の人には、多大の興味を以て迎へられてゐる。此等の人々は、日頃陸海軍の大偉業に就ては、神經過敏な程に熱心家であり、又同時に、ジョンや、ハルや、フアラガットのことを説いては、無性に狂喜してゐる手合ひでもあり、將た又自分自身も亦、ドレークや、グランヴェールの血を受けてゐると云うては、自慢してゐる連中で、謂はゞ軍人崇拜家である。

(編者註、ドレークは、英國の海將であつて、一五四〇年に生れ、一五九六年に歿した人である。彼れの海將としての勳功は、一二にして止らざるも、其の最も人口に膾炙する功業と云ふものは、一五八八年西班牙の無敵艦隊が、英國を襲ふたとき、彼が英國艦隊を率いて、之を英佛海峡に邀撃し、大に之を粉碎したる事蹟である。

グランヴェールは、一五四一年の生れで、一五九一年に死んだ英國の海將であつて、レイ氏の第二回の企圖たる、一五八五年に於けるヴァージニアの遠征に關與し、之を占領したる功績を有する人である。而してレイの行衛を探知する爲めに、頗る苦難を嘗めて冒険の行動を敢てし、然も其の目的は達しなかつたが、其の歸國に當りては、頗る多量の珍貴なる物産を本國に齎らしたと傳へられてゐる。

ハルは一七七三年の誕生、一八四三年に歿したる米國の海將であつて、一八一二年の戦役に於て、非常な名譽を獲得した。开は英國の巡洋艦グエリエール號を捕獲したときの、彼れの勇敢なる行爲と、船舶操縦上の非凡なる技倆に依るものである。

ジョンは、ジョン・ポールジョンとして、有名なる猛將にして且つ冒険家である。彼れは一七四七年、蘇蘭に生れ、一七九二年に歿してゐる。彼れは一七七五年、米國政府に招聘せられ、艦隊を率いて英國に渡り、其の沿岸に脅威を加へ、且つ英國軍艦ドレーキ號及びセラピス號を捕獲する等、米國の爲めに偉勳を奏し、後佛國、露國の海軍にも傭聘せられたが、露國の爲めには、リマン海戦をも行つた。

フアラガットのことは、他にも掲げたから、之を省略するが、唯彼が米國の名提督であつて、英米戦争及び南北戦争の大偉勳として、今尙ほ一般米國民から崇敬の的となつてゐる。

ことだけを記するに止めて置く。

されば我が國民は、日本の偉大なる海の勳功者に就ても、其の參加せる二大戦役(日清、日露)を通じての彼れの行爲をば看過してはならない。而して其の一は實に大將が火蓋を切つたものであり、他は又彼が終局に導いたものである。而かも其の功績の顯著なる、其の成效の光輝ある、總て彼の力に依らざるはない。

故に現在目前に、此の尊敬すべき英雄に接することを得て、數年來懐いて以て披瀝し能はざりし、切なる崇敬の念を、今彼れの前に提供し得ることが、如何に吾人にとり満足であるかは、又茲に絮説を要しない。

ネルソンと比較し得べき海將は、世に稀れではなからうが、近代的の海將としては、彼れを以て最も適當とすることに異論はない筈である。

彼は多年英國に留學したことがある。而してネルソンのとつた先例に留意すること特に深く、従つてネルソンの精神を吸収したことは想像に難くない。

然し、彼の主なる功績をよく研究して見ると、其の間自らネルソン戦術の適用せられてゐることが分明である。

彼れの頭腦の中には、確かに此の英國の大人物其の儘の精神が宿つてゐるものと思はれ

る。彼の一八九四年の日清戦争に於て、彼が指揮せる當時無双の快速船浪速が英國旗を翻へせる清國運送船高陞號に對しとつたる勇敢なる處置、果斷に見ても、又非運の露艦隊が對馬海峡に表はれた際、彼がいかに微笑を湛へたあの態度に徴しても、何んとなくさう感ぜられるではないか。

彼の氣質は海將の型として最高位に値するものと云へる。其の主なるものを、擧げることは一面に戦勝の秘訣を語るの感がある。即ち彼は作戦計畫に當つて思慮深く、且つ將來を卓見し得る明快なる判断力を有し、準備に多大の苦心を拂ひ、行動に大膽にして敏に、戰鬥に猛烈果敢であり、而して最後に、勝ちて毫も誇らざるの美德を具備してゐる。

此の偉大なる海將を有する日本！それと遠く離れてゐることは我が國にとり何よりも幸福である。何故ならば、此の隔離は取りも直さず、東半球の相對國との間に、戦争のあり得べからざることを思はせるからである。であるから、一國の英雄に對し、一部の反對者が云爲するやうなあの様な不敬のないやうに、衷心から尊敬と歡迎とを以て、大將に對せねばならぬ。

尙ほ一言を付け加へねばならぬことがある。嘗て先年我が艦隊が日本(註、原文には露西亞とあり蓋し誤植ならん?)を訪問したとき、最も親切にして且つ町重なる待遇を受けてゐ

る。だからそのことに對しても、露艦隊に勝ちたる主動者をば、至誠を以て歡迎し之に酬の義務がある。

大將は或る銀行家に酷似

八月四日の紐育アメリカン紙も亦大將がルシタニア號から、セネカ號に移乘し、紐育市への遡航中の記事を詳細に載せてゐる。其の中で他の新聞記事と重複しない點だけを左に掲げる。

記者質問して曰く、

英米佛三國は、此の度解決困難なる外交の懸案を解決する爲めに、相互の間に仲裁々判協定條約を締結したが、大將の之に關する御意見如何？

大將の答、

「世界の平和の爲め、それは甚だ結構のこと、思ふ。余は此の條約の出來たことをば、甚だ欣快とする

記者は多分肯定の答を得らるゝものと考へて、左の問を發した。

「此の條約に對して貴國の態度如何？」

大將の答

「余は政治問題の話は努めて避けたいと思ふ。余にはそれができないのだ。何となれば余は政治家でないから」

船中で大將の興味を惹いたのは、寧ろ其の眼眸の裡に入る諸種の建築物であつたらしい。彼のシンガービルディングの宏壯なる建築を見て、痛く感動されたやうで、大將は、

「恰も一大氣球が、火事に遭つてゐるやうだ」

と驚嘆された。(註、時に八月四日午前一時頃の光景)

又ブルークリンの橋の下を通過されたときには、徑間と他の徑間とを見渡して、云はるゝには、

「二隻のルシタニアが、其の下に並ぶことが能きよう」と。之に對しても相當驚異の眼を向けられた。

市廳の高塔にも興味を感じたやうに見えた。而して最後に、

「如何なる方法で、こんな大きな建築物を組立てるのか

との質問が發せられた。
グラント將官は之に答へて、

「先づ土中の岩面まで深く掘り下けて、基礎を鞏固に造るのであるが、其の建築物の總重量は鋼材の組合せで、夫れ自體がお互に持合ふ仕掛になつてゐる」と説明した。

大將の此の日の服装は、黒衣裳で、頭には山高帽を冠り、軽いオーバーを着てゐた。而してツクムと大將を見た人々の凡てが、異口同音に云ふところは、大將の風貌が、銀行家のジャコブ・コーチ・シッフ氏をつくりだとのことであつた。蓋し斯く想像すれば、大なる誤りはないからう。

大將は英語は全然用ひなかつたが、それでも吾々の話を聞くことは能きたと見えて、大抵のことは、通譯を煩さないうで、直に答へられた。

彼は紐育の新棧橋から、旅館までの途すがらも、其の兩側の建築物の美觀に對しては、可なり注意を拂ふてゐたことは、屢々頭を鶴のやうに長くして、のぞいてゐたことで推察することが能きる。

又ルシタニア號下船の様様に關して同紙は次ぎの如く述べてゐる。曰く、

大將はワシントン府及紐育市からの歡迎員一行をば、恰も待ち詫びてゐたかの如くに、欣

然として之を迎へた。該一行もルシタニア號の入港を今かくと檢閲所で、二時間も待つてゐたのであつた。

さてヘール氏先づ大統領を代表して一場の歡迎の辭を述べ、其の他の代表亦續いて夫々同様の挨拶をした。

斯かる眞夜中に、紐育の沖合で、こんな莊嚴な光景を呈したことは、未だ嘗て聞かないことである。

ルシタニア號の全乗組員と全乗客とは、總立ちになつて大將の下船を見送つた。

大將と一緒に乗つて來た乗客は、黒山の如く、手摺に押し寄せて、大將がカルメット號に移るのを見んとしてひしめいてゐた。

大將が其一步を甲板に運んだとき、僅かの間だけ、嚴肅なる靜寂なシーンがあつただけで、場面は直ちに萬歳の夕立の雨と急變した。

一等船客の總ての人々は、舷側に折り重なつて、セネカ號上の大將の一舉一動をば見漏らすまじと、薄暗き星明かりを通じて、熱心に凝視の目を離さなかつた。

セネカ號からは、無線電信にて、大將の到着をば全國に向つて打電した。

大將の紐育着前後の光景

八月四日の紐育のイブニングポスト紙は、東郷大將に關する、其の到着時の前後の狀況、紐育市長との訪問交換、ルシタニア號船中の挿話等に就て最も詳細に報じてゐる。されば他の記事と重複せざる範圍内に於て、之を譯出して左に掲ぐることにする。

本日東郷大將は、市長との訪問交換に於て、數萬の群集から熱心を籠めた萬歳を浴せかけられた。されば今日彼は此の國に於て我が市民の親切心を快く味つた筈である。

云ふまでもなく、大將は對馬海峡の戦勝者であり、又今は我が國の名譽ある國寶である。大將が海軍大將平八郎東郷とも呼ばれてゐるが、自國では海軍大將東郷平八郎と自署するさうである。

我が紐育市は、近代の大海戦に於ける大偉勳者に對して、能ふ限りの歡迎振りを示した。即ち彼のルシタニア號船上に於ける出迎から、ホテル前に待ち焦がれてゐた群集よりの歡

呼の聲に至るまで、凡てよく之を立證してゐる。ホテル前の群集は、日本海々戦の偉人、六十四歳の大將の英風を一目でも見たいと思ふ心の一念から、恰も凱旋將軍を迎へるが如き強烈なる熱心さを以て、彼に對した。

素より此の偉人は、戦争の勝利者であるが、大將が最初我が國民に呼びかけた聲明にもある如く、彼は亦平和の愛好者でもある。

彼は英米佛三國の仲裁々判條約に就ても、衷心欣んでゐるのみならず、日本も、之に参加することをよいこと——大將の言葉を直譯すれば——だと思ふてゐる。

大將が我が紐育市長を訪問したときには、其途中は五十人から成る騎馬巡查に護衛せられ、又市廳の廣場には、別に他の一隊が整列して出迎へた。

大將の市長訪問は、大將の合衆國へ足を踏み入れてからの最初の公式儀禮であつたので、其の印象は相互に深きものであつた。

此の日ホテルに於ける大將は、例刻よりも早く起床し、其の船室に於て楽しい朝食をしたためた。そして其の献立は、梨瓜、鮮魚、ハム、雞卵、紅茶、パンであつた。

午前十時大將の附添としてホテルに來着した人々は、大統領副官ウィリアム、エーチヴァー、バック氏、紐育國民護衛軍のマンソン大尉、紐育豫備役海軍大佐レイノール氏等であつた。

数千の市民は、ブロードウェイや、フォーチーセコンド街に於て、大將の瞥見を得んとして群つた。而して此の混雜を制止する爲めに、交通遮斷が一時間半も續いた。こんなことは稀な現象である。

豫定と一分も違はず、午前十時十五分には、大將の自動車はホテルを出發した。

彼が其の立關に表はれたとき、丁度其前に當るフォーチーセコンド街の差し向ひのところには既に騎馬巡查の一隊が整列してゐたが、大將の顔が見えると、直ちに前進して敬禮した。此の間喇叭は制規の吹奏を行ふた。

大將の此の日の服装は、白服の軍服に旭日大綬章を佩してゐた。

大將と副官谷口中佐とは、護衛隊の敬禮中之に對して舉手の答禮をした。

それが終ると、大將は副官の外第三國務次官ヘール氏、海軍省代表ボッツ大佐と共に、自動車に乗つた。

此のとき約五千の市民が、ホテルの前に群つてゐたが、凡て手にく、日本の軍艦旗を持つてゐて、之を振つたから、其の壯觀であつたことは、筆紙に盡し難い。

ホテル屋上の北と西の隅とにある旗竿には、日本の國旗が翩翩と朝風にたなびいてゐた。

其の日の大將の道筋を述べて見れば、先づフォーチーセコンド街を横斷してシックスブロードウェイへ、そこからフォーチー街に下り、更にヒフス廣小路を横ぎり、ウエバーレーブレースに下り、ブロードウェイに出で、市廳に至るといふことになつてゐた。

以上の沿道には、立錐の餘地なき迄、市民を以て埋められ、大將が其の前を通過する毎に萬歲々の聲、山河をゆるがすばかりであつた。又殆んど全部と云つてもよいくらゐる、各々の軒は日本の旗を以て飾られてゐたので、恰も紐育市は、日の丸の滿艦飾の感がした。

中にもブロードウェイの日本雜貨を取扱つてゐる店舗では、店員が店先に並んで、萬歲の聲を一入張り上げて、唱へてゐたのが特に目立つて見えた。

一行の二番目の自動車には、水野紐育領事、オッタワ總領事、クック海軍大尉三番目のものには、ヴァーバック將軍、レイノール海軍大佐及びモーリス海軍大佐が乗つてゐた。

市廳前の廣場にも、一團の群集が待つてゐて、大將に對して敬意を表し、大將が市廳の立關に歩を運んだとき、一齊に猛烈なる萬歲を三唱した。大將は之に對して舉手の禮を以て對へ、然る後階段を上り、次で應接間に通つた。そこでは僅か一分間だけ腰を卸ろしただけで、廳て市長の用意してあつた設けの室に案内された。

其處では、谷口副官の通辯で、市長に感謝の辭を述べ、約十五分間で儀式的のことは終つた。序でに述べて置くが大將は英語の聞き分けは、能きるが實際に話す方は不得手らしい。

儀禮の終つた後で、市長は大將に向つて、
 「余は閣下に拜顔することを得たので甚だ光榮に感じてゐる。我が市民は閣下の御功績に就ては貴國民同様に、よく知つてゐる。だから閣下は、こゝでも評判の大立物である。そのことは余の言を俟たずとも、閣下が親しく自動車から眺められたであらう彼の群集の歡迎熱で、十分御推察下さつたこと、思ふ」と語つた。

大將がホテルに歸られてから間もなく市長は、大將の場合と同様の騎馬巡査其の他の行列で、答訪した。之も亦莊嚴であつた。

市長は直ちにホテルの八階の應接室に案内せられ、兩人は直ちに暖き握手を交換した。市長は先づ副官に挨拶した後、大將に向つて戴冠式の所感を敲いた。

之に對して大將は、「儀式の莊重規模の大なることに感動した」と答へた。

次に又大將は米國を好むか、どうかと問ふたところ大將は恚う答へた。

「甚だよい國である。而して余に對する歡待に就ては、甚だ喜んでゐる」

大將は尙ほ之に附け加へて、

「當市に滞在中は、何卒諸事儀式張らずに、友達扱にして欲しい」と述べた。

斯くて數分の後、市長はホテルを辭して歸途に就いた。

前記市長の答訪の終つた後に、大將は多くの米國新聞通信記者を引見した。其のときの狀況は次の通りであつた。

大將に對する多くの米人の疑問は、其の姓名の呼び方であつた。彼れの名に就ては、從來東郷平八郎とも、平八郎東郷とも稱へられてゐる。彼は之に就て次の如く説明した。

「どちらでもよいのである。但し東郷は姓であり、平八郎は名である。故に日本では、其の習慣に従つて、姓たる東郷を先きにしてゐるけれども、外國の旅行先では、又其の國々の習慣に従つてどちらでも構はず使つてゐる。

更に大將は記者に向ひ

「余は大都市たる當市を訪問し得たことを甚だ愉快に思つてゐる。從來長い間當市訪問を念頭にかけてゐたが、此の度漸く其の目的を達したので、頗る欣快に堪えない。と同時に

此の機會を與へた貴國政府及び貴國民に對して、更に感謝の念を禁ずる能はざるものである」

記者の一人が、「此の地に於て何が最も大將の興味を惹いたか？」との問に對し、大將は慙う答へた。曰く、

「確かに何と云ふことは、未だ能きない。何となれば余の今迄に見たところは、唯市長訪問の途次だけに過ぎないからだ。恐らく再びワシントンから此の地に歸つて來たときには、今少しく何事かを語ることが能きようと思つてゐる。併し余は此度が始めての訪米であるが、貴國政府の招待を光榮とし、且つ到着以來貴國民及び讀者諸君の、余に對して示された厚意に就ては、感謝に堪へない」

記者は更に、

「米國の婦人に對する御感想を伺ひたい」と問へるに對し、大將は微笑を漏らし且つ答へて曰く、

「余は今迄米國婦人と會見するの機會がなかつた。されどワシントンでは恐らく其の機會のあること、豫期してゐる」

本日ホテルに於ては、簡單なる晝餐が、午後一時半から、大將に依つて用意せられる筈で、之

には旅館にある大將周圍の人々が、參加することになつてゐる。而して午後三時三十八分發の汽車で、大將は谷口副官、ボツツ海軍大佐、ラツク同大佐、平賀海軍中佐と共に華府に向ふ豫定である。

大將は英語では話さない

同紙は續いて、ルシタニア號到着の光景や、その他挿話に就いて次の如く書いてゐる。ルシタニア號では、夜が更けてゐるにも拘らず、船客總員は床にも就かず、快く晴れた深夜の天空を仰いで甲板に出で、大將出迎一行の來着を待つてゐた。

見てゐると、セネカ號に横付してゐた小蒸汽船カルメツト號は、矢を射る如く、巨船目蒐けて近づいて來る。

巨船ルシタニア號の左舷には、船客が一杯に群つて、其の小船の來るのを凝視し、今かくとハンカチーフを打ち振つて之を迎へた。

セネカ號を出て、カルメツト號に乗り移つた人は、五人であつて、是等の人が巨船に上ると

直ちにノアの箱船の飾りのある入口から、船内の廣間に案内せられた。
大將は豫め其處に立つて居られたので、こゝで一行と會見せられた。而して先づ大統領代理ヘール氏の歓迎の辭があり、之に對する大將の簡單なる答辭があつた。(編者註、此の歓迎の辭は他の部にも出て居り、大將の答辭は米國民に對する聲明と略々同一であるから、之を略する)

右の儀禮が終つてから、大將は歓迎に來た人達と一々握手を交換した後、小蒸汽船カルメット號に移乗の爲め、歩を舷梯に運んだ。此のとき船内數千の乗客は萬歳を以て之を送つた。

大將は之に對し、止つて低頭の敬禮をなし、次でセネカ號は横付を離してセネカ號に向つた。

大將はカルメット號に乗り移るや否や、記者達に向つて、ニコ／＼と微笑を以て軽く會釋をされた。而して通譯を介して云はるゝには、

『余は英語は話せない』と。

そこで記者達は、三國の例の仲裁々判協定や、何かに就て質問を發した。(編者註、此の際の問答は他の部に出づ、故に略す)大將は記者團から離れて、グラント將官や、ヘール氏や、ヴァバ

ツク氏と共に相並んで座を占めた。而して大將は先づグラント氏に話しかけて、云はるゝには、

『余は貴官の御容貌を見て、先考グラント大統領を想ひ起すことが能きる。尤も余は直接に父君と面會したことはない。何故ならば彼の一八七九年(明治十二年)父君の日本へ來朝せられたときには、余は東京にゐなかつたから』と。

此の間大將は英語で話すことは、極めて稀であつた。而してそれは用心の餘り口を開かないのであらうと云ふ感じを起された。

大將は英語で話すときには、極めて慎重なる態度をとる。恐らく彼は、質問に對して答辭を避けたいと思ふやうなときには、『自分は日本人であるから』といふ極めて都合のよい防禦武器に、身を隠してゐるのではなからうかと想像される。

ルシタニア號船内の挿話

同紙を始め多くの新聞は、筆を揃へてルシタニア號船内に起つた出來事を書いてゐる。

併し出所が同一と見えて略々同一のことを掲げてゐる。左記は同紙のものである。前にも記した如く、大將がルシタニア號から下船せられんとき、夜が更けてゐるにも拘らず乗客は一人も寢に就くものはなく、總て甲板に立つてゐる。最後の萬歳を以て送つた此のことに徴しても判る通り、船内に於ける大將の評判は非常によかつた。それは彼が極めて平民であつたからである。

多くの挿話が航海中に残された。それは主として大將の特種トクシユの癖や、其の友誼に厚いことなどに關するものである。

或るとき一少女が、突然大將に署名を乞ふたところ、大將は立ち所に其の請を納れられたと云ふが如きも、之に依つて其の平民的なことが判るではないか。

航海が終つた頃、大將は財布を遺失したことに氣がついた。其の中には百磅の手形と私用の重要書類が入れてあつたのである。

併しそれは乗客の一人紐育のサミュエル・カスター氏に依つて發見せられたので間もなく大將の手に歸つた。

此のとき大將は英語で次の如く、同氏に云つた。

「誠に難有タシヤと思ふ。が、茲で直に御禮をすることは能きない。併し若し貴君が、日本に來る

やうなことがあつたらば、屹度余の旗艦に招待して、一緒に愉快に航海することだけは、今茲で確く約束することが能スき」と。

又こんなこともあつた。それは紐育へ入港の日の夕刻、船内の音楽隊で、音楽會コソウサウが催ほされたときのことである。

番組が進んで、スター・ス・バングルド・バンナーとなつたとき、大將はそれが合衆國ナショナル・ソングの國歌であることに氣がついたらしい。誰よりも眞先にすつくと起ち上つた。而して低聲ではあつたが、其曲に連れて合唱した。

大將は日露戦争が終ると、軍令部長の要職に補せられてゐるが、一九〇九年明治四十二年の十二月に其の職を退き、軍事參議官となつて今日こんにちに及んでゐる。

嘗て我が艦隊が、一九〇八年(明治四十一年)に、世界開航の途次、日本に寄港したことがある。そのとき大將は、首席接伴官となつて、我が將士の爲めに盛大なる歡迎宴を張つたことがある。

東郷大將に對する銳き觀察

八月四日の紐育イブニングポスト紙は、大將に對し、銳き觀察を掲げてゐる。それは左の論說に依つて之を判知することが能きる。曰く、

大將の特質的謙讓と、陛下に對する絶對的の忠節とから判斷すれば、彼としては、疑もなく彼の偉功に對して吾々の喋々を好まず、寧ろ其の功績をば、彼の國で云爲されてゐる如くに、單に「御稜威の然らしむるところ」に歸して愆しいに違ひあるまい。何となれば、彼は對馬海戰の報告に於て、其の結果をば、凡て皇威皇徳に依ることを承認してゐるからである。

それは兎も角として吾人の大將を歡迎するに當りては、必ずや其の人格に思を致さなければならぬ。彼は確かに近代稀なる偉大なる海將にして、眞に日本のネルソンたるの名を辱かしめないものであり、又其の沈黙と深謀遠慮に關しては、一層吾人の興味を感じしめるものがある。

されど、此の沈黙なる特性を有するが爲めに、少くも其の天才的力強き人物價値を左右す

るものでもなければ、其の戰略戰術家なることに、毫も疑念を挾む筋合のものでは、無論あり得ない。

吾人は考へ違ひをしては不可ない。彼が極めて寡言なるが故に、あれでは部下の統率が目く行くまい。従つて彼が單なる長官であつたとか、石像型のモルトケであるとか、將た又冷酷なる不感受性であるとか、若しくは驚くべき考案の機械であるとかと云ふ評をするのは、全然謬つたる考察である。

大切なときに沈黙を守ることの却つて價值多きことは、既によく世間に知れ亘つてゐる次の記事が、何よりよく之を立證してゐる。

大將が露艦隊に向つて出征の途に上るに當り、其の旗艦に於ける最後の會議の席上の挿話が即ちそれである。

部將達が、大將の下に集つたとき、其の机の上には、白木の三方があつて、それには三寸五分の短刀が載せてあつた。因に此の短刀は、日本では昔から武士が切腹に使用する習慣のものである。

大將は終始無言で、何等の訓示もしなければ、説明もしない。勿論「日本は汝等各人が、各其の義務を盡くすことを期待する」なんかと云ふやうなことも言はなかつた。

數分間は静寂の中に過ぎた。大將は唯其の短刀を眺めてゐたのみであつた。併し此の眼の暗示だけで司令官始め艦長、其の他の士官達にも大將の意の存するところが分つた。即ち『敗れたら只では歸るな、必ずや此の短刀を用ふべし』の暗示であることが、しみじみと彼等の頭に徹底した。日本の或る著者は、『此の場合、何も云はないでも、日本の將校には分るのである』と書いてゐる。

大將は又出征に臨み、陛下より勅語を拜受した。其の勅答に曰く、

『全艦隊は擧つて其の死力を竭くし、以て能ふべくんば、皇恩の萬分の一に對へ奉らん』と。

對馬海戦に際しても、彼れの命令は極めて簡單であつて、事實數語に過ぎなかつた。曰く、『皇國の興廢は此の一擧にあり、各員一層奮勵努力せよ』と。

惟ふに此の命令程、其の文句通りによく遵奉せられたものが嘗てあつたであらうか。而して未來の日本人が再び此のとき程、死を見る歸するが如き態度をとり得るであらうか？蓋し吾人は之に大に疑を存する。

宜なる哉斯る絶對的命令遵奉者たる部下に對して、彼が之れ以上言葉を費すことは、蓋し無用であつたのであらう。

日本には、或る將校の編纂した日露海戦史がある。其の第三冊までを見ると、部下が如何

に東郷大將に信頼してゐたかが、頗る明瞭に看取せられる。

先づ艦隊の行動を叙する章句を検しても、東京通信員の語を藉りて云へば、『東郷大將の人格が頗るよく之に反影してゐる。即ち其の艦隊の戦術行動を叙するに當り、極めてあつさりとしてゐる、殆んど捕捉し難い程である』。

例へば『艦隊は豫定の如く某港に向つて出港し、而して某日某港に歸港の豫定』だとかの如き記事が充滿してゐる。然かし沈黙を守る長官の所在は、讀者たる士官の目には、明瞭に映じてゐるので、毫も心配はしてゐなかつたのである。

彼は又部局の士官に對し、常に『天佑を信ぜよ』と訓戒してゐたから、此のやうな記事に對しても何等心勞はしてゐなかつた。

兎に角斯かる尠大な戦史を繕いて感心に堪へないことは、日本國民の徹底せる覺りである。即ち對敵行動上探るべき戦略戦術が、凡て東郷大將の意に委任してあらうが若しくは大本營の畫策に依るものであらうが、そんな問題は何れでも構はない。要はそれ等が最善であればよいとした點の如きは、一再ならず戦史の上に立證せられてゐる。

斯る徹底した思想は、恰も一八七〇年普佛戦争に於て、佛國に於ける獨逸の行ふた業績に酷似してゐる。

彼は徒らに冒險的な行動は、決して行はなかつたらしい。對馬海戦の數週間前、日本の偵察部隊は、露艦の通航し來る疑のある地點に派遣せられてゐた。而して其の對馬附近に着するのは、後に實現したよりも、八日程早く豫定せられてゐたのであつた。斯くの如く、露艦隊の來航に備へる爲めには、如何なる手段をも看過することなく、實に寸毫の遺漏なく實施せられてゐたのである。

同海戦に於て東郷大將の戰術の優れてゐたことは何人も疑ふものはない。而して此の一戦に依つて、既得の海上權をいやが上にも確實にすることができたのみならず、最小の損害を以て、露艦隊を殆んど全滅に歸せしめたのである。而して日本の國民は、其の艦隊司令長官たる東郷大將に對し、其の信頼の度を一段と高めるに至つた。因に彼は眞の青年時代を英國の軍艦上に於て基礎的教育を受けた人である。

抑々如何なる艦隊長官と雖も、當日の戰鬪が全く終らざるとき、敵艦隊の全滅を見ずして其の作業を夜間に殘し、單に之を水雷艇隊の行動に委せるが如きは、蓋し之を他の戰史に見することはできないであらう。

大將は右の如き大捷の場合に於ても、其の艦船と人命とを顧慮し、味方の損害を最小に止めることができた。惟ふに之は戰役が一層長びく場合、艦隊の重要なる役目が、他に尙ほ存

すると云ふ、遠大な卓見遠慮に依るものであつたもので、此の點に就ても實に敬服に堪へない。

彼が戦後聯合艦隊を解散するとき部下一般に與へた別辭がある。其の末句に曰く、『勝つて兎の緒を締めよ』と。

既往の日本の歴史に徴しても、陸海軍の孰れなるを問はず、上記の場合の如き献身的行爲に出でたる事例を見ることはできない。

東郷大將の偉業は、管の戰勝の一事に止るものではない。海軍は云ふに及ばず、其の陸軍と共に樹てた、此の戦後の偉勳は、茲に世界の人の眼を覺まし、日本の實力換言すれば、其の偉大さを知らしむるに貢献したことは實に多大なるものがあつた。

從來、アングロサクソンだけが、尊敬すべき人種であると思つて來た人々に向つては、日本の此の一撃に依つて、皮膚の色の違つた人種も、亦白色人種と同様の衣食住に適すると共に思考力もあることが判つて來た。吾人も亦其のとき以來日本人に對しては警戒せねばならぬと考ふるに至つた。要するに右の事實は必ずや近き將來に於て、或る反動時代が來るであらうと云ふことを如實に物語つてゐるものである。

成程一面に於て、領土擴張論者や、世界漫遊記者達は、今でも尙ほ亞細亞諸國特に日本に關

しても何等の顧慮を拂つてゐないやうであるが、吾人は全然之と意見を異にしてゐるものである。併し彼等とても、現在の西洋諸強國が從來とり來つた舊式の自己的非耶蘇教的態度を以てしては、到底其の勢力を亞細亞方面に扶植し得るとは思はなくなつたやうである。西洋諸國が、亞細亞の領土を獲得せんとする時代は過去の夢と化し去つた。何となれば其等の強國も亦既に黄色人種が優に白色人種に對抗し得る實力を有することを觀破したからである。而して其の根據は極めて簡單である。即ち事あるの日、黄色人種は、國家の爲めには、死を畏れぬと云ふだけの事實で澤山であらう。

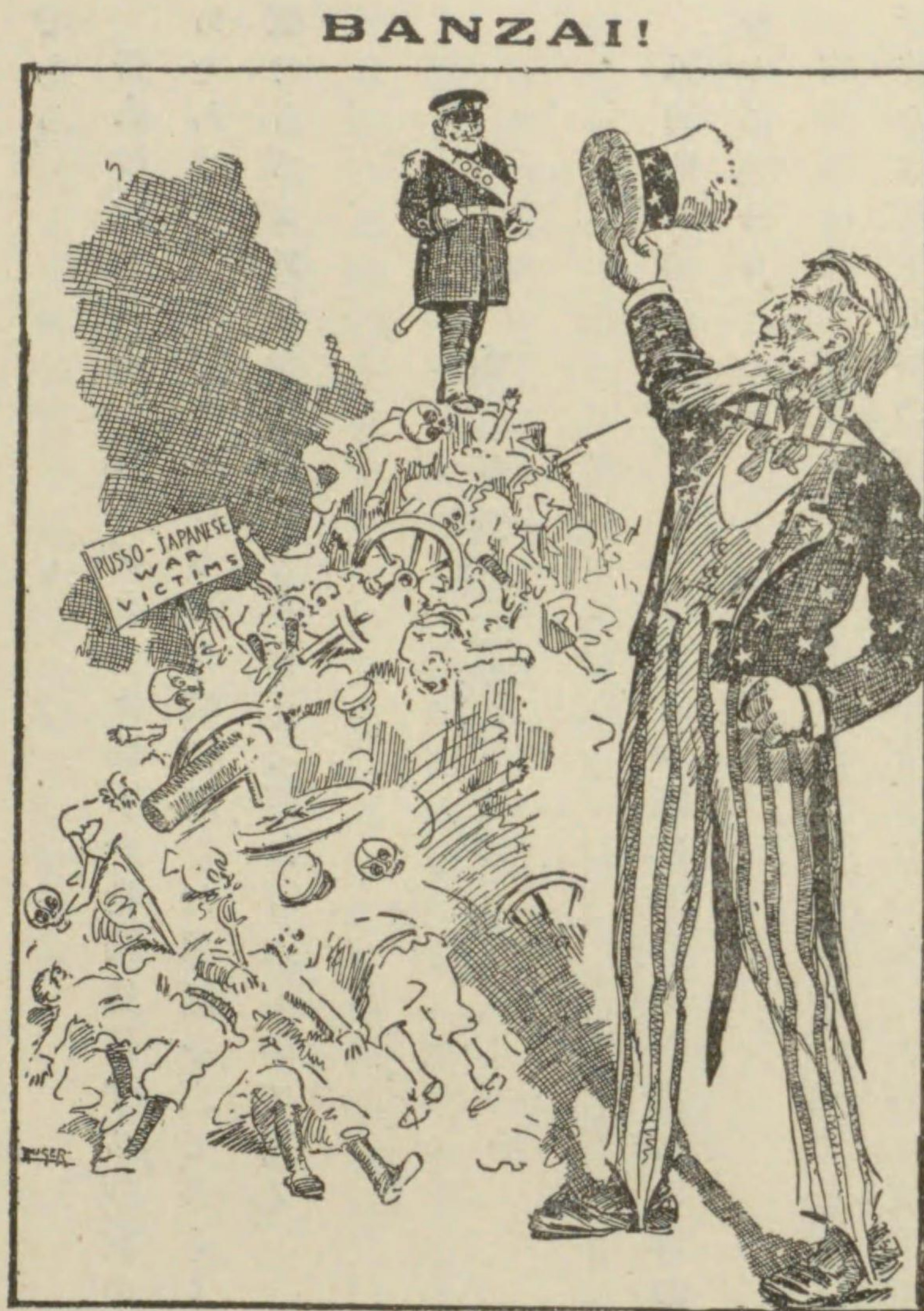
右の事情に基き、亞細亞人は素より阿非利加人と雖も、人種的差別の不合理なる確位を高めて來たであらうから、最早從來の如く白色人種の自由勝手にはなるまい。

議論は横道に這入つたが、兎に角東郷大將は、我が大多數の國民によつて示された親切心と友情をば、恐らく日本の國民に傳へられるであらう。

我が國民の中にも少數の排日論者のあることも承知して居られるであらうし、又野獸の如き癡猛な神經過敏家ももて、何等の機會さへあれば、ないことあること、他を惡評し、惡宣傳をなさんとする人達のゐることもお分りであらう。併し日本でもさうである如く、我が國民の大部分も亦相互に良友たらんことを冀望してゐるのは事實である。

此の國の良心と性質は、恰も大將の聲明と同じで、平和の要求に關しては全然一致してゐる。

大將の來訪と時を同じくして、彼の三國仲裁々判協定が調印されたことは、如何にしても



(畫漫紙米) ! 歲萬將大郷東

偶然とは思はれない。而して該協定は平和の促進に向つて、有效なる準備行爲たることに就て、大將の欣然同意せられたるをも、夙に承知してゐる。

大將の此度の訪問に依つて、日本が此の協定に参加するの日は、一層速かに來らんことを希望する次第

である。

吾人は敢て言ふ。嘗てグラント將軍が貴國に使用するや、其の目的は一に兩國の平和の爲めであつた。提督も亦日本海々戰に示した勇氣を以て、恐らく一意兩國の平和の爲めに、貢獻せらるゝ外他意なきことを信じて疑はざるものである。

寫眞班攻撃は戦争よりも苦しい

八月四日の紐育イブニング・メール紙は、大將來着以後の事項を詳細に記載してゐる。之を左に掲げる。

市長訪問後、大將はホテルに於て、多くの記者や寫眞班を引見した。其の中四人の撮影者が許るされて、大將の寫眞を撮ることゝなつた。大將は支度をして立せられた。一度で済むものだと思はれたらしいが、四人の四色の寫眞が愠しいと云ふので、大將はさも迷惑さうな様子であつた。そこで十五分間も経つたところで、第三國務次官のヘール氏が、之を見兼ねて、記者に注意をして止めさせた。

大將は後に愠う云はれたと傳へられてゐる。

『彼の寫眞屋の熱心には實に閉口した。あれよりも世界の聯合艦隊を向ふに廻はして、戦争する方が寧ろらくだ』と。

それから大將は、軍装を解いて、亞米利加型のフロックコートに着替へ、記者を接見した。尙ほ其のときの服装を詳しく云ふならば、其の洋袴は、灰色の筋のは入つたもので、襟は、折襟ネクタイは黒色のものであつた。

記者達は、豫て準備して來た質問を連發した。大將は凡て副官を介して之に答へられた。因に大將は英語には堪能だが、直接之で話すことを避けられたのである。

記者の質問の主なるものは左の如くであつた。
紐育に就ての感想如何？ 我が國に於て最も興味を感じたものは何か？ 米國民に對する特別の挨拶があるか？ 米國婦人に就ての所懐如何？ 等であつた。(編者註、此等に對する答は、他の記事と重複するを以て之を略す)

大將の止宿せられたニツカー・ボツカー・ホテルでは、當日(八月四日)は祝祭のときの様に、ホテルの外を、大將の爲めに、盛装を以て裝飾した。

其の飾り物の重點は、旭日旗を中心とするものであつた。之は大將の故國の旗に因んだものであることは云ふ迄もない。而して米國旗をば、之を副物として僅かに添へたのみであつた。

又生花も室内に充滿してゐた。特に大將の使用せらるゝ室には、一際目立つて綺麗な花が澤山に並べられてゐた。日本人は誰でも一様に、花を好むさうであるが、大將は取り分け花の愛好者だと云ふので、歡待の意味で斯くは準備せられたのであらう。

豫期の如く大將は、彼方此方の投挿の生花を賞玩しつゝ、始終微笑を湛へて見て廻つてゐた。

米國の寢臺は寢心地がよい

第一日の短い眠りから覺めた大將は、側近の人々に對し、

『昨夜(實は今朝)は實に珍しく快眠を貪つた。米國の寢臺は實に寢心地がよい』と語られたさうである。

大將は朝餐の前に、既に何か清涼飲料をとつて居られた。之れは朝早くから多くの訪問客が詰め掛けてゐるので、食事の爲めに長く待たせるのは氣の毒だからと云ふ親切心から

であつた。

又大將は或る人が『日本人は小食である』と云ふた言葉に對し、之を打ち消された。而して實際に於ても、大將は米國人から見ても腹一杯になるであらうと思はれる分量を、目前喫せられた。従つて食事に非常に長い時間を要した。

此の場合大將は、食事をば自室でとられたのであるが、其のときの献立は左の如きものであつた。

梨瓜、魚類、ハム、紅茶、ロール。

右の朝食が終つてから、其の室を退き、再び軍装に着替へられた。谷口副官も亦同様之に倣ふた。併しポツツ海軍大佐は、公式接待官では私服のモーニング、山高帽の服装の儘であつた。

大將はワシントンに向け、ホテル出發に際し、寫眞撮影のことに關し再び慇懃述べられた。『余は未だ嘗て今回のやうに、一時に澤山の撮影者の來たのを見たことがない。余が生れてからこの方撮つた寫眞の數よりも、今日一日の方が遙かに多かつたであらうと思ふ』と。斯くて立關に出ると又もや、レンズの雨に遭はれた。

巨船ルシタニア號から移乗せられたセネカ號が、今や紐育市に向つて、全速力で遡航しつゝあるときであつた。大將は星空を仰ぐ露天の甲板上で、安樂椅子に、澄まして座を占められた。

誰か知らむ其の足の下には危険至極な、或るものが潜むでるたことを。實は其の甲板を一重距て、下方には、現在世界に於て最も爆發力の強い綿火藥が、二千听ほど貯藏せられてゐるのである。と云ふと不思議のやうに思はれるかも知らぬが、それは此の船の任務上、必要とする二十六個の機械水雷が積まれてゐたからである。

此の艦にそんなものを有つてゐるのは、若しも航海中に、此の艦に敵意を示すものがあつた場合、其の相手の何たるを問はず、その爆發力を借りて、一撃の下に之を打ち沈める爲めである。

尙ほ此の危険物の外に、火藥庫も艦内にあつて、其の中には、備砲四門の爲めに、六十發の彈丸と火藥が藏せられてゐた。

併し大將は、今こんな危険物の上に、座してゐるよりも、今迄にはもつと重大な危機に幾度も遭遇してゐるから、誰かがこのことを知らせたところで、何等吃驚するやうなことはないばかりか、大將の大膽を以てすれば、恐らく微笑を含むぐらゐるが、關の山であつたであらう。

セネカ號の船内で、大將は高峰博士(讓吉)から、ヴァーバック將軍が、日本語が巧みであることを聞かれ、直ちに日本語で談話を交へられた。而して大層愉快さうに見えた。ヴァーバック將軍は、

『自分の父を御承知であるか、彼は長い間貴國にゐた』

と語ると大將は、

『それは一向に存じて居らぬ、多分自分がその時東京にゐなかつたのであらう』
と答へられた。

大將の平民主義

大將は船中で最も評判のよい人であつた。それは大將の應待振りが、深切で又平民的であつたからである。であるから大將の下船せらるゝときなどは、皆寢に就く時刻なるにも拘らず、總員の乗客が舷側に出て、別れを惜み、心からなる萬歳を稱へたことでも分る。

航海中大將は、多くは甲板に出て、逍遙したり、或は簡單なる折椅子に座を占めて、四方山の談話を誰れ彼れとせられるが常であつた。

一等船客の多くの人々が、谷口副官の紹介で大將と談話を交換したが、大將は誰れに對しても決して分け距てがなく、凡て深切丁寧に應對されたので、皆感服して喜んださうである。エルシー・チャニス嬢や、其の母堂も亦其の中の一組であつた。通譯には側に依つて谷口副官が之に當つた。副官は嘗て七年間もエール大學に學んだ人で、中々英語が巧みであつた。チャニス嬢が之を大層稱讃すると、大將は一層悔んで云はるゝには、

『自分もそんな大學にでも往つて、今少し英語が能きると、こんなときにもつと愉快に會話が交換できたであらう』

と述懐を漏らされた。

そこでチャニス嬢が云ふには、

『妾も母も兩人共、まだエール大學に入學したことはない。だから英語も十分でない。ですから大將が紐育で下船されたら、もう一遍英國に引き返へして、眞の學校の門を潜ぐらねばなるまい』

と冗談を發した。

大將財布を遺失す

八月二日(木曜)もう紐育入港に間近の日のことであつた。或る出来ごとが起つた。それは紐育の刃物製造會社の社長エスカストル氏が浴場に於て、一個の財布を拾つた事件である。

氏が之を開いて見ると、其の中には約百磅ばかりの銀行手形と、或る大切さうな書類と、外に名刺が這入つてゐた。而して其の名刺には、評判の高い東郷大將の名が記載されてあつた。

そこで早速甲板に腰を掛けて休息してゐた大將に手渡しすると、

さうであつたか、實はまだそれを氣付かなかつた』

と云はれ、非常に感謝して受取られた。而して云はるゝには、

『今何とも御禮のしようがないが、若し貴下が、日本に來らるゝやうな場合があつたら、此御禮として屹度私の旗艦に乗せて、航海の出來るやうにしよう』と。

平和大使東郷大將

八月四日の紐育イブニング・メール紙は、東郷大將を禮讚して次の如く記してゐる。
 東郷大將は、對馬海峽の一戦に依つて、海上權力を完全に確保し、一國の大資産を獲得した。
 而して世界の列強をして、亞細亞の地面上に引き付けざるを得ない立場に置かしめ、同時に
 日本の位置を引き上げて諸強國の班に列せしむるに至つた。
 今其の偉勳者は、我が國賓として、來遊し其の一步を東海岸に印した。而して我が國民の
 熱心なる歡迎に接してゐる。

彼は其の人格の中に、大戦士、大政治家、大道德家たるの資格を具備してゐる。是等に對し
 て、吾人は最大の敬意を拂はねばならぬと考へる。又事實それに相當するだけの歡待を享
 受されるに違ひなからう。

大將の訪問は恰も重要な時機に直面してゐることを思はせるものである。即ち道義
 上から云つても、彼の入國に當つて、最初に發せねばならぬ吾人の挨拶は、外でもない。大將
 の來着と同時に、我が國は平和の保證として、英佛と共に重要な條約に調印したことを報
 告するの義務がある。而して尙ほ之に加ふるに、彼れの滯在中に、日本も亦之に参加すべき
 ことを、我が國民が熱心に慫慂してゐることを、明瞭に諒解して貰ひたいことがある。

更に云ふべきことがある。彼れの訪問は、他の意味に於ても甚だ重要な一事がある。

極めて最近のことであるが、或る根本的の謀計を企てた輩があつて、日米兩國間に惡感情を
 激發せんとした事實がある。而かも或は戰爭の危險にまで兩國の國交を離間せんとする
 ものがあるやうに見えた。併し現在では、斯かる卑劣なる教唆による不安は除かれてゐる。
 兩國國民は斯かる手段に迷はされてはならぬ。のみならず、世に雨降つて地固まるといふ教
 諭もあるが如く、其の相互の眞の信頼は、又相互の眞の善意に依つて一層緊密を加へて來た。
 されば大將は此の度の訪問に依つて、終始不變の對日好情に關する、我が國民の實情をよく
 玩味されて、歸朝の後、將來一層兩國々民の融和に就て考慮せられんことを切望するもので
 ある。

故に此の際には假りに東郷大將を遇するに、大海將の名稱を以てすることを止め、其の代り
 に平和大使として歡迎するのが至當ではあるまいか。されば吾人は、大將が此の使者の任
 務を果たすことに於て、始めて始めて其の眞の使命の意義があり、又兩國國民の目的が達せられるで
 あらうと考へるものである。

東郷大將を標準として、偉人の鑑別法を學べ

八月四日の紐育イブニング紙は、紐育市長の語を引用して次ぎの如く別方面から東郷大將を稱讚してゐる。

紐育市長ゲノール氏は、大將との訪問を交換したる後、其の所懐を記者に語つて曰く、『余は東郷大將に接し、先づ第一に感じたことは、其の謙遜にして、諸事頗る簡單であることであつた。由來偉人なるものは、決して尊大に身を持つるものでもなく、又多くは人を驚異せしむる態度のあるものでもなく、要するに一見平々凡々に見えるものである。之が偉人の常經であつて、大將の風格亦此派の例に漏れない。

余は此の度の大將の來訪によつて、我が青年達が、前記の點によく留意することを望むものである。換言すれば、偉人の鑑別法は、正に此の人に依つて學び得るものであると、確信する。

第一日紐育市長訪問に際し、大將が其の短軀をホテルの玄關に表はすや否や、直ちに目についたのは、其の服装であつた。大將は白い軍服に、燦たる旭日大綬章を佩してゐた。此のときホテルに止宿してゐる男女の客は、ハンカチーフを振り、萬歳を唱へて彼を送り出した。之に對して此の偉大なる戦士の顔には、微笑が漂ふた。之より先きホテルの前方即ち四十二丁目の北側には、護衛の騎馬巡查隊が整然と並んでゐた。

大將が東立關から歩き出すと、禮式喇叭が劉唳として鳴り響いた。大將は立ち止つて、嚴然沈痛の態度で、之に注目した。其の奏樂が終ると、大將は之に對して、擧手の敬禮を爲し、次で有蓋自動車に客となつた。

騎馬巡查の一隊及び彩旗を有する騎兵が、自動車の周圍を警衛し、秩序整然威風堂々と市廳に向つて行進を起した。

此の日紐育市民は、全部通路に出て敬意を表した。(New York was out to take its hat to the Great Japanese.) だから群集は人道に溢るゝばかりであつた。併し多數の市民は、非常に失望した。と云ふのは、騎馬隊が駈け廻つて、近接を許さないと、大將の乗つた自動車が有蓋車であつた爲めであつて、一目も見ることができなかつたものが大部分であつたからである。斯くの如き事情であつたから、群集は市廳に往けば、目的を達することが能きであらう。

といふので、一齊に之に向つたので、雑沓は一層加はり、取締りは一入増加し、遂に收拾能きなかつた。

此の日大將の顔を一目でも見たといふ人は、市廳の庭園にゐた大群集の中の一部の人々であつた。而してそれも大將が役所の階段を昇るときの僅かの瞬間で、しかもたつた白服の一部を見たといふだけで、よく見たのではなかつた。

双方で答に困る

八月四日の紐育イブニングワールド紙は、セネカ號船中の挿話を書いてゐる。

乗船セネカ號に於て、ポトマック河遡航中大將は種々の事を記者から質問された。當時英佛獨の間に葛藤を生じてゐたモロッコ問題や、日本の露國に對する其後の政策等も其の一例であつた。大將は之には甚だ當惑せられたらしい。そこで谷口副官を介して、

「自分は政治家でないから、そんな問題に答へることは能きぬ。日本の軍人は、貴國と違ひ、一切政治上の問題に觸れることは許されてゐない」

と云ふ意味を述べられたので、それからは世間話に話題が變更せられた。

聽てブルークリンの橋に差しかつた。此度は大將の方から、質問が發せられた。それは橋に關する要目や、其の他科學的のことであつた。今迄は難問を連發して大將を困らした接伴官や歡迎員や、記者迄が、誰れも之に答へる知識がなくて、手持不沙汰であつた。漸くのこと、側近にゐた在留の日本人(編者註高峰博士?)が、之を知つてゐて、大將の意を允たすことが能きたやうな譯であつた。

大將は此の日(八月五日)其の旅舎たる華府のニューウイラードホテルに於て、夙に起きてゐた。それは多くの公式訪問の豫定があつて、前日の紐育にも劣らざる多忙が目前に控へてゐたからである。即ち此の日のプログラムによると、先づ晝間は國務卿海軍卿との訪問交換があり、又大統領への謁見がある。夜間は白聖館に於ける晚餐に臨まねばならぬやうな事になつてゐた。

大將は内田大使を含む彼の一行と共に、二臺の自動車に乗つて、國務卿ノックス氏の公式訪問に出掛けた。之は午前十時會見の約束になつてゐたのである。

大將の通過する沿道には、多勢の群集が之を迎へて、皆帽子を脱して敬意を表した。大將

は之に對し、例の通り微笑を以て會釋した。
斯くて一行は、時間を違へず、國務省に到着し、國務卿の事務室に隣接せる應接間に案内せられた。而して大將は内田大使の紹介で國務卿ノックス氏と會見した。其の間僅かに數分に過ぎなかつた。

ノックス氏は、大將に對し、歡迎の挨拶をなし、且つ我が政府の請を納れて、任けて來訪せられたことを感謝する旨を述べる。

大將と内田大使は、此の懇篤なる挨拶に對し、頗る感謝に堪へないと答辭を述べた。而して此の會見の席上には、ヘール氏、ボッツ海軍大佐及び日本の駐在武官の二、三が陪席した。

此の訪問が終つてから、大將の一行は、徒歩で國務省の建物の東側を廻つて、海軍省に向つた。

海軍省では、長官ウインスローブ氏が、既に待つてゐて、此處でも極めて熱情のある挨拶が交換された。

大將が其處の玄關を出るとき、撮影者の一團が、其の準備をしてゐて、數枚の寫眞を撮つた。此のとき大將は、内田大使を顧みて、二人で微笑を漏らしてゐた。

數百の群集は、廳内にあつて大將の一行の自動車に乗るところを見物してゐた。

大將がホテルに歸るや、間もなく國務卿と海軍卿とが相續いて答禮した。其の他多くの海軍士官も、亦大將に敬意を表する爲め來訪したが、其の中には、數年前戰艦々隊の世界周航の途次、日本に立寄つて歡迎せられたものも多數あつた。而して此等は、ボッツ海軍大佐が一々大將に紹介した。

日本は艦隊よりも東郷大將を大事がる

八月四日の紐育イーグル紙には、ネルソンと東郷大將の比較を論ずる左の記事が載つてゐる。

東郷大將は、昨夜始めて我が國に到着するに當り、短いけれどもあつさりした聲明を吾人に與へてゐる。曰く、

『余は今、米國に來ることが出來て、大層幸福に思ふてゐる』と。

之は日本人特有の感情をよく表はしてゐるもので、其の禮儀に叶ふた、親切な、而して立派な挨拶で在る。

之によると、彼れの訪問は、何等他意あるものではなく、米國に對する單純なる憧憬に過ぎないことを看取能きるのである。

されど一方に於て、我が國民は近代的第一人者たる海の大偉勳者として、彼を歓迎すること、に於て、他の國民と同様の推力を有することも強調したい。

マニラ灣に於ける海戦の結果は、我が國にとり頗る重大の功績を貽した。サンチアゴの海戦も亦重要な役目を果たした。即ち此等の戦捷に依つて、西班牙の運命を決するに至つた。

然れどもマニラ、サンチアゴの兩戦闘に於ては、東郷大將がロゼストウンスキーに對した程、人に於ても、武器に於ても、左程強い敵でなかつたことに留意するとき、其等の勝利は、偉大さに於て後者との間に、大差のあることを認めざるを得ない。

今や、東郷大將を以て、ネルソンに比較することが流行語のやうになつてゐる。然り、ネルソンは、確かに東郷大將のモデルである。

由來日本の海軍は、英國流の戦術即ちネルソン戦術に就て、多大の興味に努力を以て研究して來た。

彼はネルソンを利用することを好んでゐる。并は一九〇五年(明治三十八年)の對馬海戦

に於ける、彼の有名なる信號にもよく表はれてゐる。

其の信號は奇しくもネルソンのトラファールガのそれに酷似してゐる。唯東郷大將のネルソンに似てない點は、一に沈黙寡言であるに反し、他は寧ろスピーチが自慢であつた點だけである。

大將はネルソンと同様、其の戦術に於て、頗る尖鋭であり、驚異的であり、又慎重熟慮の點に就ては、實に其の堂奥に入れるの概がある。之に反し、一たび決定せる目的を遂行するに當つては、其の果斷は、何ものも妨ぐることを得ないもので、若し夫れ敵の強弱の如きに至つては、全然彼れの念頭になかつた。

尙ほネルソンに似たる今一つの點は、彼が長官としての使命觀である。彼は長官として敵に打撃を與ふるくらゐのことを以て、足れりとするものでなく、必ずや之を全滅せしめねば任務遂行と考へてゐない風がある。

日本海、海戦は、ナイルの海戦と共に、此の點に於ては、最も傑出したる實例と謂はねばならぬ。

茲に特筆せねばならぬことは、東郷大將の露艦隊全滅に鑑み、之を劃期として、世界の海軍が革命的の進展を來したることである。即ち現在では、三笠級を遙かに超越すべき弩級戦艦

なるものを産出するに至つた。飛行機の出現は又此の弩級戦艦を困惑に陥れんとする。新式の砲煩は一層強力な火薬を用ふるやうになり、装甲板は従來其の比を見ない堅甲のものとなつた。斯くして攻撃も防禦も、其の戦術に顯著なる大變化を來した。併し兎に角、日本の大捷は熱練なる部下の上に、此の短軀の人を置いて、十六箇月もの長い間、旅順の港に對して實力的封鎖を遂行し、黒木、乃木の諸軍を無難に戦地に送り、以て島帝國を泰山の安きに置き、而して日本今日の位置と榮譽とを獲得した。

我が國民は、日本が戦艦々隊よりも重しとする此の偉人を、今日我が目前に迎へたことを衷心欣んでゐる。何となれば彼は平和の大使として、遠路を厭はず、東の若き國より態々西の老國へ、駕を枉けて訪問されたからである。

決定された旅行日程

八月四日の紐育スタンダード・ユニオン紙は、第三國務次官ヘール氏より發表されたものとして、大將の旅行日程に關し、左の如く報道してゐる。

我が國に於ける東郷大將の今日以後の滞在日程、其の他のプログラムは左の通りである。

八月四日(金曜)午後三時三十八分華府に向け紐育發、華府停車場には大統領代理としてバ

ツツ海軍少將出迎の豫定

八月五日(土曜)六日(日曜)七日(月曜)八日(火曜)華府滞在故ワシントン大統領の展墓海軍工廠視察、其の他諸種の宴會夜會等

八月九日(水曜)バルチモア滞在

八月十日(木曜)費府滞在

八月十一日(金曜)乃至同十六日(水曜)紐育滞在

八月十七日(木曜)十八日(金曜)ボストン滞在

八月十九日(土曜)ナイヤガラ瀑布見物

それより米領加奈陀を横斷し、英領加奈陀の晚香坡に出て、同地より歸國の途に就く豫定

大將に願つて兩國の友情を厚くせよ

八月四日の紐育スタンダード・ユニオン紙は標題の意味を強調してゐる。曰く、茲に東郷大將を迎ふるに際し、米國紙が擧つて之を歓迎し、深厚の敬意を拂ふ所以のもの

は、素より海の大偉人たるが爲めではあるが、單にそれのみに止らず、之を以て我が國民の日本人に對する友情の一層厚きを、如實に示さんとするが故に外ならないのである。

米國艦隊が嘗て世界周航の途次、日本に寄港したとき、享けた異常の歡待に對し、吾人は此の際之に關する感謝の念を披瀝すべき機會を得たるを喜ぶものである。

今や國民の賓客として、來遊せられた名高き大將に對し、其の滞在が短時日なるが爲めに十分の優遇が能きないのは、已むを得ないことで、従つて前記の報酬の意味に添はざることあるべきは、決して他意あるにあらず。此の點寛容を乞ふ次第である。

大將は東洋のネルソンと稱せられてゐるが、其の尊稱は確かに適當と考へる。

大將は從來とても日本海軍の守護神と崇拜せられてゐた。併し彼をして世界に名をなさしめたのは、實に日露戰爭に於ける大勝に歸せざるを得ない。此の事實が、目下我が國人の大將を歡迎し優待し、尊敬してゐる所以である。而して大將が我が國を去る前に、其の來訪の効果が表はれて、日米兩國の友誼が、一層緊密になるであらうことは、毫も疑ふ餘地はない。

東郷大將は日本の未來の國運を定むる人

八月四日のバルチモア・イブニング・ニュース紙は左の記事を載せてゐる。

我が國民として斯かる著名なる偉人を、國賓として迎へることは、之を一時の興味とのみ考へることは當らない。必ずや此の機會を利用して大に日米國交の融和に資せなければならぬ。彼は最早單なる人ではなくて、日本將來の運命を支配する大立物であるからである。

我が西部即ち加州方面に於ては、屢々日米の關係に就て面白からざる事態を生ぜしめたことがある。且つ日本が壓倒的に露西亞に勝つて以來といふものは、日本の行ふべき次の戰爭は、其の相手は屹度米國であらうと豫言するものも尠くない。

併し日本の指導者が、一たび我國民の平和眷々たる實情を見るに及んでは、決して其のやうなことを考へる筈がない。

假りに其の疑念を晴らすことができない場合でも、我が資源の豊富國の富力及び日進月

歩の國運の發展に鑑みると、必ずや戰爭を絶対に望みのないことゝ覺るに相違ない。抑々一國を暗して戰ふといふことは、畢竟其の國の滅亡を覺悟してかゝらねばならぬのである。

卓越なる見識を有する東郷大將は、今回の視察に因り、將來我が國との間に起らんとする繫争を、武力に依つて決せんなどゝ云ふ考を起さないと確信する。のみならず吾人は、彼が兩國の交友の益々敦厚なるの一層必要なることを其の國民に鼓吹するであらうことを疑はないものである。

大將を多くの市民に見せたい

八月四日のバルチモアのサン紙は、紐育の例に懲りてか、同市では成るべく多くの人に、大將を見せたいといふ市長の方針其の他を掲げてゐる。

東郷大將は次の水曜(八月九日)午前十一時にワシントンから當市着、歓迎委員出迎へ直ちに自動車で市廳に案内せられる豫定である。

市廳では代理市長フバート氏が、公式に其の訪問を受け、其の席上で市長及び其の他の公吏が歓迎の意を表することになつてゐる。

昨日開かれた市會では、月曜(七日)の午後に歓迎の日程を確定することに決まつた。併しスバローポイントの造船所視察の機會を作ることゝ、一行を船で送ること及び同船内でランチを供することゝは、略ほ確定してゐる。而して午後三時には、費府に向け當地を出發せらるゝであらうから、市内見物は極めて短時間に過ぎないであらう。之は前記造船所の往復に、比較的長時間を要するから、已むを得ないことである。

されど歓迎委員會では、出来る限り市内の名所舊蹟は残らず案内する積りであるし、又其の道筋は、成るべく市民の便宜を圖り、多くの人に一行の歓迎が心地よく能き又残らずの人に大將の顔を一目でも見せたいといふ見地から、都合のよい街路を選択することになつてゐる。

東郷大將の名は未だに覺えてゐる

左記は八月四日附バンゴールのコンマーシャル紙の記事である。

今回締結せられた英米佛三箇國の仲裁々判條約は、將來三國間に流血の慘事を見ない爲

めの第一歩でもあり、動機でもあることは、最も重要視されねばならぬ點である。されば他の列強も、之に倣ふことが、當然必要のこと、考へる。然り、最早二、三の國は之に參加の希望があるやに傳へられてゐる。

素より如何なる條約を以てしても、戰爭を絶対に防遏することは能きないであらうが、今度の條約の如きは恐らく最も有效なるもの、一つであつて之なくば、戰爭になるかも知れぬといふ場合に、之を未然に防ぎ得ることが、屢々なり得ること、思はれる。

偶然にも此の條約の調印せられた日が、恰も東郷大將の來訪の第一に相當したといふことは、奇とすべきが如くではあるが、兎に角此のことが日本に新しく好印象を與ふことを確信する。

此度の來訪者が、世界的の英雄であることは、十分に國民の承知するところであつて、出来るだけの尊敬を以て迎へるべきである。

現在日本の陸軍の將軍にも過去に於て大功を樹てた人は澤山ある。が、忌憚なく云へば今では外國人の記憶から消えてゐる。然るに東郷大將の名前だけは、未だに新しい。之は要するに、大將に依つて異常の發達をなした日本の海軍が、日頃優越を以て誇つてゐた西洋の海軍の脅威となつてゐるからであらう。

大將の聲明は多言に勝る好意である

シカゴ市のレコード・ヘラルト紙は、八月四日の紙上に左の記事を掲げてゐる。

東郷大將は近代勃興の日本創造者の一人であり、日露戰爭の英雄であることも、共に稱讃すべきではあるが、茲に尙ほ彼れに對して、敬意を拂はねばならぬことは、其の精神の崇高なる點である。彼は國家に對し絶對の献身者であり、奉公の念固く勇敢にして、自信力強く、且つ人道的であり、道徳家である。

其の沈黙寡言にして飾りなく、而かも其の儼然たる態度は、實に近代的日本其の儘をよく代表してゐる。

彼れが米國々民に向つてたしなる聲明書は、其の言ふ處極めて簡單ではあるが、意味深長にして實に百萬言に勝つてゐる。曰く、

『米國民は日本の良友であり、且つ開國の啓發者である』と。

英國は日本の同盟國である。併し今日では其の條約は大に形を改めてゐる。即ち日本

政府をして我が國との或る協定を認めてゐる。尙ほ詳しく云へば兩國間に締結せられたる一般的且つ無拘束の仲裁條約を締結したことである。

此の協定は、延て日本と我が國との交友を一層厚くするもので従つて又從來好戰論者として叫ばしめた、日米兩國の悪感情をば吸収し盡くすに至らしめたものである。

嘗て戰爭煽動者達は、太平洋の支配權や、移民問題や其の他で以て、今にも兩國の間に争端が開かれ、若しくは戰爭が始まるであらうなど、屢々云つたものであるが、そんなことは實に荒唐無稽の甚しきもと化し去つた。

東郷大將は、僞善的の貢物や、空疎な賜物を携へて來るやうな人ではない。

彼は眞に我が國の賓客である。而して彼が我が國を稱讚し、我が國を以て驚異すべき國であると述べてゐるのは、胸中から出た至誠の發露である。

米國民は之に酬ゆるに、宜しく亦至誠を披瀝し、以て彼れ一個人に對し、且つ日本の一大代表者に對し、最高最深の歡迎をなすべきである。

東郷大將を目の前に見るの喜び

八月四日のグラント・ラビッツ市のプレス紙は次の如く述べてゐる。

東郷大將の訪米に依つて、米國人たる吾々が、彼を目前に見ることを得たのは何よりも喜ばしいことである。

吾々は、今日迄日露戰爭の繪艸紙か、何かに依らなければ、大將の肖像は見られぬものと諦めてゐた。

嘗て旅順口の沖合に、其の聯合艦隊を指揮してゐたのは、實に彼であつた。而して彼はそこに露西亞の旗艦ペトロポロウスクを轟沈した。更に又近代的大海戰に露國の艦隊を全滅したのも此人であつた。

大將の訪問は、我國の現在にとりては、非常に意義深いことであつて、單に世界的驚異の或るものを眺めると云ふだけのことではない。

大將の此度の訪問は、取りも直さず、東帝國人の崇拜措く能はざる最高の人から、此の國への友情を齎すべき重要な使命を帯びてゐるものである。自ら我が國と日本とは、公的外交に於ては、平和を裝ふてはゐるが、不幸にして我が國民の一部には、不愉快極まる暗流が流れてゐる。兩國國民を紛糾に導かんとしては、事實である。

併し此の訪問は、極めて公平にして親切なる精神を以て之を享けねばならぬ。而して前記表面的の友情をば、此の際眞の友情に依つて堅く結ばれるやうに改まる必要がある。

嘗て我が米國の艦隊が彼の地に滞在した場合に受けた彼の甚大な歓迎を追想するとき此度の好機を逸することなく、東郷大將に對して大に酬いなくてはならぬ。

先年我が駐日大使オブリエン氏が、多大の忍耐と光輝ある外交接渉で以て、日本に對して良好なる感情を與へたことを想起するとき、更に吾人は此の際再びあの状態に復活するの前提をも感ずるものである。而して當時オブリエン氏の日本に對してとつた見解が、眞實なりしことを、今現實に日本に示して以て彼れの疑を解かねばならぬ。

彼は何れの點に於ても第一人者

八月四日のホリヨークのツランスクリップト紙は、左の如く述べてゐる。

東郷大將は、日本人中戰爭に於て第一人者であるばかりでなく、平和愛好者としてもさうであり、將た又崇高なる精神の保持者としても他に比肩すべき人はないのである。而して今其の人は我が國土に其の尊き一步を印した。彼は引き続き、或は國內の顯著なる各地を視察し、或は歡迎宴に臨み、兎に角茲十數日を此の國に過ぐす豫定である。

東郷大將の位置は日本では他の戰略戰術の大家、大山、乃木、野津、奥大將に比し少し上位に置かれてあるに過ぎない。此等の人々は素より孰れも多年露西亞が實業的侵略主義を以て、滿韓に地歩を占めんとしてゐた大野心をば、根本的に覆へした功勞者である。

然るに獨り東郷の名のみが、世界的に斯くの如く有名になつたのは何故であらうか？それは云ふまでもなく、日本海々戰に於てあのやうな短時間に、あのやうな未曾有の大勝を勝ち得たといふ一點に歸せざるを得ない。

實に東郷なる主役は、對馬沖の檜舞臺に於て、思ひがけなき電氣仕掛の彩光裝置の中に這入つて、其の藝術の奥儀を如實に觀衆の前に表顯したものである。而して露西亞が果敢なき望みをかけてゐた勝利を滅茶々に敲き破り、其の艦隊を黃海の藻屑と化し去つたのである。

此の結果滿洲への交通は絶對の安全が保證され、従つて其の軍需兵員の輸送は一層容易となつた。之に反し露軍は専ら貧弱なる鐵道輸送力のみを依らねばならぬ羽目に陥つて滿洲に於ける彼我が對勢は、頓に大變化を招來した。而して光輝ある最後の戰勝の榮冠は遂に日本の手に歸した譯である。

實際のことを云ふと此の大海戰のあるまでは、東郷の名は左程有名でなかつた。而して